

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」

浄土—深い闇が人間の尊さを教える—

親鸞仏教センター所長 本多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」では、2006年11月から、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」をテーマに新たに講座を開講し、その第1回から第3回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第1回（通算第52回）では、『大無量寿経』を読むにあたって、第2回では、『大無量寿経』のもつ意味について、そして第3回では、出世本懐の真実教について、それぞれセンター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者との間で活発な質疑応答がなされた。

ここでは、先に行われた第1回の問題提起からその一部を紹介する（2006年10月31日開催の第4回シンポジウムの報告は、本紙12頁を参照ください）。（越部良一）

講座開催の趣旨

現代文明の溢れる人間社会を生きているものにとって、入手できる情報の範囲はずいぶん広がってはいる。しかし、生まれてから死ぬまで、それぞれの人が与えられる自己の状況に、自分自身が納得し、こころから頷けるかというなら、決してそうではない。一般的な条件と、ことさらに自分に起こってくる事件や事実との間には、どう考えても不条理だとしか考えられない落差が出てくるからである。その落差を、仏教的表現では「宿業因縁」と教えるのであるが、この宿業因縁を自己に必然の事実であると引き受けることは容易ではない。その落差の譬喩的に表現するなら、「届かない彼方」とか「見えざる背景」と

か、あるいは「自己に負荷されている祖先の業報」とかというのであろう。これは、理知分別の計数には決して翻訳できない人間の条件なのである。しかもそれが、現実のわれらの生存を厳粛に規定している。この宿業因縁の圧迫から解放しようとする要求が、「浄土を求めさせる要求」の深みにあるのではなかろうか。（本多弘之）

人間＝闇を抱える存在

人間としての知恵が人間を苦しめる。その一番もとにあるのが、自分が自分を可愛いという思い、自我愛です。自我を感じて、自分に苦しみはじめ、自分の分別にもがくわけです。動物には、そういう苦悩がない。大体、私は犬を飼っているのですが、犬が睡眠不足に悩む姿など見たこともない。人間だけが自分の意識に苦しむ。ですから、自殺も人間だけでしょ。人間がそういう闇をもっているから、闇を止めさせようというのが、科学的発想、医学的発想だと思うのです。闇をもっていたら、それを薬で消しましょう。眠れない、それなら眠り薬をあげましょう。そういう方向です。

けれども、私は逆に、人間だけが深い苦しみを持ち、深い闇をもっているということが、人間の尊さであると教えるのが、宗教だと思うのです。そういう闇を孕んで生きていることが、人間が宗教を求める原因でもあり、そして宗教に出遇うことによって、その深い闇を超える。だから仏教に触れてみると、仏教の本質をいただいてみると、ああ、人間に生まれてよかったなど。

人間は闇を抱える存在であるということを、よくよく見つめると、闇がなくなることはない。人間の闇は人間存在に深くはりついている。浄土教という教えの、浄土を求めずにおれないという心情は、実は、浄土でない生命を人間は生きているということです。悲しみと苦しみを感ずる人間。つまり、人間は煩悩の生命を離れることができない。いくらごまかそうとしても、どこかで、ちくりちくりと突いてくる不安。比喩的に言うなら、人間の後ろに影があるように、いつも人間の闇が影としてついている。影がないということは、存在の意味が薄いということです。存在が濃ければ、影も濃いわけです。そういう意味で、「浄土」という言葉を出して、しっかりと教えの言葉を依り^よ処^{どころ}にしながら、宗教の教える意味をいただき直してみたいと思うわけです。

■ 人生を引き受ける手がかり

私はとても皆さま方の要求に応えとか、皆さまがもっている問題にお答えするとかということはできません。答えはないのです。答えを要求して聞くということが^{まんえん}蔓延して、いまの日本の文化になってしまっています。これは本当に悲しいことだと私は思います。なぜこの世に、いま私が生まれてきたのか。答えはない。不可思議なのです。不可思議の生命なのだ

けれど、ああ、この生命がありがたかったという、そういう感動をもたらしものに出遇いたいというのが、宗教を求める心だと思います。

それは一人ひとりが自分で考えて、自分で探すしかない。一人ひとりが出遇うしかない。その出遇った表現が、「ひとえに親鸞^{いちにん}一人がためなりけり」(『歎異抄』)なのです。親鸞聖人は、無限なる大悲が十方衆生を^{うるお}潤そうという願いが、私一人のためにあったのだと領いた。そういうことが、あとから尋ねる私どもにとって手がかりになるし、これに出遇うことが本当にありがたいと思うのです。

ですから、私のこのつたない営みが、皆さま方に答えを与えるというのではなくて、ご自分がご自分の人生を引き受けていく手がかりの一端にでもなればと、やらせていただこうと思っているわけです。私の話のなかに、一つでも、一語でも、何か気にかかる言葉が残ったら、それが手がかりです。きっと何かあるに違いない。この智慧は、私の知恵というより、親鸞が出遇った智慧であり、三世諸仏が伝えてきた智慧であり、尊い經典として、無数の方々が命がけで伝えてきた言葉の歴史ですから、きっとそういうところに、皆さまが手に入れることのできる言葉があるだろうと、私は信じております。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

公開の本講座は、どなたでも聴講(無料)いただけます。

記

日時：2007年3月27日(火)午後6時30分～9時
4月は休講となります。

5月 8日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

参考図書：『真宗聖典』(東本願寺出版部発行)

ご希望の方は、下記にてご注文ください。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

お知らせ

過去5年間の「親鸞思想の解明」では、「浄土—^{じぶくせ}濁世を超えて、濁世に立つ—」をテーマに、47回の講座を開催いたしました。本多所長の講演記録の詳細内容は、『現代と親鸞』(第2号～第12号〈2007年6月1日発行予定〉ただし、第6号を除く)に収録されています。

ご購入(単号あるいは継続購読)希望の方は、親鸞仏教センターまで、電話・ファックス・はがき・メール等でお申し込みください。各号共に1,200円(送料込)です。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」

浄土—深い闇が人間の尊さを教える—

親鸞仏教センター所長 本多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」では、2006年11月から、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」をテーマに新たに講座を開講し、その第1回から第3回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第1回（通算第52回）では、『大無量寿経』を読むにあたって、第2回では、『大無量寿経』のもつ意味について、そして第3回では、出世本懐の真実教について、それぞれセンター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者との間で活発な質疑応答がなされた。

ここでは、先に行われた第1回の問題提起からその一部を紹介する（2006年10月31日開催の第4回シンポジウムの報告は、本紙12頁を参照ください）。（越部良一）

講座開催の趣旨

現代文明の溢れる人間社会を生きているものにとって、入手できる情報の範囲はずいぶん広がってはいる。しかし、生まれてから死ぬまで、それぞれの人が与えられる自己の状況に、自分自身が納得し、こころから頷けるかというなら、決してそうではない。一般的な条件と、ことさらに自分に起こってくる事件や事実との間には、どう考えても不条理だとしか考えられない落差が出てくるからである。その落差を、仏教的表現では「宿業因縁」と教えるのであるが、この宿業因縁を自己に必然の事実であると引き受けることは容易ではない。その落差の譬喩的に表現するなら、「届かない彼方」とか「見えざる背景」と

か、あるいは「自己に負荷されている祖先の業報」とかというのであろう。これは、理知分別の計数には決して翻訳できない人間の条件なのである。しかもそれが、現実のわれらの生存を厳粛に規定している。この宿業因縁の圧迫から解放しようとする要求が、「浄土を求めさせる要求」の深みにあるのではなかろうか。（本多弘之）

人間＝闇を抱える存在

人間としての知恵が人間を苦しめる。その一番もとにあるのが、自分が自分を可愛いという思い、自我愛です。自我を感じて、自分に苦しみはじめ、自分の分別にもがくわけです。動物には、そういう苦悩がない。大体、私は犬を飼っているのですが、犬が睡眠不足に悩む姿など見たこともない。人間だけが自分の意識に苦しむ。ですから、自殺も人間だけでしょ。人間がそういう闇をもっているから、闇を止めさせようというのが、科学的発想、医学的発想だと思うのです。闇をもっていたら、それを薬で消しましょう。眠れない、それなら眠り薬をあげましょう。そういう方向です。

けれども、私は逆に、人間だけが深い苦しみを持ち、深い闇をもっているということが、人間の尊さであると教えるのが、宗教だと思うのです。そういう闇を孕んで生きていることが、人間が宗教を求める原因でもあり、そして宗教に出遇うことによって、その深い闇を超える。だから仏教に触れてみると、仏教の本質をいただいてみると、ああ、人間に生まれてよかったなど。

人間は闇を抱える存在であるということを、よくよく見つめると、闇がなくなることはない。人間の闇は人間存在に深くはりついている。浄土教という教えの、浄土を求めずにおれないという心情は、実は、浄土でない生命を人間は生きているということです。悲しみと苦しみを感ずる人間。つまり、人間は煩悩の生命を離れることができない。いくらごまかそうとしても、どこかで、ちくりちくりと突いてくる不安。比喩的に言うなら、人間の後ろに影があるように、いつも人間の闇が影としてついている。影がないということは、存在の意味が薄いということです。存在が濃ければ、影も濃いわけです。そういう意味で、「浄土」という言葉を出して、しっかりと教えの言葉を依り^よ処^{どころ}にしながら、宗教の教える意味をいただき直してみたいと思うわけです。

■ 人生を引き受ける手がかり

私はとても皆さま方の要求に応えるとか、皆さまがもっている問題にお答えするとかということはできません。答えはないのです。答えを要求して聞くということが^{まんえん}蔓延して、いまの日本の文化になってしまっています。これは本当に悲しいことだと私は思います。なぜこの世に、いま私が生まれてきたのか。答えはない。不思議なのです。不思議の生命なのだ

けれど、ああ、この生命がありがたかったという、そういう感動をもたらしものに出遇いたいというのが、宗教を求める心だと思います。

それは一人ひとりが自分で考えて、自分で探すしかない。一人ひとりが出遇うしかない。その出遇った表現が、「ひとえに親鸞^{いちにん}一人がためなりけり」(『歎異抄』)なのです。親鸞聖人は、無限なる大悲が十方衆生を^{うるお}潤そうという願いが、私一人のためにあったのだと領いた。そういうことが、あとから尋ねる私どもにとって手がかりになるし、これに出遇うことが本当にありがたいと思うのです。

ですから、私のこのつたない営みが、皆さま方に答えを与えるというのではなくて、ご自分がご自分の人生を引き受けていく手がかりの一端にでもなればと、やらせていただこうと思っているわけです。私の話のなかに、一つでも、一語でも、何か気にかかる言葉が残ったら、それが手がかりです。きっと何かあるに違いない。この智慧は、私の知恵というより、親鸞が出遇った智慧であり、三世諸仏が伝えてきた智慧であり、尊い經典として、無数の方々が命がけで伝えてきた言葉の歴史ですから、きっとそういうところに、皆さまが手に入れることのできる言葉があるだろうと、私は信じております。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

公開の本講座は、どなたでも聴講(無料)いただけます。

記

日時：2007年3月27日(火)午後6時30分～9時
4月は休講となります。

5月 8日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

参考図書：『真宗聖典』(東本願寺出版部発行)

ご希望の方は、下記にてご注文ください。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

お知らせ

過去5年間の「親鸞思想の解明」では、「浄土—^{じぶくせ}濁世を超えて、濁世に立つ—」をテーマに、47回の講座を開催いたしました。本多所長の講演記録の詳細内容は、『現代と親鸞』(第2号～第12号〈2007年6月1日発行予定〉ただし、第6号を除く)に収録されています。

ご購入(単号あるいは継続購読)希望の方は、親鸞仏教センターまで、電話・ファックス・はがき・メール等でお申し込みください。各号共に1,200円(送料込)です。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」

大乘仏教の人間像

—菩薩とは、目覚めようとして生きる存在—

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」の第6回から第8回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第6回では、「諸仏の国」について、第7回では「諸仏護念」について、そして第8回では「魔、声聞・縁覚、滅度」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第4回からその一部を紹介する。

(嘱託研究員 越部良一)

■ 普賢の徳を修する

『無量寿経』（『大無量寿経』）の教えを説き始める一番最初に、この教えを誰が聞いたか、聞いた人の名前が並べられています。そこに、お釈迦さまの時代の上^{じようそく}足の仏弟子たちと並んで、大乘の菩薩方が出されてくる。その筆頭に「普賢菩薩」の名が出され、そして「みな普賢大士^{だいじ}の徳^{した}に^{ぎようがん}違^だって、もろもろの菩薩の無量の行願を具し一切功德の法に安住せり」（『真宗聖典』2頁、東本願寺出版部。以下、『聖典』と略称）と。普賢というのは、大乘仏教の物語上の人物で、歴史的人物ではないのですが、この名前が『無量寿経』の教えを聞く菩薩たちの筆頭に出されているということが、この經典のひとつの性格を示しているのではないかと思います。

親鸞聖人は『教行信証』のなかで、行を^{あらわ}顕して、南無阿弥陀仏が人間の心を開くときには、^{しゆか}衆禍の波転ず」（『聖典』192頁）、諸々の^{わざわい}禍の波を転じて、「光明の広海」（同）に浮ぶのだと。非常に比喩的な表現ですが、名のはたらきを信じて、名が身に響いてきたならば、いろいろな禍を転じ、苦悩を転ずる、その

苦悩の闇が晴れて、光の海に浮かぶような存在になる。そのときには「普賢の徳に遵うなり」

（同）と、この「普賢」という名前を出しているのです。親鸞は、この經典が語る普賢というあり方こそ、人間が本当に成るべきあり方であり、われわれのような愚かな罪惡の深い人間が実現することができるあり方として、この名前を出してくるわけです。

普賢という名前については、本願の二十二番目の願、非常に大事な願なのですが、そこに「普賢の徳を修^{しゆじゆう}せん」（同19頁）ということが出てきます。それはどういうことかという、浄土に生まれるということは、生まれて終わりなのではなくて、今度は、あらゆる世界に行ってはたらかないと。われわれからすると、苦悩の場所が嫌だから、浄土というすばらしい場所があるならいこうかということでしょう。ぬくぬくとあたたかい状態にとどまれるのではないかというのは、苦悩の生命を生きている人間の逃避的感情ですね。そういう人間が要求した浄土のイメージは、そこへいったらいつまでも「ゆっくり休んでください」と申辞でよく言うような、楽しく、また熟睡できるような場所です。そういうイメージで呼びかけられていてみたら、^{あにはか}豈図らんや、「自分で、どうぞはたらかなさい」と、こう言われる場所になる。言われるというよりも、自分でそう^{ほう}欲する。その力は阿弥陀の力である。エビがころもを付けられた天ぶらになるように、浄土に触れたら、阿弥陀のころもで守られて、どこへでもいける。そこにいるよりも、むしろもっとはたらかたいというふうに、立ち上がっていく。そういう^{すがた}相として、普賢の徳を修するということが言

われるのです。

■「無上尊となるべし」

菩薩さまという偉い人だということになってしまっているのですが、菩薩というのは、もともとの意味は、目覚めようとして生きる存在を言うのです。菩薩は、特に大乘仏教の人間像だと言われますが、個人が個人的にたすかるというよりも、人類の苦悩を背負った個人が、人類的苦悩を克服する。そういう歩みが「菩薩」と名づけられる。

「常行大悲」、常に大悲を行ずるという言葉がありますが、普賢菩薩のひとつの行為に、「常行懺悔」ということがあるのだそうです。過去の罪だけではない、現在の罪、未来の罪、これを常に懺悔すると。こういうことをもって行とするような菩薩を、大乘の菩薩方の一番初めに出して、そして「一切功德の法に安住せり。十方に遊歩して権方便を行じ、仏法の蔵に入りて彼岸を究竟し、無量の世界において現じて等覺を成じたまう」(同2頁)と、ずっとそうした菩薩の行として展開されてきます。

そして、次に「兜率天に処して」(同)という言葉が出てきます。兜率天というのは、インドの天の一番高みにある天の名前だと聞いていますが、その兜率天で「正法を弘宣」(同)していたのが、「かの天宮を捨てて」(同)、その兜率天を捨てて、「神を母胎に降す」(同)と。「神」は精神という意味で、母親のお腹のなかに降りてきたと。そして「右脇より生じて現じて七歩を行ず」(同)と。これは仏伝にならっているわけですが、ここでは「みな普賢大士の徳に遵って」という文脈で出てきていて、大乘の菩薩方の姿を語っているので、直接、お釈迦さまのことを語っているわけではない。お釈迦さまが生まれてきたときには、生まれた途端に七歩歩んで、「天上天下唯我独尊」と言ったという伝説がありますがけれども、ここでは、「声を挙げて自ら称う。『吾当に世において無上尊となるべし』と」(同)。

これは文学的な表現ですから、どう感じ取るかというのは、人によって違うのかもしれない

んが、兜率天、これは天のなかの天、一番楽しい天だと言われている。一番寿命が長いし、一番美しいし、一番透明である天。そういう天にいた存在が、この五濁悪世に降りてきているのだという、そういう人間像です。そして、ここに生まれて生きているということは、無上尊と成る、仏に成るということだと。仏陀の覺りの世界、苦悩を超えたあり方にかえることだと。これは人間存在として生まれた、一人ひとりの生命に、仏陀が呼びかける課題が与えられているということだと思うのです。

われわれは「俺の人生は、俺が苦しんでいればいいのだ」と思っている、仏陀が呼びかける衆生、「苦悩の衆生よ」と呼びかけている相手は、皆、実は一番楽しい世界、一番美しい世界のいのちをあえて捨てて、この苦悩の生命に來たのだと。この苦悩の生命をいただいて、そこで何より尊いものとなるのだと。われわれはこれを読んで自分のこととは思わないし、自覚できない。「ああ、そういう偉い人もいるのかな」というくらいにしか思わないけれど、実は、普賢大士という名前は、われわれと無関係ではない。こういう菩薩になるべく、われわれは教えを聞き、教えに出会い、そうすれば必ず、普賢大士の徳に遵うことができるのだという呼びかけです。こういう課題が与えられてあるということを、まず、この普賢大士の功德のところで、われわれに暗示しているのではないかと思うのです。(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

公開で開催の本講座は、自由に聴講(無料)いただけます。

記

日時：2007年 9月 休 会
10月2日(火)午後6時30分～9時
11月1日(木)午後6時30分～9時
場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分
テキスト：「真宗聖典」大・A5判 ￥3,500
小・B6変形判 ￥3,000

ご希望の方は、下記(京都・東本願寺出版部)まで。
TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211
<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」

人間本来のあり方とは何か

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」の第9回から第10回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第9回では「横超—真宗における超越とは」について、第10回では「光顔魏巍—釈迦仏の出世本懐」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第7回からその一部を紹介する。（研究員 羽塚高照）

■ 諸仏に護念される身になる

『無量寿経』（『大無量寿経』）を説き始めるその会座に集う菩薩方について語っている段に、「無量の諸仏、みな共に護念したまう」（『真宗聖典』5頁、東本願寺出版部。以下、『聖典』と略称）という表現があります。果の位である無量の諸仏が、因位である菩薩のはたらきを「護念」するということです。だから、因果が相呼応しているわけです。

菩薩が生み出されるのは、仏を翼賛する、つまり仏をたすけ、ほめたたえるためだ、と曇鸞がおっしゃっています。仏に触れた存在である菩薩が仏をほめる。そのことで、仏のはたらきが衆生に伝わる。だから、あえて仏にならずに菩薩の位にとどまるという考え方もでてくるのです。弥勒菩薩は、一切衆生の苦悩が尽きるまで、菩薩の位にとどまります。親鸞聖人は、本願の信心の行者は弥勒と等しい、とまで言います。われわれは、仏には成れない。しかし、仏をほめる仕事ができ、仏の功德を伝える仕事ができる。その仕事の意味が弥勒菩薩だと、このように親鸞聖人は弥勒の名前をいただいています。本願を信じて念仏するところに、いま生き

ているこの生命が諸仏によって護念される身になる。念仏のはたらきのなかに、諸仏に護念されるという意味があるのです。これは、人間が苦悩から本当に脱出できることを具体的に教えている大事な方向性だと思います。人間は、時間的にも能力的にも、因縁という面でも有限です。そして「煩惱具足」で、たえず煩惱に突き動かされている。個人が閉鎖的になり、自分に苦しむ方向性になっていく。いま、「諸仏護念」ということが、「お前の行く方向は正しいよ」と護ってくださいという意味だとするならば、また、それを自分にいただくことができるならば、これは救いになるはずですよ。

確かに、現代社会は豊かで便利になりました。では、人間が本当に明るくなれたかといえは、決してそうではない。いっしょに生きている人びととの深い共感がないわけです。むしろ、ますます孤立化している。どれだけ便利になろうと、人間は人との関係を生きていますから、そこに明るみが見えないならば、それは「地獄」です。地獄では、他人の声が聞こえないそうですね。人間であれば、隣で苦しみを味わっている人がいたら、何らかの苦しみを感ずるということはあり得るわけですが、地獄では、どれだけ隣で苦しんでいる人がいても、お互いに相手の苦悩を知ることができないのです。

『無量寿経』には、「仏と仏と相念じたまえり」（『聖典』7頁）という表現があります。こういう関係は、人間にはほとんどつくれないのですが、もし成り立ったら、それは無上の意味をもつでしょう。人間の心には煩惱があって、恨みや妬みがくっついていきますから、相手のこ

とを本当に知ることはできません。しかし、それを破る方向に触れることで、あるいはそちら側の眼が与えられることで、人間は救われる方向に歩み出せる。覚^{さく}を開くとか、仏陀に成れるのだというのは理想です。そうはなれないことを正直に認めたのが親鸞聖人でしょう。人間は煩惱具足である。仏からの光を仰いで、仏の智慧のはたらきによって、こちらの眼の間違^{まちが}いが知らされていくしかない。そこに歩みがあって、仏から護^{まも}られているという感覚が与えられる。それが救いなのです。これが、この『無量寿経』が開いてくる方向性だと思います。

■ 涅槃からはじまる仏教

またこの段では、菩薩は「甚^{じん}深^{じん}の禅^{ぜん}慧^えをもつて衆^{しゆ}人^{にん}を開^{かい}導^{どう}す」（『聖典』5頁）と言われます。「禅慧」、すなわち、精神的な統一の世界から出てきた智慧を仏教は大切にします。精神統一された状況のなかで、この人生の大切さを見つめていって、なにがしかの体験をもつ。精神を統一していくことによって、本当のことは見抜いていこうとする。そして、そこから智慧を開く。この智慧がないと意味がないわけです。禅定は沈黙の方向ですが、それが智慧となったときに言葉が生み出されてくるのです。そのような静けさから出た本当のはたらきが、仏教の特質だと思います。

また、仏教は、「涅槃」を抜きには成り立ちません。釈尊が涅槃に入ったということは亡くなったということですが、そこから本当のはたらきが出るのが、大乘の涅槃です。涅槃から仏法の真実性が明らかになるのです。大乘の涅槃は、「無^む住^{じゅう}処^{しよ}涅槃^じ」と言われます。迷いの生死にも、涅槃にもとどまってはならない。だから、生きて迷っている世界から、単にさとり^{しやうじ}に往^{むか}こうという発想ではないのです。

仏説は、お釈迦さまが亡くなって初めて記録されました。つまり、お釈迦さまが亡くなったところから、本当の仏教が伝えられてきたと言えるのではないのでしょうか。そこから、初めて弟子たちは自立し、本当の仏教が始まったのです。

親鸞聖人は、「釈迦^{しやかによらい}如来^{にょらい}かくれましまして二千余年になりたまう正^{しやう}像^{ざう}の二^に時^じはおわり^{うた}にき 如来^{にょらい}の遺^{ゆい}弟^{てい}悲^ひ泣^きせよ」（『正像末和讃』『聖典』500頁）と謳^{うた}います。釈尊の人格的保護のもとでの仏教は滅んだのだと。時代が大きく変化していくなかで、言葉も、考え方も、そして受け取られる感覚も変わっていく。仏の言葉を聞くということは、表現が難しいと思いますが、死んだ立場からの言葉を聞くことだ、と言ってもいいと思います。そういう眼が開けると、仏陀の言葉が聞こえてくるのだと思います。理性が求めるようなものではなく、人間の本来のあり方を——お前は何処に立っているのか、自分の生きている根拠を確かめなさい、と仏教は呼びかけるわけです。（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2007年12月 休 会
2008年 1月22日(火)午後6時30分～9時
2月20日(火) 同 上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

テキスト：「真宗聖典^{しんしゅうせいでん}」大 ¥3,500・小 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

本多弘之所長の講演録

「親鸞思想の解明」が本になりました

本欄でも取り上げてきた「親鸞思想の解明」（全47回分：2001年11月から2006年8月までの講演記録）が、3巻本として樹心社から出版されました。

発行書籍

第1巻『浄土 その解体と再構築』

（2007年9月発行／序文：吉本隆明氏）

第2巻『浄土 その響きと言葉』

（同年10月発行／序文：芹沢俊介氏）

第3巻『浄土 大いなる場のはたらき』

（同年11月発行／序文：帯津良一氏）

価 格

各巻共に1冊2,600円

（送料・税別）

問い合わせと申し込み

樹心社

TEL 042-577-2778

FAX 042-577-2758



親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑤

光顔巍巍—出世本懐の証明—

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」の第11回と第12回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第11回では「五徳瑞現—〈世〉に立つことの意義」について、第12回では「〈自在〉—ということの意味」について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第10回からその一部を紹介する。（研究員 羽塚高照）

■ 救われ難き存在

『無量寿経』（『大無量寿経』）の序分で、対告衆である諸菩薩が広く大きな功德をもった存在として説き示され、最後に、一切の衆生が対告衆の視野に入ってきて、その段が終えられます。つまり、ここでは、お釈迦さまが教えを説くときの視野が、目の前で教えの言葉を聞いている存在だけではなく、それを遙かに超えて、時間的にも空間的にも広がって、あらゆる世界の衆生に響くような真理を語ろうとされることが示されているのだらうと思います。

そして、いよいよ教えを説き始めようとするお釈迦さまは、全身が喜び出し、姿色は清浄であり、「光顔巍巍」（『真宗聖典』東本願寺出版部、6頁。以下、『聖典』と略称）として、つまり、「お顔全体が大きな光となっている」と表現されています。すなわち、阿難はお釈迦さまが何かを説こうとしていることを感じて立ち上がり、「今日、世尊、諸根悦予し姿色清浄にして、光顔巍巍とまします」（『聖典』7頁）

と申し上げるわけです。阿難は、釈尊の従兄弟で、ほぼ同じ歳に生まれて、お釈迦さまの一番身近に、いつも付き従って教えを聞いていたと伝えられます。それで、お釈迦さまが亡くなった後、教えを記録しようとなったときには、記憶力が抜群であった阿難の言葉が依り処になった、と伝えられています。しかし、そのぐらい身近にいたにも関わらず、お釈迦さまは「あなたは必ず仏に成る」という「授記」を、阿難にはなされなかったと言われます。

どうも、阿難という方は、慈悲心があるというか情にもろいというか、そういうお方であつたらしいのですが、出家して修行する者にとって、日常性の方向に眼を向けたり、感情をもったりすることは、世俗に戻ってしまうことですから、それを断ち切って修行しなくてはならない。出家主義の教えでは、そう教えるわけですが、ところが阿難は、どうしてもそうはなれない。お釈迦さまは、阿難がそのような出家の道では仏に成れないということを見抜かれて、授記をなさらなかったのだらうと思います。阿難はお釈迦さまの一番身近にいた。しかし、仏法の真理性に触れることができなかった。そういう存在が、この『無量寿経』の対告衆であり、教えを聞いていたということが、非常に大事な意味をもっている、と親鸞聖人は着目したわけでしょう。

■ 出世本懐の証明

日本に伝わってきた仏教の学びとしては、

『涅槃経』や『華嚴経』が一番大事な經典とされていたところに、親鸞聖人は『無量寿経』こそ「大経」である、仏陀の願いが本当に実現している經典である、と見られたわけです。衆生は小さい。しかし、仏陀の願いは、あらゆる衆生を包んで、真理を呼びかけていこうとする大いなる用^{はたら}きです。その『無量寿経』の会座^{えざ}に立った釈尊は、阿難の前に、光り輝くお姿で立ち上げられた。ここから親鸞聖人は、お釈迦さまがこの世に現れた本当の意味は、この經典（『無量寿経』）を説くためであったのだ、と見られたわけです。全身が光り輝いたということは、それこそが「出世本懷」であり、この世に生まれた意味を初めて発見した喜びを象徴しているのが「光顔巍巍」であること。

こういう意味で、親鸞聖人は『教行信証』『教巻』で、『無量寿経』のこの箇所を引かれる直前に、「何をもってか、出世の大事なりと知ることを得るとならば」（『聖典』152頁）という言葉添えておられるわけです。その『無量寿経』が教える本願の真実は、「ひとえに親鸞一人がためなりけり」（『歎異抄』『聖典』640頁）である。こういう感動が、この「光顔巍巍」こそが出世本懷の証明だ、と感じさせたのでしょう。

さらに阿難は、「今日^{こんにち}、世尊^{きそく}、奇特の法に住したまえり」（『聖典』7頁）と、以下、「今日」を4回繰り返しながら、「世雄^{せおう}」「世眼^{せげん}」「世英^{せいよう}」「天尊^{てんそん}」と言葉を変えながら、お釈迦さまの徳を讃めていきます。阿難が、いま、ここに、光り輝いているお姿に出遇っている事実において讃めているわけです。

いま、本願の教えとして、存在の真理を一切衆生に分ち与える方法が見いだせた、そういう直感が内に響いたお釈迦さまには、いわゆる「努力主義」や「自力主義」ではないかたちで真理を感じ取っていける道が開ける、そういう新しい教えの説き方が見えてきた。それを、い

ま説かんとするお釈迦さまが、喜びにあふれて立ち上げられた。お釈迦さまの中に本願が動き出して、本願が、いま言葉になってあふれ出ようとする力、それが「光顔巍巍」、あるいは「奇特の法」として阿難の眼に映っているということではないかと思います。

本当の意味で、十方群生海を平等に仏にしようの大地が開かれた。一切の衆生が、平等に仏地をいただくことができる。こういう視野が、お釈迦さまが本願を説こうというところに、ふつふつと沸いてきて、そのことがお釈迦さまの姿を輝かせているのです。（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2008年3月25日（水）午後6時30分～9時

4月 休 会

5月 7日（水）午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大 ¥3,500、小 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

本多弘之所長の講演録

「親鸞思想の解明」が本になりました

本欄でも取り上げてきた「親鸞思想の解明」（全47回分：2001年11月から2006年8月までの講演記録）が、3巻本として樹心社から出版されました。

発行書籍 四六判上製

第1巻『浄土 その解体と再構築』（320頁）

（序文：文芸評論家 吉本隆明氏）

第2巻『浄土 その響きと言葉』（256頁）

（序文：社会評論家 芹沢俊介氏）

第3巻『浄土 大いなる場のはたらき』（281頁）

（序文：帯津三敬病院名誉院長 帯津良一氏）

価 格

各巻共に1冊2,600円

（送料・税別）

問い合わせと申し込み

樹心社

TEL 042-577-2778

FAX 042-577-2758



親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑥

人生最高の生き方—愚に帰る—

親鸞仏教センター所長 本多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」の第13回と第14回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第13回では、「如来^{じゅうろう}の十号^{じゅうごう}」について、第14回では、「歎^{たん}仏^{ぶつ}偈^ぎ」について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第11回からその一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■ 愚に帰る

この間、ある出版社から私に「文章を書いてほしい」という依頼が来まして、私は「そういう文章は苦手だから」と、さんざん断ったのですけれど、どうしても書けと。では「何という題で書くのですか」と聞きましたら、「人生最高の生き方」という、何かすごい題なのです。そういう題で書いてほしいと言うのです。

「人生最高の生き方」とは何だろうと。それは確かに、私も若いころは、人に勝っていこうなどという野心をもったこともありますし、何とか少しでもましになろうなどという、ばかげた心を起こしたこともありましたけれど、長い間、親鸞聖人のお言葉を教えとして生きてきますと、一番難しいのは、法然上人が言われた「愚に帰る」ということだと思うのです。

つまり、もともと^{おろ}愚かなのだけれど、それを自覚することが難しい。丸裸の愚かさになるといことが、一番難しい。愚かさを隠して、できるだけそのうえに何かを乗せて、愚かではなくなろうとする。愚かのうえに愚かを重ねる、そういう愚かの2乗みたいな愚かさを、われわれは一生懸命に生きている。その愚かであるということに帰れるということが、本当は一番楽

だし、一番存在が輝いて自由であると。「ああ、そうだな」と。最高の生き方とは、「愚に帰る」ということだと。そういうふうに考えて、この題（「人生最高の生き方」）はありがたいと思って、短い文章を書かせてもらったのです。

この『無量寿経』に、「今日、世英^{せえい}、最勝の道に住したまえり」（『真宗聖典』7頁、東本願寺出版部）とありますが、「最勝の道」というのを見ると、どうしても私どもは、何かみんなやっつけて、俺一人が勝ち残る、そういうふうになるのだろうと、こう見るわけです。でも、そうではないのです。「世英」、つまりお釈迦さまが勝ったのは、自分に勝ったのです。自分に勝ったということは、自分の妄念に負けない方向性を見いだしたということだと思うのです。自分に勝ったというのは、自分の無知、自分の無明^{むみょう}、自分の本当の愚かさを自覚して、真理に帰った。真理と言っても、自分に執着すべきものはなかったという、無我^{むが}と言われるようなものです。因縁の賜物で、ここにたまたまある。たまたまあることの尊さ、それを偉いのだと思い込むこととは違うわけです。

どうしてもわれわれは、教えの言葉を求めたり、本を読んだりするときに、もとの愚かさの自覚ではなくて、それに何か智慧を乗せていこうという発想で行うわけです。そういう発想で、聞いたり考えたりしようとするから、やればやるほどわからない。結局、わからない方向で尋ねているから、わからないのです。ところが、わかるわからないを超えて、愚に帰るといような大切な方向があるのだということに気づいてくると、仏教の歩みが始まる。では、そ

の歩みの極限はあるのか。極限はあるのかもしれないけれど、そこに行き着く必要はない。必要はないし、行き着かなくても、その極限の方向に向かって歩みが始まれば、それで十分人生の意味が見えてくる。私は、そう思います。

確かに親鸞聖人は、「愚^ぐ禿^{とく}鸞^{らん}」と名^な告^つられた。その帰るべき愚かさに向かって歩まれていくなかで、親鸞聖人がなさったことは、最高の智慧と理性と論理をもって、仏教の最高の問題を考え抜くということだったわけです。だから帰るべき愚かさというのは、いわゆる相対的な愚かさではない愚かさです。比較して愚かになるのではなくて、根源的愚かさを自覚するわけです。そのためには、どれだけ歩んでも終わりがありません。そういうように、本願の教えをとおして、本当に愚かさに帰る道をつけてくださった。では、帰れるかというと、容易なことではありません。容易なことではありませんけれど、その方向性が見えてくるわけです。

■ 世間を生きる

「五^ご濁^{じやく}惡^{あく}世^せ」と言われるような、罪惡深^{じんじゆう}重^{じゆう}の衆生が共に生きている場所、自我の煩惱が重層的に積み重なった空間が、われわれが生きている世です。お互いに愚かさを生きているという、この抜き差しならない場所に立って、しかも勝つというようなことがはたして可能なのか。これは難しい。だから、逃げ出したくなるわけです。どこか世の外へ出て行ってたすかるような発想、そういう方向性で仏教が理解されてしまうのは、結局、仏教を求める者の立場が本当に確立できていない弱さであると思うのです。

なるほど、出世間的な方向で呼びかけるということ、それは無意味ではない。確かに、世間のなかだけで勝ち抜く方法が知恵だという誤解がありますから、ある意味でこれを突き抜ける方向へ呼びかけるために、「出^{しゅつ}世^せ間^{けん}」という言葉は意味をもつわけです。もつのだけれど、文字どおり出て行くという方向に真理があるのではなくて、むしろそこから帰ってくる。われわれは、世間を生きているわけですから、生きて

いる場であり、生きている環境であるこの世間というものを本当に見直すことができないなら、自分を見直すこともできない。世を捨てて、自分だけ逃げ出してたすかろうとするような自分なら、結局、逃避心に負けた自分ですから、世を大地にして生きる本当の存在になることはできない。

私は心弱い人間で、どうしても逃避心から脱却できない人間ではあるのですが、しかし、この『無量寿経』の教えというものを本当にいただいて歩んでみると、どっちみち逃げても逃げられないし、愚かさとか弱さというものは、自分一人だけではない。この世を生きるみんなが、そういう命をお互いに生きていて、この世をいっしょになって汚れているのであり、だからこそ、その場所で、本当に生き抜くべきであると。それが成り立つ教えとして、この『無量寿経』が説かれた。こういうふうに親鸞聖人はご覧になって、「末^{まつ}法^{ぽう}濁^{じやく}世^せには、この道一つだ」と教えてくださった。この教えを説くためにお釈迦さまはこの世に生まれられた、出世本懐の教えだと。そういうふうに見られたということは、非常に大事な意味があると思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

「親鸞思想の解明」の講演録（全47回分：2001年11月～2006年8月）が、3巻本として出版されました。問い合わせと申し込みは、樹心社（TEL 042-577-2778）まで。

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2008年6月17日(火)午後6時30分～9時
7月22日(火) 同上
8月29日(金) 同上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大 ¥3,500、小 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの——『大無量寿経』を読む——」⑦

自在——本当に自分を取り戻せる世界——

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」の第15回から第17回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第15回では、「六波羅蜜の行」について、第16回では「国土第一の願い」について、そして第17回では「真証と速」について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第12回からその一部を紹介する。

(囑託研究員 越部良一)

■「姿色変ぜず」

『無量寿経』（『大無量寿経』）で、釈尊が如来の正覚の功德を自ら語るところですが、「姿色変ぜず」（『真宗聖典』8頁、東本願寺出版部）、つまり、姿も色も変わらないと。たとえ、お釈迦さまであっても、肉体をもっている。肉身を生きている限り、肉身の面は変わっていく。しかし、それを生きている如來自身、如来がこの世に現れ出た「出世の本懷」を生きているいのち自身は、変わらない。これも象徴的な表現だろうと思います。慧見をもった身体というのは、「法身」と言ってもいいと思うのです。法身は変わらない。もちろん肉体は歳をとります。肉体は、生まれて生きて死んでいくものですが、認識する智慧自身が本当に翻った場合に、その翻った喜びが感じられてある時には、それは変化しない。変化しないということは、物質が変化しないのではなくて、智慧自身が、流れゆく時ではない時をもつといいますか、変化しない時をもつ。そういうことを象徴しているのでしょう。

曾我量深先生という方がおられたのですが、

私が出会ったときは86歳でしたから、普通でいえば、もう歳をとられたご老人ですけれども、仏法のはたらきのなかで語り始められるときの曾我先生のお姿は、まさに「光顔巍巍」で、年齢を感じさせない。皆さん、先生の若さというものに驚嘆の思いをもちました。その若さは身体的若さではない。身体は、もちろん86歳ですからどう見てもお年寄りです。でも、仏法を語っている、仏法に生きているその精神自身を人に感じさせる力は、少しも歳をとらない。そういう感じがしました。

大谷大学の授業を毎週1回もっておられて、あとは、頼まれるままに日本全国を布教に回られ、説法してこられる。お疲れになって帰ってこられると思うのですが、「先生、お疲れでしょう」とお尋ねすると、「いえ、旅行してきましたから元気です」とおっしゃるのです。人にお聞きすると、曾我先生が1ヵ月も外に出られないと、本当に老人になっているというのです。おもしろいと思いましたね。普通は逆ですよ。仏法に生きているから、仏法のエネルギーが生かしている。仏法に生きている時間が多いと元気になる。そうでない時間、自宅でもしないでいると、かえってへたばってしまう。

そういう曾我先生のお姿を、私は大変おもしろいと拝見したことでありました。事実、そういうことが起こるんですね。だから、「姿色変ぜず」と。これは何も変なことを言っているのではなくて、事実、そう感ずるのだろうと思います。そういうことがあるということ、目の当たりに知ることができました。どうしてそういうことがあり得るのだろう、曾我先生は何

を依り^よ処^{どころ}に生きているのだろうというよう
な、不思議な思いがしました。

■ 自分自身が自分に在る

そして、「一切の法において自在を得たまえり」(『無量寿経』同頁)とあります。「自由自在」という言葉がありますけれど、これは鈴木大拙先生が、大谷大学に來られて講演をされたときに、よくお話になったことのひとつです。「わしは問題を感じずんじや」と言われて、「自由、自由と言うけれど、制約からの自由、何々がないという自由、そういう自由は、どうもわしゃ、好きじゃない。仏教者のあり方は『自在』である。自在ということは、自分^{おの}に在るということだ」と。「自分自身が自分に在る」と。

人間は、他の衆生といっしょに生きているということに対する感覚があるわけです。自分を他に見せて、他に引きずられている、他に影響を受けているということがあって、それに苦しむことがある。これは自分が自分^{おの}になれないという問題です。「自分」というけれど、自分がなぜこういう自分なのか、自分ではよくわからない。それでいつも他を気にして、他の前で自分を見せようとしている。そういう自分しかない。

そこで、「自由」を主張すると、自分を立てて、自分でやるのだという傾向が強くなる。だから、他を無視したり、踏みつぶしたり、他の制約を振りほどいたりして、わがままに通じるような傾向が強くなる。自由の主張が強いということは、人間の領分が広がって、自分の好きにやれる範囲がかなり広がったということなのかもしれませんけれど、それで本当に自分が取り戻せるのかというと、どうもそうではない。

例えば、私たちは、普段は仕事があったり、人間関係があったり、うるさくて仕方がない。それで、自由になりたいなどと思うのだけれど、会社でさんざん地獄の目に遭っているとか、愚痴を言いながら仕事人間として生きてきて、いよいよ定年退職になったら、自由なのに、今度は、まったく生きがいがなくなって、

氣力喪失になってしまう。だから、本当は縛られてあることのなかで元気が出ているわけです。糸の切れた凧のようになったら、どうなるかと言えば、ふわふわとどこかへ落ちてしまう。引っ張られているから生きている。だから、自由を求めながら、本当に自由が与えられたら困ってしまうわけです。人間というのは、そういうところがあって、外からも縛られ、内からも縛られ、縛られているなかで何とか平衡^{へいこう}を保とうとしている。でも、どうなったら本当に自分が取り戻せるのかということがわからない。

そこに、鈴木先生は、自らが自らとしておれることが大切なのだと。「自在」、これがあるがたいのだということをおっしゃっていました。自らが自らにあるということが、非常に暗示的に、ひとつのあり方を示しています。煩惱を抱えて生きている人間は、普通では、自分で自分を取り戻すなどということはできない。けれども、いま、この光顔巍巍たる如来がこれから説く法は、そうした愚かな凡夫が、自在を得ることができののだと言うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

「親鸞思想の解明」の講演録(全47回分：2001年11月～2006年8月)が、3巻本として出版されています。問い合わせと申し込みは、樹心社(TEL 042-577-2778)まで。

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開(無料)で開催しています。

記

日時：2008年 9月 休 会
10月6日(月)午後6時30分～9時
11月 休 会

場所：有楽町・東京国際フォーラム Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記(京都・東本願寺出版部)まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑧

道場の学問

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第18回、19回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第18回では、「無上殊勝の願」について、第19回では、「回向の起点としての『超発』」についてセンター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行なわれた第16回からその一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■ 道場

『無量寿経』に、「我仏に^な作らん、国土をし第一ならしめん。その衆、^{きみよう}奇妙にして、^{じよう ちようぜつ}道場、超絶ならん」（『真宗聖典』12頁、東本願寺出版部）とあります。「奇妙」は、現代語の奇妙^{きてれつ}奇天烈の奇妙ではない。「妙」という字は、たえなる、すばらしいという意味をもってあります。鈴木大拙先生は、この妙という字を wonderful と訳すのです。wonderful という言葉は、逆に日本語にしようとするといふ翻訳語がないのです。すばらしい、すてきな、不思議など、いろいろと言ってみるけれど、wonderful という感動をびたっと表す日本語がない。この妙は、wonderful なのですね。奇は、^{まれ}希であるということで、滅多になくてすばらしい。そういう意味です。それが日常語になると、へんちくりんでわからないという意味になってしまふ。どうも仏教語は、日常語で残るときには、大体悪意のあるものに変ずる。いま残っている仏教語を尋ねると、大概あまりよい意味で

はないのです。大事な真理を表している言葉なのだけれど、その真理ではなくて、悪い意味で残る。どうも困ったものですね。

「道場」という言葉は、これはいまも生きておりますが、道の間ですね。道は中国語でタオという。これは人びとが歩くところが、もとの意味でしょうけれど、何か共通してみんなが歩んでいけるような、往来できる道という意味をもってくる。そして、人間が自分の精神的な糧^{かて}を求めて生きるときに、その生きる方向性とか生きるよすがになるようなもの、自分の忘れてはならない精神的な支柱、そういう意味が道に出て来ます。こうした意味が普遍化されると、茶道とか柔道とか、何でも道が付くわけですが、仏道というのも、仏を求めて歩むということが、道の意味をもつということでしょう。その道が一旦確認されると、その道を歩むことで、道心、道の心が鼓舞され、道を思い起こすことによって、心が壊れていかない。そういうような意味を、道という言葉がもってくる。

道場というのは、そういう道を生み出してくような場。剣道場とか、柔道場とかいうのは、そこに行けば、共にその道を求める人たちが、そこで道を養える場所です。仏教の道場も、仏を求める人たちが、そこで生活したり、そこに行くことにおいて、仏を求める心が鼓舞される。そういう場所が、道場という意味をもっている。

だから、法蔵菩薩が国を造る、その国が浄土という意味をもってくるわけですが、そこは道場という意味をもっているわけです。そこでお

眠りくださいと言われたりすることがありますけれど、眠れるところではない。仏道を求める場所が、浄土です。寝るために行くのなら、道場ではなくなります。その道を自らも生き、人びとと共に実践する場所が、道場です。

■ 近代の学問

近代に入って、段々、道という言葉もすたれてきましたし、この道場という言葉も何か狭い概念になっていったふしがあります。

清沢満之が、明治34（1901）年10月、いまから、百年ちょっと前ですが、東京に大学を建てた。その開設のときに、開学記念の会を開催した。その会に、当時の文部大臣や東京の知事の祝辞がよせられたという意気軒昂な時代です。その席で、この大学は自信教人信の誠を尽くすべき人物を養成する学場でありまうと、開学記念講演をしたと伝えられております。つまり、これは仏教の道場ということでしょう。

近代の大学、特に日本の大学は、サイエンスが学問だと。つまり、人間の対象になるもの、対象界を研究することが学問だ、そういう学問概念で、大学と称する教育の最高機関というもののが設けられ、そこで研究、教育をするときには、学問とは科学であると。ですから、道場という概念の大学というのは、まあ、矛盾概念といえますか、自己関心、自己を育てる関心というものを、どこかでさえぎるようにして、外側の客観的な、誰でもが証明したり、検証したりできる世界の論理やら内容やらを研究する。仏教というようなものも、文献学、古代語の研究とか、古代文献の研究ということが、学問だと。こういうふうと考えられてしまった。学びというものの質が、何か人間そのものをどこかで非常に強くネグレクト（neglect）してしまう。そういう傾向性が強く近代日本を牛耳ってきたのではないかと思います。

私は、忘れもしないのですが、70年安保の時に、大学で職を得たばかりでしたが、学生から

散々怒られました。お前のやっていることは学問ではないと。客観的なものをちゃんと研究するのが学問だ。お前のは何だ。自分の主体を研究する、そのようなものは学問にならないと。だから、先生によってはやめてしまうわけです。たとえば自分は小説を書きたいとなったら、学問はやっていられないということになる。そういう学問が、圧倒的に力をもったのが、近代の日本の大学ではないでしょうか。

客観的なものをひたすら研究するのが学問であると、そういう誤解が学問という言葉についてしまった。ですから、道場であって学問をする。そういう学びがあるのだということ、これは非常に大事なのではないかと思います。それを失えば、仏教の学びをする大学は成り立たない。文献学だけであつたら、道を求める人間が学問をするということが学問ではないということになったら、非常に貧困な人間しか育たないことになります。ですから、近代をおおっている、そうした学問観は改められなければいけないのではないかと、そういうことを思います。

（文責：親鸞仏教センター）

「親鸞思想の解明」の講演録（全47回分：2001年11月～2006年8月）が、3巻本として出版されています。問い合わせと申し込みは、樹心社（TEL 042-577-2778）まで。

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2008年12月24日（水）午後6時30分～9時
2009年1月29日（木）同 上
2月5日（木）同 上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑨

一如の救い

親鸞仏教センター所長 本多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第20回、21回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第20回では、「本願文（第一願、第二願）」について、第21回では、「本願文（第三願）」についてセンター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行なわれた第18回からその一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■ 主語が消える

「如来の浄土の行」（『真宗聖典』14頁、東本願寺出版部。以下、『聖典』と略称）とありますが、この『無量寿経』における「行」という言葉は、わかったようでわからない。親鸞聖人は、行という言葉に新しい意味を読みとっていかれた。つまり、人間の行為というよりも、人間に、人間の境界ではないような境界を与えてくるようなはたらき、そういう意味でも行という言葉を使おうとする。それは、普通の行為、われわれが何かに向かって行為するのとは全然意味が違います。

鈴木大拙先生は、親鸞のこの「行」という言葉を、どう英語で表すことができるかと、随分と苦労して考えておられるのですが、南無阿弥陀仏という行為は、自我が消える。述語的な動詞の行為には必ず主語があるわけですが、南無阿弥陀仏が行為となるときには主語が消える、という言い方をしているのです。これも考え難いところです。

われわれは、行為するときには、主語があっ

て行為する、私が、何々をすると考える。ところが、親鸞が「南無阿弥陀仏は行だ」と言おうとするときに、まあ、日本語は主語を書かなくてもわかるから主語がないというふうにもただけでないわけではないのですけれど、南無阿弥陀仏を称うるときには、主語がないのです。私が称えるから行だとは書いていない。つまり、主語があって、述語があるがごとくに、凡夫があつて、発音したら行だというのでは、そういうことをいくらやっても、本当に浄土に往けるとは限らないわけです。これは、つまり、一如の行ということがあって、一如というときには、主語と述語が分かれぬ。いま、人間の境界でないような境界を与えようと言いましたが、その境界も、主語があつて境界があるのではなくて、境界と主語とは分かれぬ。

ところが、浄土の、いわゆる教学となると、もう二分化して、仏が居て、衆生が居る。自分があつて、環境がある。自分がこっちの穢土にいて、浄土があつちにある。そういうふうに、何でも二元的に語るわけです。

■ 本名は南無阿弥陀仏

「無上^{じゆしやう}殊勝^{ちやうほつ}の願を^{ちやうほつ}超^{ちやうほつ}発せり」（『聖典』14頁）、法蔵菩薩が世自在王仏の教えを聞いて、特別の願を発したと。この言葉を親鸞はなおざりにせず、『教行信証』の「信巻」に取り上げておられます。法蔵菩薩が無上殊勝の願を超発するということと、われわれが南無阿弥陀仏を信ずるということとは、同じことだというのが親鸞の押さえです。われわれではわからない。私が信ずるということと、法蔵菩薩が超発した

ということとが、なぜ同じだと。無限の距離があるのではないかと思うのですが、その無限の距離を一挙に一つにするのが超発だと。この愚かな身に、本願の教えを聞いて、ああ、そうだな、南無阿弥陀仏しかないなという心がもし発ったなら、その心は、法蔵菩薩が超発したということなのだと。

私どもが、経験してわかるとか、感ずるとか、信じたというレベルと、それを生み出してくるような大きなはたらきが回向として来ているのだということとを、親鸞はきちっと分けている。鈴木大拙先生は、それを、分けるけれども、分けるのは方便であって、実は一つになるのだという書き方をするから、浄土真宗の学者はそれを嫌うのです。でも、どっちもどっちのところがあるのです。だから、鈴木先生は、曾我量深先生とやり合ったときに、やり合っていくと、最後のところは同じになると言う。同じになるけれど、ちょうど一つの壁の両面みたいなもので、あんたの見ている壁とこっち側の壁とは違うのだというように、お互いに許さないところがでてくる。だから、同じと言ってしまおうと問題がある。でも違うと言っても問題がある。得ている境界は、ほとんど重なる。

例えば、曾我先生は、南無阿弥陀仏というのは、みんな南無阿弥陀仏になるのだと。「私は曾我南無阿弥陀仏です」などと言いつつわけです。何を言いつつやらと思うようなものでね。一人ひとり、みんな南無阿弥陀仏です。南無阿弥陀仏が本人そのものです。本名は南無阿弥陀仏です、などと言うので、聞いている人間は、ちんぷんかんぷんです。でも、それはほとんど大拙さんが話すのと同じようなレベルにあるのです。

われわれは禅と念仏とは全然違うように思っているのですけれども、実は、日本に来て分かれたのです。朝鮮でも、中国でも、ベトナムでも、禅浄一致です。禅の修行と、念仏の行とを重ねてやっている。日本に来て、法然上人から念仏と禅が分かれた。分かれることによって、何が明らかになったかということ、人間の愚か

さ、罪の深さ、その自覚ですね。それが非常に鮮明になった。それが鮮明になることによって、有限なる人間の分限が本当に自覚されるという点で言うなら、非常にすっきりした面がある。

けれども、どれだけそういう面がはっきりしても、仏教であるという本質は変わらない。仏陀の教えである。仏陀の教えであるということとは、一如のあり方が存在の本来のあり方だということです。われわれは、たいいて二分した形でものを感じたり、考えたりしているけれども、存在の本来に帰るべく命を生きている。その場合には、鈴木大拙先生が見てくださったような、いわば不二の面が、大事な面ではないかと思うのです。鈴木先生の表現は、なかなか難しいし、いわゆる真宗的なものの考え方、教学の言葉の約束からすると外れているように見えないこともないのですけれども、しかし、仏教の本質からよくよく考えてみると、やはり大事な点を押さえている。

何でも二分していく、例えば、穢土の人間が浄土に往くのは死んでからだとか、それでは仏教でなくなってしまうわけですね。根源的に仏教ではなくなってしまう。浄土真宗は、愚かな衆生に罪を教え、凡夫であることを教えるけれども、凡夫と無限なる存在との、その絶対矛盾を撰して、一如の救いを与えようとする。そういうところに、この「無上殊勝の願を超発」するということの意味があるのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、公開（無料）で開催しています。

記

日時：2009年3月 2日(月)午後6時30分～9時
4月 休 会
5月26日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：「真宗聖典」大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑩

無限なるものの小さな芽吹き

親鸞仏教センター所長 本多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第22回、23回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第22回では、「本願文（第四願〈無有^{むいう}好醜^{こうしゆ}の願〉）」について、第23回では、「本願文（第五願〈宿命通^{しやうめいどう}の願〉）」についてセンター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者・一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行なわれた第19回からその一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 本願のわかり難さ

本願とは何だといったなら、有限と無限の矛盾を突破して、無限が有限のところに形を顕^{あらわ}そうという願い。有限が有限の中で何か自分の好きなことを要求するというのが、普通は願いという言葉でしようけれど、そういう願いという言葉を使いながら、方向がある意味で逆である。つまり、有限が無限になっていこうとか、自分の所有欲を無限にふやしていこうとか、有限の状況を自分に都合のよいようにどんどん変えていこうとか、そういう願いではない。まったく逆に、無限なるものが、有限なるところに、有限が本当にたすかる可能性を開く。

その本願とは何であるかということがわかり難い。人間の願いの一種であろうと考えて聞きますと、何の意味があるのかよくわからない。かといって、人間の願いではない願いなのかなどといくら言われても、これまた何もわからない。人間の側から起こす願ではなくて、人間に

向かって起こす願。これはわかり難い。人間がものを考えるときに、自分からものを考えますから、自分に向かってくるという発想をしても、わかり難い。

よく一般に、浄土教の願について、願われているという言い方をします。自分は如来から願われている身だという教え方をする。受身形で願を感じよと。これも、どうもわかったようでわからない。例えば、子どもは親からきちんと育て欲しいと願われているのではないかと。ちょうどそのように、われわれ凡夫は、如来からちゃんとたすかって欲しいと願われているのだと。願われている存在として自分を感じよと。まあ、譬喩^{たとえ}としてはわかり易い。けれども、譬喩はわかるけれども、如来との関わりはわかり難い。如来がどこにいるのかわからないのに、それから願われているとはどういうことだと。つまり人間から無限を考えて、無限を如来とか仏とかという言葉で表しても、人間から考えた場合にはどうしてもわからない。

向こうからこちらへはたらいて来て、こちらに発起^{はつぎ}する。ですから、起こる事実は、われわれの有限のところに何らかの形で発^{おこ}らなければ、われわれはわからない。単に受身形ではわれわれはわからない。そこが、私自身も長い間教えを聞きながら、何か論理がごまかされているような感じがして、譬喩では、情念的にはわかるけれど、どうもわからない。お前は如来の大悲に救ってやりたいと願われているのだと思えと言われても、全然、救ってもらえるようになっていく気配がないではないかとしか感じら

れない。どうもそこがわからないという感じであったのです。

■ 内になった他

つまり、他力というのは、自分があって、外に他力があるという発想ではないのです。親鸞が、他力は本願力だと言うときには、その本願力は内になった他、内在になった超越です。その内になった他ということをはっきりと示そうとして、非常に苦労された。単なる外であれば、お前は本願によってたすけられるのだ、お前は本願によって願われているのだ、そういうように受身形でものを考えろと、そういう論理でたすかるということなのでしょうけれど、どうもそれで親鸞という人は納得できなかった。むしろ、自分の積極性といいますか、自分の中に発するものの平等性、そういうことを明らかにしたかった。

だから、どうしても親鸞聖人にとっては、本願成就の救いは回向を潜^{ひそ}かなければならないわけです。如来の回向ということは、無限なるものが有限に転ずる。自己を転じて他となって、他自身を救う。そういうのはたらきを回向ということです。だから、無限なるものが有限になって、有限を無限に転ずるという仕事をする。そういうのはたらきがないなら、大悲が衆生を救うということが、事実として衆生のうえに起こらない。そのために、親鸞は、回向成就の信心ということをはっきりと明らかにしようとした。

私は、親鸞の表現するそうした救いに、非常に現代的な、本当に主体が成り立つ意味があると思うのです。主体なしに、ただ、受身形だけになれと。まあ、絶対受動という言い方もありますけれど、受け身になるためには、ひとまず受けるべき主体がないと受身形にもなれないわけです。何もないのに、受身形ということはあり得ない。まあ、柔道で、自分がばーんと倒れるのを受け身と言いますが、自分が倒れるのであって、何もないのに倒れるということは起こらないわけです。倒れるべき自分があって

始めて倒れるわけです。そこに、我執が深く、罪が深いこの自分が大悲によってたすけられるという、その事実が発る基点がある。

単に有限と無限とがあって、そういう相対するものがある、無限が有限をたすけてくれるのだという、そういう論理だけでは人間はたすからない。そこが、親鸞聖人という方が、回向という言葉をはっきりと大事な言葉として取り出して、回向の救い、つまり教・行・信・証、すべては回向であると。回向において始めて救いが成り立つということを徹底して言わざるを得ない問題がある。回向を潜^{ひそ}かにすることによって、無限は単なる他ではない。無限が有限となって有限を無限にするという、そういう大きな動きをもった概念になる。相対概念ではなくて、相対を破^{やぶ}ってはたらき出す概念になる。そういうことを、回向ということで顕^あそうとされたのではないかと思うのです。

何かがわれわれに起こる。有限が無限に触れる可能性が、たねが小さな芽吹きをもったように、そこに芽を出す。そのわれわれの中に発ったものが、無限なるものの芽を本当にもち得る。そういうことが、無限の側からののはたらきとして有限の側に起こり得るということをはっきりと何とかなおうとする。そこに、本願という言葉で言おうとする意味があるのではないかと思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2009年6月30日(火)午後6時30分～9時

7月17日(金)午後6時30分～9時

8月21日(金)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑪

地獄・餓鬼・畜生の無い国

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第24回、25回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第24回では、「本願文（第十一願）」について、第25回では、「第十一願文（続）」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行なわれた第20回からその一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■ 地獄の苦悩

法蔵菩薩が、その第一番目の願で衆生に呼びかける内容は、「たとい我、仏を得んに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』15頁、東本願寺出版部）。我が国の中に地獄・餓鬼・畜生があるならば、自分はさとりを開かないと。

地獄の苦悩は、源信の『往生要集』では、大変、迫力ある文章として描かれております。人間は、そういう文章を読むと、何かどこかで思い当たる節がある。例えば、葉が剣になっている樹がある。その上で、すばらしく美しい女性が呼ぶ。それは、つまり、この世で女性に迷惑をかけた、大変悪いことをした、そういう人間が落ちる場所だと教えるわけでしょうけれど、女性が呼ぶ。行きたいものだから、登ると、葉が全部下を向く。それをものともせず登って、血だらけになり、肉が裂け、骨が傷ついて、上についたら女性が居ない。どこに行ったかと。下に行っている。また、下で呼ぶ。来てほしいと。下りて行こうとすると、今度は葉が全部上を向く。そんなような、ひどいことを描

いているのです。そのようなところに落ちるのは嫌だと思いつつ同時に、自分も落ちるなどという感じもするわけです。人間として、この地獄・餓鬼・畜生というようなものを嫌うのですが、嫌っている人間自身が、地獄・餓鬼・畜生を持っているのです。

地獄・餓鬼・畜生を持っている人間であるからこそ、本当にそれを超えたような場所を与えようと。地獄・餓鬼・畜生があるなら正覚を取らないということは、地獄・餓鬼・畜生が満ちているこの娑婆を見捨てるのかと。そうではない。むしろ地獄・餓鬼・畜生が満ちている場所にはたらいで、地獄・餓鬼・畜生を突破できるような場所にする。地獄・餓鬼・畜生の存在をこそ摂して、その苦悩から解放して、我が国土の衆生としたい。これは、本当に実現するとなると、測れないような時間、つまり「兆載永劫」と語られるような物語的時間がかかる。永遠の努力をしてでも実現したいという願いと、その願いが課題とする内容。こういうことが教えられると、われわれは、そう簡単にたすかる存在ではないということに気づかされると共に、どれだけ深い罪であってもたすけずんば止まんとはたらし続ける願いがあると気づかされる。

■ 寿終わりで

続いて第二願では、「たとい我、仏を得んに、国の中の人天、寿終わりでの後、また三悪道に更らば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』15頁）と。地獄・餓鬼・畜生を三悪道と言う。地獄・餓鬼・畜生は無い。しかし、そうした寿が終わった後に、また三悪道に更なれば、正覚を取らないと。これは、第十五願にいきます

と、浄土に生まれた人は寿命が無限であると言っているのです。しかし、その第十五願には、自分で寿命をちぢめるのは自由ですよ、ということがついているのです。つまり、永遠の寿はいらない、有限な寿の中で自分の存在の意味を尽くしてはたらきたいと、そういう人間は、浄土から自由に出ていってよいと。でも、そうして出ていくときには、ちゃんと阿弥陀の功德が必ずついている。これが還相回向^{げんそう}という意味になるわけです。浄土の寿は無量ではなかったのかと。基本的には無量だと。でも、無量の寿をいただくということは、自由の寿をいただくということでもある。そういうことが背景にあって、ここで寿が終わるということが出てくるわけです。

自分に都合のよいことだけを積み上げていきたいという願いが、どうしても人間の発想にはついてくる。それで人間が本当に満ち足りるかという、満ち足りない。人間としての本当の喜びを求めて生きているのに、功利的な意味だけを価値として積み上げるということになると、人間存在の大切な部分はほとんど切り捨てられる。そういう問題が現代文明でしょう。どうもひどい状態だと思うのです。この頃、ますますそうです。確かに経済的に、物の豊かさとかは、もう満ち足りるほどに満ち足りたのだらうと思うのですけれども、何かおかしい。何か足りない。それをまた満たそうと思って、また欲望を起こしてしまう。求めている本当のところ分からないわけです。人間の中には、自分では分からない大切なものを求めながら生きている部分がある。それを清沢満之先生は、「人心の至奥より出ずる至盛の要求のために宗教あるなり」（『御進講覚書』）と。つまり一番の深みから出る、一番真面目な要求、激しい要求、これが宗教心だとおっしゃるのです。そういうものがどこかで人間を突き動かしている。

だから、そういうものに出会う時には、この有限の寿の中に、たとえ寿が終わっても十分に満ち足りるような意味がある。その譬喩として、ここで寿が終わるということを言うのではないかと思います。

■ 人間の中の深い願い

とどまらずずっと居ることが寿の意味ではない。たとえどれだけ去りたくなくても、この娑婆はいずれ去らなければならない。でも、充分に意味があったという寿でありたい。そういう欲求がどこかにある。人間は、その願いが分からないから、何か違う形でつくりたいと思う。銅像を造りたいとか、そのようなものをつくってもしようもない、邪魔になるだけです。でも分からないのです、深い願いをもちながら。

人間が居る限り、地獄・餓鬼・畜生はなくなる。少しずつよくしたら、いずれ無くなるだろうなどというのは、人間の見方が甘いのです。自分の心を観ずればよく分かる。地獄・餓鬼・畜生を消したら、私ではなくなってしまふ。だから、自分からなくせないけれど、悲願なのだと。法蔵願心を聞くということが、われわれには与えられている。願心の通りになるとか、願心が自分に実現するとか、そういうことは出来ないかも知れないけれども、願心に照らされて、自分を聞く、自分を見直すのです。悲しい事実として私たちは、地獄・餓鬼・畜生から足が洗えない。足を抜けない。けれども、法蔵願心は、それが無い国を願い続けているのだということに気づくことは出来る。人間存在の罪の深さですね。それをつくづく思います。そういうことが、地獄・餓鬼・畜生について、第一願、第二願と、二度も誓うということかと思えます。

（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2009年 9月 休 会
10月27日(火)午後6時30分～9時
11月24日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑫

「天耳」—聞くという力

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第26回から28回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第26回では、「第十一願（続）」について、第27回では、「第十一願（続）」と第十二願について、そして第28回では、「第十二願（続）」と第十三願について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第23回からその一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 聞くことは信ずること

四十八願の第七願に來ますと、「たとい我、仏を得んに、国の中の人天、^{てんじ}天耳を得ずして、下、百千億那由他の諸仏の所説を聞きて、ことごとく受持せざるに至らば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』16頁、東本願寺出版部〈以下、『聖典』と略記〉）と。これはすごい願だなと思うのですが、「天耳」というのは、天に通ずる耳といいますか、「諸仏の所説」とありますから、仏さま方の説かれるところを聞く。聞くというのは、諸仏が説く言葉を通して、存在の真理、命の真実を聞く。

聞くということは、身体の機能としての耳で聞くという形になっているのですけれども、先に真理に出遇った人たちが、ああ、このことを知ることによって、これだけ歓びがある、これだけ解放される。そういう自分の出遇った体験内容を伝えようとして言葉にする。その言葉を通して、真理に出遇った人の体験をいただく。

自分がまた新たにその真理に出遇う。その出遇う方法を「聞く」というのだろーと思うのです。

親鸞は、信ずることと聞くことは一つのことだと言います。本当に聞くということは、本当に信ずることがなければできない。「聞」と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし（『教行信証』『聖典』240頁）と。何のために仏の願いが語られるのか、その起こってくるいわれ、それを聞く。聞くといっても、耳で聞くのではない。言葉は、一応、耳を通すこともありますけれども、耳を通すにしろ、言葉が言われたら、そのことを、譬喩的に言えば、胸で受けとめてしっかり味わう。そして、疑いが晴れる。何を言っているのだろーということから始まって、大体こういうことだろーかということから、ああ、そうだったのだというように腑に落ちる。五臓六腑に染み渡るまで、真理が自分の中に入ってくる。そういうことを聞くというのでしょうか。

■ 聞くことの難しさ

だから、聞くというのは難しいわけです。疑心が、その壁になるわけです。そんなことを言っただってとか、そうは言うけれどもとか、何か自分勝手な論理とか言葉で遮る。だから、ずっと真理自身に出遇えない。聞きながら疑いが晴れないということは、聞いてないということです。音は聞いているけれど、聞き当てていない。言葉が何を言い当てようとしているのかが見えないままに素通りしているのです。なかなかわからない。それでやたらに言葉に取りつかれれば、譬えるなら、この道をこう行けばい

いものを、横の路地のことばかりをいっぱい書いて、どこに行ったらいいのかわからなくなってしまうというような解釈をすることが多いわけです。それに後から行く者は惑わされる。汗牛充棟^{きゅうじゅうとう}している解釈学に惑わされて、大事な筋が見えなくなる。

そもそも「聞其名号 信心歓喜」(『聖典』44頁)の、名号を聞くということは、発音された音を聞くという意味ではない。ところが、「聞其名号」とあるから、名号を聞くというのは、誰かが発音した音を聞くのだろうと読んでしまうわけです。なぜ阿弥陀如来は、南無阿弥陀仏という名号を選んだのか、選択したのか。ああ、私のためであったのだと、「親鸞一人がためなりけり」(『歎異抄』『聖典』640頁)と聞き当てる。それは容易なことでないから、他人のためだと思ったり、愚か者のためだと思ったり、自分のためだとは思わない。

道綽禪師が引用している「耳なき人」(『教行信証』『聖典』173頁)、無耳人^{むにじん}という譬喩を親鸞は和讃で使っていますが(『聖典』487頁)、その耳なき人というのは、耳が聞こえないという意味ではない。本当のことを聞き当てる力がない。肉体としての耳はあっても、耳なき人である。それは、本願を聞くことができないのを哀れんで、仏陀がおっしゃる言葉です。われわれは、仏陀の言葉、親鸞の言葉を読み過ごしながら、何かよくわからない。本当に耳がないなというか、そういう感じが深いのですが、そういう意味で、誰であっても浄土に触れるならば、天耳^{てんじ}を得ると。天耳を得れば、無数の諸仏の言葉を聞いて、ことごとく受持する。「受持」というのは、智慧として保って失わないということです。仏陀の教えに本当に腑に落ちて頷くことが起こると、それはもう忘れない。

われわれは、愚かな凡夫ですから、天耳も何もないのですけれど、しかし、信心ということを問題にするときには、これはどこか響き合うところがある。何か、人間存在にとって大事なものを、本願が、今、呼びかけようとしている。そういうことは、いただけるのではないかと思います。

■ 聞くという力

最近、ヨーロッパやアメリカのような考え方で、ディベート (debate)、自分の言いたいことをどんどん言う、そういうことを奨励する。これはやはり、グローバルに他の文化と接していくためには、向こうがどんどん言いますから、こっちが黙っていたら居ないのと同じことになってしまいますから、どんどん言えというわけでしょうけれど、言うというところに、聞くということがついていることが大事なのではないかと思うのです。仏教は一番最初から「如是我聞」ですから、聞くことから出発して真理に出遇っていく。言うことの根に聞くということがあって、真理に聞いて、聞いていることを言う。私が先生方の仏法の話聞いていて、ああ、この先生の話聞きたいと思ったのは、その先生自身に聞いている姿勢があったからですね。聞かずに説こうという話は、全然聞きたくなかった。聞く耳をもとうとは思わなかった。やはり自分が聞いていくという、その姿勢が親鸞にもあったから、親鸞という人にもこうして引かれるし、まあ、とても尋ね当てられるものではないけれども、できるだけ親鸞という人の出遇った真理の近くまでは行きたい、そういうふうに使われるのは、やはり聞くという力だと思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開 (無料) で開催しています。

記

日時：2009年12月 休 講
2010年 1月19日(火)午後6時30分～9時
2月 4日(木)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記 (京都・東本願寺出版部) まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑬

大涅槃を証する

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第29回、30回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第29回では、「第十四願」について、第30回では、「第十五願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第26回からその一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 願力の回向に藉る

本願の第十一願は、「たとい我、仏を得んに、国の中の人天、定聚に住し必ず滅度に至らずんば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』17頁、東本願寺出版部〈以下、『聖典』と略記〉）と誓われている。この第十一願を、親鸞聖人は、『教行信証』の「証巻」の課題にしております。この第十一願をあけて、その隣に、『大無量寿経』の異訳の經典『無量寿如来会』の第十一願文を並べています。そこでは「もし我成就せんに、国の中の有情、もし決定して等正覚を成り、大涅槃を証せずは、菩提を取らじ」（『聖典』281頁）と。「定聚」が「等正覚」に置き換えられ、「滅度」が「大涅槃」となっていることに親鸞は注意した。定聚に住するということは、等正覚を成ることだと。等正覚というのは、正覚、無上の覚りと等しい。いつでも仏に成れる、その一步手前というような位を表す。だから、この位は、弥勒菩薩の位だと言われる。弥勒菩薩は、いつでも仏に成れるのだけれど、あえて一步とどまって衆生を救う仕事

をする。これもやっかいな話ですけども、仏に成ってしまうと、本当に衆生の救いはできないのだと、こう大乘仏教は言うのです。

「証巻」の初めに、親鸞は「しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の教に入るなり」（『聖典』280頁）と。即時に正定聚の位を得ると。それが本願が誓う浄土の利益です。「即」という字、これは、大乘仏教の論理展開の大切な言葉です。即とは時を隔てないことだと親鸞は注釈する。場所も、時間も、ちょっと待ってという話ではない。今、ここでということです。

そこに、「往相回向の心行を獲れば」ということを挟んでいますでしょう。これが親鸞聖人の大切な押えなのです。つまり信心ということとは、願力回向の信心である。「証巻」を結ぶようにして親鸞が書いている言葉は、「大涅槃を証することは、願力の回向に藉りてなり」（『聖典』298頁）と。涅槃とは、仏教を仏教たらしめる大事な標識。仏陀が苦悩を本当に超える、それが衆生をたすけるということだというときに、大涅槃に、われひと共にふれていく以外にない。そういう課題が第十一願で出てきているわけですが、大涅槃を証するという、この仏教の大目標は、願力の回向に藉ると。この「藉」という字は、借りるという意味ももっている。「本願力の回向」という言葉が『浄土論』（『聖典』145頁）にあるわけですが、回向自身が本願力に藉る。つまり、われわれの回向ではない。われわれが何かに振り向けようとしてやる、われわれの意思の行為ではなくて、われわ

れに呼びかける大きなはたらき。本願力回向ということは、本願のはたらきが人間にまで来ると。無限なるものが、有限の中に入って有限を気づかせる。そういうふうに関親鸞という人は、回向という言葉で領解された。

■ わからない本願力

われわれは自分の力とか、自分の意思とかはわかるけれども、本願力というのは、まったくわからないというのが一つの壁なのです。親鸞にとっては、われわれがわかるような心やら意思は全部虚偽だと。人間存在の根本が、煩惱と共に生きているのだから、そこに起こる意欲やら意思、全部が本当のものではないと自覚表現されるわけです。そういうことを気づかせるはたらきが本願力だと。自分は正しいのだ、自分は自分でやれるのだという思いでわれわれは生きていますから、その限りでは、本願も本願力もまったく見当がつかない。いくら外に探してみても、手に入るものではない。太陽があったり、地球があったりするように本願があるわけではない。説明してわかるものでもない。説明してわかるようなものであったら、仏教の教えの言葉にならないのです。念仏はなぜ浄土に生まれる種か。本願がそう誓っているからだ。本願とは何だと。何だといってもわからない。信ずるほかない。信ずるほかないということは、自分の虚偽を外から照らす光の如くに、闇に差ししてくるという形で言葉が立てられている。自分がそれによって照らされてみて、そういうはたらきが真実なのだと信ずる。

「大涅槃を証する」という大テーマ、人間にとっての課題は、本願力の回向に藉るのだ。つまり有限なる人間が、自分から求めて得るという発想であったものが、^{ひるがえ}翻されて、完全に大なるはたらきが照らし出す闇の場になる。能動形で考えていた考えがひっくり返されて、自分という存在が受身形になって、真実のはたらきに照らされる場となる。そういうことによって、大涅槃を証するという課題が、人間のものになる。

■ 迷いを平気で生きられる位

「極楽」というけれど、涅槃だ。涅槃の楽を極楽と表現する。涅槃とは何だ。涅槃というのがわからないのです。法蔵菩薩は、四十八願を通して涅槃を莊嚴する。涅槃とは、いうなら四十八願のようなものと提出するわけです。

正定聚ということは、大涅槃を必定する位です。必定するということは、無限に歩む位です。課題とぶつかりながら無限に悩む位と言ってもよい。悩みを恐れない位と言ってもよい。そういう立場を開いて、そこに腰が据わるのが正定聚。だから、親鸞聖人にとっては、「現生」に「正定聚に入る」と言う（『聖典』240頁）必然性があるわけです。現生は苦悩の場、悩みの場。でもそこにこそ本願の救いが来るのだ。そこに腰を据えて、煩惱の闇を生きるのだ。苦悩の命を生きることと本願の救いとは別ではない。こういう救いが、回向成就の信心の救いです。これはすごいことです。それが大乘仏教の救いだ、ということをはっきりさせた。

無上涅槃には、信心をいただければ必ず至る。必ず至る位とは、どういう位かと言えば、迷いを平気で生きられる位。そういうことが成り立つのが、我ら煩惱成就の凡夫における「不断煩惱得涅槃」（『聖典』464頁）の救いだ、と言えるのではないかと思います。

（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2010年3月9日（火）午後6時30分～9時

4月 休 会

5月7日（金）午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑭

長短自在の命

親鸞仏教センター所長 本多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第31回、32回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第31回では、「第十六願」について、第32回では、「第十七願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第30回からその一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 長短自在の命

本願の第十五願は、「たとい我、仏を得んに、国の中の人天、寿命能く限量なけん。その本願、修短自在ならんをば除く。もし爾らずんば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』17頁、東本願寺出版部〈以下、『聖典』と略記〉）と。阿弥陀如来が仏に成るなら、その国の中の衆生はみんな寿命が無限であるのだと、こういう願を立てた。ところが、その後ろに「その本願、修短自在ならんをば除く」と。「修」は、おさめるという意味もありますが、長いという意味がある。だから、「修短」は長短ということです。ここの「本願」は、この場合は、一応は、浄土に生まれた人天の本願です。浄土に触れた衆生の根本の願い。その本願において、長かったり短かったり自在であるというものは除くと。

除くといわれると、修短自在でない存在もあるのかとも思うのですが、どうもそうではない。みんな修短自在を与えられる。だから、「除」といっても排除という意味ではないので

す。そうではなくて、除というのは、何かそこで存在の自覚に目覚めて、自らが自分で選んで立ち上がる。そういう意味がある。つまり、おもしろいと思うのですが、無限に生きてもよいよという世界は、実は、どんな短い命でも、無限の意味があるということでもある。われわれのこの有限の命の中だと、比較相対して、少しでも長いほうがよいという、そういう考えなのかもしれませんが、無限大の浄土の中では、自由自在である。つまり、修短自在ということは、人生の長い短いの問題ではないよということ、どこかで言い当てているのではないかと思います。だから、第十五願は、浄土を建立して衆生を招き入れるのだけれど、浄土に触れるということは、みんな浄土を離れて、短い人生で自由にできるということでもあるわけです。

浄土に往かなければたすからない。無限な命が欲しいから、浄土に往きたいというのだけれど、往ってみたら、あなたはもう無限の命をもらったのだから、自由に、自分の命を短くしてよい。自由に出て行ってくださいと言われて、わかった、出て行きますと言って出て行けるのが、第十五願である。おもしろい話だと思いますね。

■ 一念の歩み

つまり、有限な努力ということ言えば、時間は無限大に必要な。けれど、無限大の願心が衆生にはたらきかけたいということになれば、本当は、われわれの時間の中にはおさめきれないようなはたらきが、一瞬にして来る。譬喩で言うと、ものすごい速さで走っている短距離

走をしている人を、早いシャッターで、ぱっと撮ると、止まったごとくに見える。止まったごとくに見えるけれども、本当はものすごいスピードで走っている一コマである。そのように、われわれの時間の中に、無限大の時間をかけるような課題が切り取られて、一瞬にして与えられる。

ちょっとわれわれには、それは信じ難いのです。やっぱり時間をかけてやらなければいけないのではないかと。よいですよ、やってください。無限にかかりますよ。でも、そうではない道もあるのだと。有限から無限に行くのではない、無限が有限に来る。だから、「修短自在」ということは、浄土に触れたら、極端に言えば、一瞬でよいということです。無量の寿命がある世界にも触れるなら、一念一念の中に、無量の寿命の意味が来る。長く引き延ばして無限になるのではない。そういうものに触れないと、何か、われわれの人生は、いくら生きても、何年生きても足りないと思えないわけです。

凡夫が、少し訂正して仏に成っていくと考えたと、自力になるわけです。それで凡夫でよいのだと開き直ったら外道に墮するわけです。念仏ということは、念仏の一念に無限大の功德が来る。では、一声でよいのかといたら、いや、一声でよいとはいわない。縁のある限り称えなさいと。無限の功德が来るのなら、無限を二倍しても三倍しても功德は同じでないか。いや、その時その時が勝負なのだ。その時、その時に、全部が来ることを生きる。だから、一念に全部がありながら、一念が歩む。一念が終わらない。

■ 念仏はいつでも出直し

私は、頑固で、愚かで、愚かなくせに何か理屈ばかりこねているところがあるのですが、でも、こうやって長い間本願の教えを聞いていますと、有限な人間の自我がらみ、我執がらみの、自力がらみのものの見方、有限の自我を立てて、自我でどこまでも行けるという発想は間違っている、どこかで、それは本当は駄目

なのだと思わされる。これは、本当に不思議なことだと思います。そうすると、南無阿彌陀仏の一念に無上功德を感じるという力が来るのです。いや、俺は無限の時間がかかってもやる、七度生まれ変わってもやるなどと頑張っているうちは、この功德に遇うことはできない。そういうことではないかと思うのです。

自由自在ですよ。浄土の命に触れるということは、短いも長いも、どちらでもよい。無限なる光に帰ると、そこにもう無限に歩むということがあるわけです。一念一念、愚かな身において、無限の功德をいただいていく。「歩む」というと、だんだんよくなるのかというと、一向に変わらない愚かな身を歩むわけです。

もう何年前ですけど、念仏好きの聞法者がいて、その方と同席したときに、その人が私に、おまえは駄目だな、出直してこいと。はい、わかりました、出直しますと。いつでも出直しなんですよ、念仏というのは。だんだん立派になるのではないのです。それでは、何のために称えるのかというようなものですけども、何のために、「ために」が無くなるのが念仏です。一念に無限の功德をいただく。それが、菩薩道がここに成就するということである。そういうことが、この第十五願が暗示している問題ではないかと思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2010年6月 9日(水)午後6時30分～9時

7月 1日(木)午後6時30分～9時

8月20日(金)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑮

願が名であるということ

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第33回、34回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第33回では、「第十七願（続）」について、第34回では、「第十八願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行なわれた第32回からその一部を紹介する。

（囑託研究員 越部良一）

■ 念ずるところにまします

第十七願は「たとい我、仏を得んに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、我が名を称せずんば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』18頁）と。自分の願を諸仏が認めて讃めてほしい。讃めるということであるならば、我が名を称えてほしいと。もし讃めてもらえないならば自分は居ない、自分は仏に成らないのだと。こういう願をもって、自己自身とする。

曾我量深先生に、ある方が、自分は生まれて「南無阿弥陀仏」に育てられてきたけれども、どうもわからないと。大体、如来さまはどこにいらっしゃるのですかと質問された。それは、如来さまは、南無阿弥陀仏としてましますと。南無阿弥陀仏は南無阿弥陀仏と念ずるところにましますと、こう答えられたと。そういうことを聞いております。

つまり、称える人の居ないところに、どこかに抽象的に居る存在ではなくて、称えるところに現れる。称えるところに現にはたらいて来

る。本願もそうなのです。本願というものがどこにあるのではない。そういうはたらきを感じずる人のところに本願がある。あると言っても、物質がある如くにあるわけではない。人間の精神界にとってははたらきとして感ずるところにあるわけです。だから、ある人にはあるし、ない人にはない。龍樹的に言うなら、有無を超えてあると言うしかない。有る、無いを超えてある。

つまり、阿弥陀の名は、単なる実体的な名詞ではない。何かを名指す名前が、普通は名ですけど、今、この願における名は、称えられるところに名が具体化する。対象的に仏像になったり、名号になったり、書かれたものが仏なのではなくて、諸仏が讃めるところにはたらき出る。それが私自身だと阿弥陀は言うわけです。

この「諸仏」というのも、諸仏とは誰なんだという話になりますけれど、諸仏も実体ではない。諸仏も、称名するところに諸仏が諸仏の意味をもつと言ってもよいかもしれません。誰が諸仏だというのではない。諸仏がすでに居てというより、称名するところに、この阿弥陀の願に賛同するところに諸仏が成り立つ。「南無阿弥陀仏」という称名が成り立っているところに、阿弥陀如来がましまし、阿弥陀如来がましますところに諸仏が成り立っている。

■ 実体的な執われ

私も抵抗があったのは、どうしても名があると、名前に実体的な何か執われが出て来てしまう。そうすると、イメージとして仏像があって、

仏像に名前がついているのだと思いますから、そんなものは信じられんと。まあ、私も若気の至りで、寺で育てられていながら、何でもこんなものを拝むのだ、木を彫っただけではないかと。生意気に青年期にはそういうふうにはかと思えない。それで父親と喧嘩をしていましたけれど。

それは、結局、意識の対象にある実体しかわからない。人間の感覚の対象しかあるものを感じられない。見えざるものを信ずるというのは、迷信だと思ったし、そういうふうには教育されましたから、そうすると、名前があつてそれを信ずるというのは、実体があるのだらうと。阿弥陀仏というのはどこにいるのだと。そんなものはいないではないか。いないものを信じて何になるのだと。まあ、青年期はそんなふうには考えて、いないものに名がついているものは全部信じない。そういうふうにして生きようと思ったことがあったのです。名というものが、物質とか対象に名付けられるだけではない。宗教的なものを語ろうとする時に名付けられることがあるなどということは、まるで考え及ばなかった。これはなかなかわからないところですね。何でも見えるものにしなければやまという。

■ 名詞が動詞である

第十七願というものをもって名とするということは、名が実体ではない。願が名であるということです。それは物ではないし、実体でもない。願がはたらいて成り立っている事実を押さえている。ですから、阿弥陀の名は、単なる名詞ではない。これも曾我先生がおっしゃった言葉ですけど、阿弥陀の名号は名詞ではない。動詞であると。つまり名号は本願である。名であるけれど願である。願を失わずして名である。名詞だけれど、動詞である。動詞のままに名詞である。こういうことが、親鸞が「行」と言う意味だと。親鸞は、称名は南無阿弥陀仏だと。名号だと。名号が行だと。こう言っている。名号と称名と行とが一つになっている。名

詞が動詞であるということです。

仏教の言葉は、^が我を払う。ということは、実体を払うわけですから、全部本当ははたらいっているもの、動いているもの、作用しているもの、それをあらわす言葉なのです。たとえば「見」と書くけれども、見るという作用があるのであって、見という物があるわけではない。願も、願という物ではなくて、願いがはたらいて来ている。それが具体的にどうはたらくかといったら、苦悩している人間に如来の願いが響いてくる。自分が苦しんでいる。いや、そうではないと。お前の苦悩になって歩んでいる、もっと大きな願があるぞと。そういう教えの言葉が響いてくると、「ああ、願がまします」と。

こういうふうには第十七願を根拠にして行ということを押さえていくことによって、仏も実体化され、浄土も実体化され、人間の外に仏もあるし浄土もあるという、そういう教え方であったものが、本願のはたらきを信じて、その本願の言葉を自分自身に受け止めた人のところにはたらくものとしていただかれてくる。単に神話的な実体化された世界を信ぜよと言っているのではなくて、妄念を破って生き生きとした信念をそういうように具体的な形で、いただいているという教えになってきていると思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2010年 9月 休 会
10月15日(金)午後6時30分～9時
11月 休 会

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑩

信ずる自覚

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第36回、37回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、「第18願（続）」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行なわれた第35回からその一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 深信自身

善導は、『観無量寿経』の三心の「^{じんしん}深信」を釈して、深い心というのは、深く信ずる心だと。何を深く信ずるかということ、一つには、「自身は現にこれ罪惡^{ざいあく}生死^{しやうじ}の凡夫^{ぼんぷ}、曠劫^{こうこく}より^{このかた}已来、常に^{もつ}没^{もつ}常に^{るてん}流転^{りゅうてん}して、出離^{しゅつり}の縁あることなしと信ず」（『真宗聖典』215頁、東本願寺出版部）と。だから、自分から仏に成るなどということはできないと深く信ずる。これを第一深信というふうに申しております。二つには、仏の本願の力が摂取して、必ず浄土に往生せしめるはたらきをもってわれわれを包むのだから、それを信じて、それに乗る。「かの願力に乗じて、定んで往生^うを得と信ず」（同）と。これを、後の人間が、第一深信は「機の深信」、第二深信は「法の深信」、仏法そのもの、本願のはたらきそのものの深信だと。

この第一の機の深信を、親鸞聖人の『愚禿鈔』では「深信自身」、自身を深く信ずると。この自身を深信するという言葉を曾我量深先生が取り出して、「自身を深信す」というテーマで講演をされた。その時は、本当に不思議な感

じがしました。自身が曠劫より已来流転してきて、出離の縁がない。つまり、たすかるような縁は与えられないのだと信ずる。それで曾我先生は、本当にたすからない身だと信ずることができるが、自分を深く信ずることなのだとおっしゃるのです。曾我先生は、親鸞の三心の理解の言葉は、徹底的に機の深信だと。つまり徹底的に否定形でいただいていく。人間は不実である。虚偽である。罪業である。真実ではない。如来のみが真実。人間は徹底的に嘘である。

普通の理解では、自身を信ずるというのなら、自分の可能性とか自分を善しとする、何かそういう肯定的なものを信ずるというのが普通の理解で、だから、それは自尊心とか、自負心とかと重なるような自身です。ところが、それがいかに頼りないか。いかに迷信とか邪信とか、あるいは教育とか情報とかに巻き込まれて嘘を信じてしまうか。情報をみんな信じて一緒にひっくり返されるわけです。でも虚偽の中で人間は何かを信じて生きている。そういうあり方でたすかろうとするけれど、たすからない。そういう時に、信心でたすかるとはどういうことか。逆に、そういう時に、さとりではたすからないとはどういうことかを、親鸞という人は徹底的に考えたのです。深く自身を信ずる。その自身の内容は、曠劫より已来流転してきた身である。自身がたすかる可能性がないと信ずることが、どうやってできるのか。ここに大きな謎があるのです。

■ 法蔵菩薩の自覚

曾我先生は、これは結局、自覚の問題だと。自覚といっても、自分の意識を自分で反省するような、いわゆる self-consciousness という意味の自覚ではない。人間が自分で自覚できるかという、人間はどうしても甘くなるから、本当に深く自身はたすからない身だと信ずるなどということはできない。われわれは、中途半端なのです。やはりどこかでたすかるよ、どこかで自分は善い面もあるよと思いたい。徹底的にたすからない身だと考えたなら、絶望だと考えてしまう。機の深信は絶望ではない。法蔵菩薩の自覚なのだ。物語でいうと、法蔵菩薩は「十方衆生よ」と呼びかけて、あらゆる衆生をたすけたいという願心の名前ですから、願心の名前において自分を自覚すると、本当にたすからない身だということが出てくる。それは法蔵菩薩の心なのだと。こう曾我先生はおっしゃるわけです。法蔵菩薩の自覚は、それがそのまま、闇が光に転ずる契機なのだ。

われわれは中途半端だと、自分も信ずることもできないし、如来の願いを信ずることもできない。だから、曾我先生は、親鸞は地獄に足をつけているのだという表現をされるわけです。自分の存在は地獄に足がついた存在。地獄に足をつけて立ち上がって、浄土の空気を吸う。こう表現するのです。

■ 回向の信心

結局、信心によってたすかるということは、深く存在を自覚することによってたすかるということなのです。たすけてくれるものがあるからたすかるのではなくて、信が成り立つとたすかる。その信の構造は、内にたすからない身の自覚と、たすけずんば止まんという願のはたきとのぶつかる場所が、ここだと。こういうふうに教えられて、それを信ずる。だから、こちらに何かまだ能力があったり、可能性があったりする間は、如来は要らない。物語も要らない。まったく自分には可能性がないのだと信じられるときに、大きな物語が信じられる。そう

いうふうに法蔵菩薩の物語が信じられてきたのが、浄土の教えの歴史ではないかと思うのです。

そこに本願という願いが語られて、願いの一番中心は信心だと。この信心の質を、親鸞は回向の信心というわけです。大悲が、衆生を救いたいという慈悲に全力注入する。それが回向だと。信ずることができない人間に、信を与えたいというのが回向の信だと。回向の信をわれわれが感ずることにおいて、信一つでたすかる。信一つでたすかるということは、信ずることにおいて自覚が成り立つ。深く自分がたすからない身だと信ずるという自覚です。自覚の覚が、さとりという意味ではなくて、自分自身の愚かさを深く気づく。反省してわかるのではなくて、反省が届かない闇が教えられる。

どこまでも愚かな身であり、どこまでも自力の心が抜けない身であるという、そういう悲しみを抱えながら、法蔵願心を信じていこうとした。そこに親鸞の一生の歩みがあったわけです。たすからない身であることをずっと感じながら、にもかかわらず法蔵願心を信ずるときにたすかるのだと。だから、地獄に足をつけて歩むのだということです。そういう不思議な仏教が、信心の仏教として教えられている。そんなふうに私は、親鸞独自の信の構造というものをいただいていくことができるのではないかと思います。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2010年12月1日(火)午後6時30分～9時

2011年 1月6日(木)午後6時30分～9時

2月1日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」①⑦

絶対受身に立つ

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第38回、39回が東京国際フォーラム（千代田区）で行われ、「第18願（続）」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行なわれた第36回からその一部を紹介する。

（囑託研究員 越部良一）

■ 往相・還相回向の問題

親鸞聖人がおっしゃる回向によって成り立つ教え、回向によって成り立つ「行」、回向によって成り立つ「信」、回向によって成り立つ「証」、こういう教えが立つということは、自分は徹底して回向をいただく身、絶対受け身と言いますか、回向のはたらきに歩まされる存在である。能動は如来のはたらきであって、人間は受動であるという立場をくずさない。そういうことがはっきりしないと、この回向の教えは本当には明らかにならないのではないか。

それは、これまでの教えの了解に、どうにもわからない問題があった。何かというと、回向に二種の相あり、往相の回向と還相の回向の二つの相があると曇鸞が言っていて、今までの教義学の正統的理解というのは、回向のはたらきは如来からいただく。浄土に往相するのが衆生の相（すがた）だと。浄土に往相したら、今度は浄土から還相するのも衆生の相（すがた）だと。だから往相と還相という相は衆生に属すると。そう

すると、この愚かな凡夫が念仏に出遇って浄土に往き、浄土から還ってくるという、往ったり来たりは衆生に属するというイメージが残る。どうもそれはおかしい。それは中途半端なのです。往相・還相が衆生の相だと解釈するところには自力のなごりがあるのではないか。そう私は問題提起したわけです。

親鸞聖人の書いておられるものを読むと、衆生が往ったり来たりするイメージとは矛盾する言葉がいっぱいある。二種の回向、往相・還相の回向は弥陀の回向である。この往相・還相の回向にもうあう、値遇すると言っている。如来二種の回向によって信心を得ると書いてある。自分が往ったり来たりするなど、親鸞聖人はどこにも書いていない。今までの教義学が間違っていたのではないか。解釈学が間違っているのであって親鸞聖人は間違っていない。それは徹底的に受け身で如来の本願力をいただく。教義学は受動のような顔をしながら、回向だけいただいて、自分でやるという話にした。その他力は本当の他力ではないのではないか。

■ 南無阿弥陀仏が体

こちらに穢土があって、向こうに浄土を立てて、人間は浄土に往たらたすかるといふ、そういう浄土教に対して、親鸞聖人は本願が中心だと。念仏が体だと。善導大師は、『観経』は「一心に回願して浄土に往生するを体とす」（『真宗聖典』333頁、東本願寺出版部）と。往生浄土がこの經典の体だとおっしゃっているのです。「往生」をもって体とする。ところが親鸞聖人は、「南無阿弥陀仏」が体だと言ってい

るのです。『教行信証』に「『大無量寿経』、真実の教、浄土真宗」と、こう書いて『大無量寿経』の体は仏の名号、「南無阿弥陀仏」だと。このことの意味の違いをはっきりさせてなかったのが今までの教義学です。

穢土と浄土を立てて、穢土から浄土に往たらすけてやると教えるのは方便化身土だと親鸞は言うのです。すごい考え方だと思うのですよ。真実には「南無阿弥陀仏」に本願の体がある。「南無阿弥陀仏」の体をもって宗教的満足をいただくことが信心だと。そうすると、この信心は信ずることを出発点として何かをやっていくのではない。誓えるなら、あなたを信じて結婚します、それから生活していきましょうねと、そのような頼りない話ではないのです。信ずることがもう結論だと。本願を信ずればたすかる。信ずるということがたすかることだと。

でもみんなそれを素通りして、今、信をもててたすかっても、浄土に往って本当はたすかるのだという二重写しで考えた。そうすると生きている間はやはり本当にはたすからない。あるいは、まあ、二回たすかるというか、今生でたすかって、もう一回浄土でたすかる。そういう教え方をするわけです。現生の利益と当生の利益とか、此土の利益と彼土の利益とか、二重構造で救いを考える。

でも、親鸞聖人はそのようなことを言っていないのです。だから難しいと言えば難しいのですが、本願の救いをどこでいただくのか。如来が本願の教えを立てて、本当に衆生を救いたい、衆生を絶対満足させたいと誓っているのに、美味しいケーキだけれど半分だけ今日いただいて、後の半分は明日食べますと言って腐ってしまったような話でね。そういう救いが本願の救いではないのではないのか。本願の經典、本願の救いの体は「南無阿弥陀仏」であるということは、「南無阿弥陀仏」以外にもう一つ救いが欲しいということが教えられているのではないのだということです。

自分が往ったり来たりする、そうしないとまだ自分が自分になっていないというのは、自力

が残っているからです。まだ自分が何かをしたい。自分が本当の仏道の仕事をしたい。今はできない、だから如来さまのはたらきをいただいて、浄土に往って、それからやりましょうと。これは表現としてはあってもしかるべきで、『歎異抄』にはそういう表現があります。あるけれども『歎異抄』は唯円にわかり易いように、ある意味で方便しているところがあると思うのです。親鸞聖人の本質は『教行信証』にある。「南無阿弥陀仏」を手段としてそれを使ったらいいところへ行けますよという教え方は、方便なのです。でも、「南無阿弥陀仏」が人間をたすけるための手段だという考え方を親鸞はとらない。「南無阿弥陀仏」は「大行」だと。そこに本願が全面的にはたらくのだと。一部分「南無阿弥陀仏」としてはたらいて、一部分浄土を建立して、「南無阿弥陀仏」を使ったら浄土に入れますよと、そんなことを親鸞は書いていないです。

いや、教義学というのはこわいなと思って。長い間教えを聞いていましたから、私もそうかと思って、そういうふうを考えようとする、どうしても親鸞聖人の言葉にわからない言葉が出てくるのです。ですから絶対受け身に立つという姿勢、その立場を離れないということが、親鸞の教えの本質だと思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2011年3月 9日(水)午後6時30分～9時

4月 休 会

5月10日(水)午後6時30分～9時

場所：有楽町・東京国際フォーラム Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑩

「悲しきかな、愚禿鸞」

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第40回～42回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第40回、41回では「第十八願（続）」について、第42回では、「第十九願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、その第40回から一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■「悲しきかな、愚禿鸞」という表白

親鸞は、「信の一念」ということを押さえ直して、「『一念』は、これ信楽開発の時剋の極促を顕」すと（『真宗聖典』239頁、東本願寺出版部、〈以下、『聖典』と略記〉）。時剋の極めてはよい時、時だけれども時を截っている。時間のなかにあって時間を破るような時間。そういうものが一念の信だと。つまり、時間をかけて段々にどうにかなっていくという発想を截るわけです。少しでもよくしていこうという発想をすばっと截って、「横超断四流」（『聖典』243頁）、本願力のはたらきがわれわれの存在を横ざまに截って、迷いの命を断ずる。つまり、ある意味でそこに死ぬという意味があるのだと。これは、曾我量深先生は、善導大師の「前念命終後念即生」という言葉を手がかりにして、「本願を信受するは、前念命終なり」（『聖典』430頁）という『愚禿鈔』の言葉をヒントにして、信に死すると。信ずるということは死ぬことだと。本当に本願を信ずると決断することとは、完全な受身。ということとは、自力

の思いに死ぬということなのです。自力はもう役に立たんということを徹底的に知らされる。

そこに「にもかかわらず」という問題が残ってくる。「悲しきかな、愚禿鸞」（『聖典』251頁）という有名な表白がそこで出てくるわけです。回向の信心ですから、根拠が如来のはたらきにある。如来のはたらきにおいて、われわれは不実であり、本当に信ずることなどできない身であり、そして本当に願生するなどということがない身であると。『歎異抄』第九条にあるように、やはり少しでも長生きをしたい、正直なところあまり浄土に往きたくありませんと唯円が言う。それでこそ凡夫なのだ、当然だと親鸞聖人は受けるわけです。そんな心ではだめだ、しっかり願生せよ、そのようには言わない。「仏かねてしるしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば」（『聖典』629頁）と。もうわかっているのだと。それは、生死の凡夫ですから、生死の凡夫を直していこうという発想を完全に止めて、もうそのまま凡夫であることを認める。となると、そこに「悲しきかな、愚禿鸞」ということが出てくるわけです。

「悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず」、「愛欲の広海」、これは、煩惱具足の生活空間です。「名利の太山」、人間関係のなかで少しでも人からほめられたい、少しでも利益を得たい。そういうのが凡夫の本質である。全面的におまかせすると言いながら、煩惱がある。ということは後から後から自力の心が湧いてくる。嫌な心が起こってきたと気がつけば、止めておこうと思いますから、それは、自

力の心ですね。「定聚の数に入ることを喜ばず」。信心を得るということは、如来回向の信心なのだから、正定聚だよ、必ず大涅槃をいただけるのだと。でも、そういくら言っていたいても嬉しくない。これは信心がないのではなくて、如来のはたらきとして信ずるのだけれども、自力が消えない。そういう構造が信心なのです。他力の信心になったら自力根性が完全になくなって、もう人間でなくなるわけではない。人間なのです。愚かな凡夫なのです。

■「難治の機」

「悲しきかな、愚禿鸞」と、こういう言葉を置いて、そして、救いがたい衆生の代表として愚禿鸞ということを見据えながら、「難治の機」(『聖典』251頁)、難治の三病、治療しがたい存在として、五逆、謗法、それから一闍提という三つの言葉が『涅槃経』ではテーマになっていると。こういうことを出してこられる。

阿闍世が父親を殺して王位を篡奪し、父親を殺したことによって、もがき苦しんで、そしてお釈迦さまの言葉でたすかっていくという、『涅槃経』で語られているその展開を、親鸞聖人は随分とていねいに読み込んで、順序を変えたりしながら引用しておられる。

『教行信証』『信巻』の坂東本の表紙に、親鸞が書いたメモがある。そのメモは、「信巻」にある『涅槃経』からの引文で、阿闍世、あなたは王様になるのに自分の親を殺したけれど、そのようなことは歴史のなかにいくらでもある。その人たちはみんな地獄に行ったわけではないから安心しろと。そういうことを言っている段がある。その部分をどういうわけか「信巻」の表紙にメモのごとくに書いているのです。坂東本以外ではこのメモはない。だからちょっと謎なのですけど、でも、ここだけメモしているということには、何か意味があるのではないか。

自分の生きているということには、必ず他を排除したり、他を踏み台にしたり、あるいは他を食べたり、他の命を殺したりしてきて、それ

で今、自分が成り立っているということがあ。自覚するしないに関わらない。深層の宿業のなかにそういうものがずっとある。例えば、私は今、寺の住職をしていますけれど、以前は父親が住職をしており、私が四十を過ぎたころに、親父がくたびれた、くたびれたと言って、寺の仕事をしたくなくなってきた。それなら譲ればいいのに、譲らない。そうすると、なんだ、この親父は、いい加減に譲ればいいのにかね。さすがに殺そうとまでは思わないけれど、やはりそういう心は起こるわけです。そういうことはどんな関係でもないとは言えない。ただ、人間はそういう存在であるという罪に気づく存在である。もし気づかないなら、本願力の救いを本当に憑むということにはならない。

親鸞聖人において、たすからない存在、本当に治療しがたい存在の代表は阿闍世である。しかし、その阿闍世の物語は単なる他人事ではない。阿闍世のそういう物語が自己の問題として、切実な問題として感じられるという素質が親鸞にはあるわけです。だから親鸞という人はドストエフスキーの立場であったら、小説を書けるような素質だったと思うのです。何か、そういう人間の深い傷を痛まずにおれない。また痛むからこそ、本当にその傷から治癒されることを要求するのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は下記のとおり公開(無料)で開催しています。

記

日時：2011年 9月 休 会
10月3日(月)午後6時30分～9時
11月1日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記(京都・東本願寺出版部)まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑬

念々に自力に死に他力に生きる

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第43回～46回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第43回、44回、45回、46回では「第十九願（続）」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第42回から一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■ 三願転入は一念の事実

往生というけれど、往生にも三願（第十八願、第十九願、第二十願）に応じて三往生がある。こういうふうに親鸞は見た。「^{そうじゆりんげ}双樹林下往生」から「難思往生」へ、難思往生から「難思議往生」へと、往生自身が歩む。不思議な考え方です。往生というのは、死んで往生するのではない。精神生活が歩むことが往生である。信心自身が純化して、自力が^{ひるがえ}翻されて本願力に帰していくまでの歩みに、いろいろな往生がある。往生を一回するのではない。こういう見方をするわけです。

この三往生も、三願の展開も、解釈学者などは、いついつにはここまで来た。その次の段階はここまでと。例えば、比叡山時代は第十九願、法然門下は第二十願、流罪以降が第十八願だと。そういうふうに段階を分けるのですけれども、われわれが仏教に触れ、仏道を生きるときの内容は、段階的に表現を分けることができることもあるけれど、でも、いつも重なっているのです。一念同時に重なっている。

今の内容、今の思いに、過去の体験やら記憶

やらというものも張り付いているし、未来の可能性も入っている。今の一念というものの展開を開けば過去と未来とに分けられるけれど、あるのは現在だと。こういう考え方からすると、これは曾我量深先生がおっしゃっているのですが、三願の転入は一念の事実だと。

これはわかり難いことですが、わかり易い了解をして、一つ言ってみると、例えば、今、本願に帰して「南無阿弥陀仏」を信じていると。こういくら言ってみても、ちょっとした縁で、やはり自力の思い、自力の悩み、自力の迷いは起こる。それは、なくなるのではなくて、乗り越えているけれども、完全に切れているのではない。いつも縁と共に現象する。しかし、また間違っていたと気づいて本願に帰する。本願に帰する決断が一度もないと、自力のままがいている。でも、一度気がつくと、自力が起こってもすぐ乗り越えていける。こういう生活が本願力に乗じて生きて行くということなのだろうと思うのです。

■ 念々に死につつ生きる

第十九願は、人間の離れがたい自力の執心を教える。これをある意味で、本当にもう二度と立ち返らないというような信念になるのが、他力の信心である。では、それはいつなのかというと、今の一念の事実である。それを、死して生きる、「^{ぜんねんみんしやうじゆう}前念命終^{ごねんそくしやう}後念即生」（『真宗聖典』245頁、東本願寺出版部。〈以下、『聖典』と略記〉）と。念々に妄念に死んで信心に^{よみがえ}甦る。そういう時が今「南無阿弥陀仏」と共に与えられる。

何か図式化して、いついつまではこういうところ、いついつまではこういうところだと、そのようなわけには人間の経験はいかない。じわじわじわじわ生きて、じわじわじわじわ死んでいくわけでしょう。念々に死につつ生きている。信仰生活も念々に自力に死に他力に帰しつつ生きているのでしょうか。帰し終わったということはない。

だからいつでも念仏生活なのです。一遍称えたらそれでお終いというわけにはいかない。確かに親鸞聖人は、本願力に乗ずるところにもう生死を超えるのだ、もう二度と自力の妄念には返らないのだというように表現されることもありますけれども、人間はそうすっぱりといかないと思うのです。一度帰したらもう絶対他力がいい。理論ではそう言えるけれど、現実には、妄念の衆生である私どもは、一向に煩惱妄念から足が洗えない。泥沼のなかを生きている。でも念仏がいただける。気づくことはできる。間違っていたなと気づきながら歩んで行くのだと思うのです。

曾我先生は、本願の教えには完成はないのだ、入門はあるけれど卒業はないのだとおっしゃった。われわれは何でも早く卒業したいわけです。さっさと足を洗って、いい加減に卒業したいと思っている。けれどなかなか現実の人間は、生きている間は、やはり妄念が抜けない。それが凡夫ということです。凡夫であるから真実信心は得られないのかということ、そうではない。凡夫であるからこそ本願力に帰する。「煩惱具足と信知して 本願力に乗ずれば すなはち穢身すてはてて 法性常樂証せしむ」(『聖典』496頁)と。法性常樂を証するということと、煩惱妄念を生きているということとの境目に、本願力に乗ずることがあるわけです。そういうことが、親鸞聖人が明らかにされた往生する生活の内容だと思うのです。

■ 人間は立体的

第十九願位というのは他人事ではない。私どもが自力の執心をもって生きているところに、

いつも何かささやきかけてくる。自分が何か善いことをやって善人になりたい。悪人であると気づく反面で、善人になりたいという思いを離れがたいのです。それが人間のかわいらしいところなのかもしれませんが、実はそこに、本当に本願を信ずるということが、どこか曖昧になっていく。

この第十九願の問題は、そう簡単に三段跳びのように、いついつまで第十九願だった、いついつから第二十願、はい、今日からは第十八願ですと、そのようなわけにはいかない。一応開けば、そういう展望で歩んで来たと表現はできる。でも、現に生きている人間自身は立体的です。煩惱から足の洗えない人間が自力を完全に捨て去るなど、そのようなことはできないのです。凡夫ですから。

しかし、本願力に帰するということがもっている意味は、自力の立場は間違いだと気づいたと。気づいたから捨てられるかということ、捨てたつもりでもやはりくっついていてというのが、情けないかな、我らなのですけど、でも表現としては、本願力に乗ずるところにもう「無生法忍」を得るのだとまで親鸞はおっしゃる。そういう利益を煩惱の生活のなかにいただけるということを教えてくださっているのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、下記のとおり公開（無料）で開催しています。

記

日時：2011年12月 休 会
2012年 1月10日(火)午後6時30分～9時
2月 6日(月)午後6時30分～9時
場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分
テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000
ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。
TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211
<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」②

存在の真理に対する疑い

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第47回、48回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、「第二十願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第45回から一部を紹介する。

（囑託研究員 越部良一）

■ 自力の努力のうちにある疑い

第十九願は方便化身土の願であるわけですが、その方便化身土を表すときに、親鸞は『大無量寿経』の後ろのほうの「智慧段」と言われている内容を引用している。そこに「疑惑」という言葉がある。疑いとは何であるかという、仏教の定義では、「ちょっと待てよ」と、「猶予」というふうに定義されている。ちょっと待てよということは、そこですぐハッとわかって決断することができない。結局、仏の教えをそのまま聞けないのです。

親鸞もこの疑いに随分苦しめた。そこに方便化身土という問題も関わるのです。つまり、『観無量寿経』の救いは、九品に分けて、それぞれが努力して生まれていく世界をどうも語っている。それを代表的に九つに分けて、それぞれ違った人間に、違ったかたちで浄土が現れてくる。努力を呼びかけるということは、人によって努力の内容が違ってしまふのはやむをえませんから、立派な努力をした人間はよい世界へ行く。できなかった人間は地獄にでも落ち

る。そのように見るのは当たり前です。でもそれでは、どのような命であっても平等に本当の救いを与えたいという如来の願いに背くわけです。悪人でも生まれられると。でも全部違う世界なのだと。人間が求めて得たとなると、そういう世界になりますよと。実は、それは本当の大悲に対する深い疑いなのだと。つまり、本願の救いを本当に信ぜよと言われているのに、先ほどいった猶予という問題が絡む。やはり自分の努力のほうがわかりやすい。自分はこれだけ善いことをやったので、これだけ善い結果を得た、と思いたい。精一杯善いことをして、人の喜ぶことをし、人がたすかるようなことをして、自分は善人であると思って、その結果を得たと思っている世界は、実は深い疑いがある。そのことに気づけない。

■ 死後往生の考え方にある二心

その疑惑は、結局、現在生きているということに対する根の深い疑いに関わっているわけです。自力で往生しようと思えることが疑いだとは自分では全然思わない。それは人間が積極的に疑う疑いではない。けれども、そこに存在了解として、実は疑いに関わっているのだと。

疑いに関わるということは、ちょっと待てよということですから、今の時間を二分化して、「今」と「臨終」というように時間を二つに分けて、救いも二つに分けて了解しようとする。疑いを親鸞は「二心」というのです。二つの心でものを見ている。疑いがなくなるということは「一心」が成り立つということ。二心というのは、あっちのことも考え、こっちのことも気

にしている。分裂しているわけです。みんな二心で生きているから、死んだら往けると教えられと安心するのです。今たすからなくても、死んだら往けるのならよいかと。現在はたすかっていないということです。そういう救いを仏陀はわれわれに呼びかけているのではない。親鸞は、この愚かな身のままにたすかるのだと。疑いが晴れるということが、たすかるということだと。われわれは、愚かな凡夫であり、深い疑いをもって生きている。そういう深い疑いに苦しんでいる人間に、如来は一心を与えたいのだと。

■ 自分自身に対する疑い

われわれが普通感じる疑いは、このことはどうなのかな、という理性が感ずる疑いです。しかし、生きていること自身の根にある疑い、存在論的疑問、こういうものを親鸞は取り出してきたのです。これは対象を疑っている普通の疑いとは違う。自分の存在の成り立ちについての疑い。理性が対象を疑う疑いではなくて、存在の真理に対して、それを素直に受け入れることができないという疑いです。

存在に対する疑いというものは、何を疑っているのやら、われわれはよくわからないのです。それはつまり、今、与えられてあることに自分が納得しない。今ある情況、例えば、男性であるということも、男性でよいのかどうか。女性であるということも、女性でよいのかどうか。あるいは、さまざまな因縁で繋がっている家族関係がこれでよいのかどうか。生きてきた軌跡、こういうふう生きてきたがこれでよいのかどうか。そういうことの全部を包んで、今、自分はここにあるということを、本当に納得するかと問われれば、われわれは納得できない。あれも取り替えたい、これも取り替えたい、あそこも直したい、こちらもどうにかしたいということだらけです。これでよいとは、なかなか思えない。それは実は煩惱の身で感じている正直な事実なのです。そのことが存在に対する疑いなのです。だから現在たすからないのです。

先日、この世に本当に偉い人がいるのだと思って、感心してお話を聞きすることがありました。それは、カトリックのシスターの高木慶子先生という方のお話だったのですが、最後のところでおっしゃることは、われわれとほとんど同じだと思いました。それは、与えられているままを、ありがとうございますといいただくのだと。それが私の祈りですと。これは、「ナンマンダブツ、ありがとうございます」というのと、ほとんど同じだ。それぞれ立場は違うので、言葉も違うし、歴史も違いますから、考え方も違うところがあるとは思いますが、結局、存在を本当に受け止める。与えられている一人ひとりの宿業因縁を本当に疑いなく受け止めるということが人間の課題であることには変わりはない。

けれど、人間は受け止められない。それが疑いなのです。そういう質の疑いは、なかなか自分でも見えない。疑いという外に対する疑いだと思っている。友だちに対する疑いや会社に対する疑い、一番近くは連れ合いに対する疑い、そういう一番近いところでさえ一枚にはなれないと思っているけれど、自分自身に対する疑いがあるとは思っていない。でも、それが実は人間がたすからない根本原因である。これを教えているのが、この第十九願ではないかなと思うのです。（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、公開（無料）で開催しています。

記

日時：2012年3月 6日(火)午後6時30分～9時
4月 休 会
5月16日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分
テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」②

凡夫称名と果遂の誓い

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第49回、50回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第49回では「第二十一願」「第二十二願」について、第50回では、「第二十二願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第47回から一部を紹介する。

(囑託研究員 越部良一)

■ 凡夫称名

第十七願は、「諸仏称名の願」といわれて、諸仏によって名が称えられるということがある。第二十願は、「設我得佛、十方衆生」（『真宗聖典』18頁、東本願寺出版部。〈以下、『聖典』と略称〉）とあって、衆生に我が名を称えてほしいという呼びかけになっている。衆生が称えるということは、与えられたものを行として凡夫という身で称える。それに対して、諸仏が称名するということは、阿弥陀如来の本願、願いに賛同しますよというかたちです。称えたから仏がもっと偉い仏に成るということはないのです。仏と仏とは平等である。あの仏より俺が偉いなど比較する煩惱がない。一人ひとりが一人ひとりの仏のあり方、仏地に住して、そして悠々と仏であることを喜んでおられる。そういう世界が開けている。凡夫の世界はそうではない。我欲と利権の世界ですから、あいつよりは上にいってやろうとか、逆にあいつより下に置かれたからといって怨むとか、そういう比較対対の

世界です。そうすると、同じ念仏を行ずるということの内容が随分と違う意味をもっているということがあるのではないか。

第十七願、「諸仏称名の願」こそが純粹なる大行だと。これにおいて名号は大行であり、大行が行ぜられてあるところに、絶対満足の一如の功德宝海が開かれる。しかし、なかなか「南無阿弥陀仏」を聞いて称えるところに絶対満足があるなどと人間はわかりませんから、凡夫の考えでは今生きているところは不平不満だらけの、ろくな世界ではない。不平不満がない世界が欲しいと考えて、そのために何か行為をしたり努力をしたりして生きている。それに役に立つ行をくださるなら、それを一生懸命にやりましょう。こういう関心です。だから、凡夫称名、凡夫が称名するということになると、大行の事実にならない。

■ 定散自力の称名

自分を支えているもの、自分を動かしているもの、そういうものは、みんな何か自分の根源から、違うものがはたらいていると気づくときに、自力から他力への転換が起こるのでしょうが、起こったときに飛びついたのが念仏でも、その念仏をまた自力で行ずる。だから、こういうご和讃がある。「定散自力の称名は果遂のちかいに帰してこそ おしえざれども自然に真如の門に転入する」（『聖典』484頁）と。念仏に帰するのだけれど、「定散自力の称名」とおっしゃる。人間の側の心として、「定」、精神統一の心か、「散」、行動する心かというので、定・散の機ということをおっしゃるわけです。自分

に縁のあったあらゆる行をやってみたけれどもだめだった。それでは、念仏ひとつを如来が誓っているのだから、それでいこうと。こうなるのだけれど、心根に定散が残っている。もともともっていた、自分が修行をしてどうにかなろうと思う、そういう自力心が「南無阿弥陀仏」を取り込もうとする。それをここで定散自力の称名というわけです。

われわれが自分の我執のままに念仏すれば、念仏する動機といい目的といい、全部、定散自力だといってもよいのです。念仏したことによってちょっとは心が落ち着いたとか、称えていたら何かよいことがあったとかしかわかりませんから。それでどのようなことになるかというと、親鸞は「同行・善知識に親近せざる」（『聖典』356頁）ということを書いています。つまり、叱咤激励してくれるような友人やら師匠が見えなくなって、この世でこの程度ならよいと自己満足をして歩みが止まる。これは、人間が本当に歩むということが仏法であるなら、その仏法を忘れるということです。それはまさに三宝見聞の利益を失うという、化身土の宮殿の中のかたちとして親鸞が『大経』から引文するのとぴったり合うわけです。阿弥陀の世界に生まれたと思った途端に三宝、仏・法・僧がいなくなる。

■ 果遂の誓い

第二十願は「果遂せずんば、正覚を取らじ」（『聖典』18頁）と結ばれている。第二十願を果遂するとは、第二十願の救いを成就するという意味もあるのでしょうけれども、第二十願の救いに止まってはならないという果たし遂げ方がついているとも見られるわけです。つまり、如来の大悲が衆生の気づきを勧めるために、「果たし遂げずんばやまん」という誓いをもってわれわれにはたらきかけている。たすからなかったのは、自分の根に本当に本願力を信じようとしないという問題があったのだと。名号を信じないわけではない。名号を信ずるのだけれど、それを使って何かよいことがくると称え

る。それは凡夫の行です。でもわれわれ凡夫は凡夫の行を出ることができないのです。凡夫としてこの世を生きていれば自力の執心は抜きがたい。この問題を親鸞聖人は第二十願の問題として徹底的に考えられた。

どうしたらこれを抜けられるか。人間からは抜けられない。自分で出ることのできない闇がある。そのときに、果遂の誓い、本願力は、その闇をも破らずんばやまんとはたらき続けているのだと。一如宝海に帰るまで、どうか歩んで欲しいと願っている。それに気づけば、ひとりでに真如の門に入る。われわれから入っていけないものではないけれど、向こうから来てくださる門がある。「果遂の誓いに帰してこそ おしえざれども自然に 真如の門に転入す」と。こういう何か謎のような言い方で、第二十願のはたらきというものの大きさを教えてくださっているのではなからうかと思うのです。

ですから第二十願というものにおいて、われわれに気づかせる闇の部分と明るみの部分と、両面があるように感じられます。歩ませる批判原理として第二十願というものを親鸞聖人は見いだされた。第二十願に止まってはならない。第二十願を超えて、本願力を本当に信受する第十八願に帰してほしい。そういうのはたらきが果遂のはたらきにある。こういうことかなと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、公開（無料）で開催しています。

記

日時：2012年6月13日(火)午後6時30分～9時
7月 4日(火)午後6時30分～9時
8月 6日(月)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの——『大無量寿経』を読む——」②②

しゆく ごう いん ねん

宿業因縁の命の自覚

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの——『大無量寿経』を読む——」の第51回、52回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、「第二十二願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第48回から一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■「天国」を求める心

法蔵菩薩の名前で本願が浄土をつくりたいと。その浄土のなかの命を「国中天」と呼ぶことが多い。六道流転、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上という、この六つのあり方を命はぐるぐる回るとするのが、インドの神話的な人間理解なのですが、どういう状況が与えられるかということも宿業因縁です。そのなかで一番よい状況が人天、人間と天上です。

天上というのは広くいえば「天国」です。天国ということで、何か身体の物質部分がなくなって、精神的なものだけがあるようにイメージする。曾我量深先生は、仏教に触れないならばどのような宗教であっても、人間が求めるものは天国だと、おもしろいことを言っておられます。つまり、天人になりたいのだと。天人は身体がないから自由自在です。自由に飛んでいけるし、縛りはありません。つまり、宿業がないのです。

行為した結果、その行為の蓄積が自分に集まって、自分だけではない、自分と一緒に生きている周りのものにも影響を与えて、そのこと

が不自由、縛りをもってくる。人間は、縛られるのは嫌ですから、自由でありたい。特に、ヨーロッパ近代の中心的な価値として、近代的自由ということが謳歌されてきた。しかし、これは仏教からすれば天人なのです。もともと身があれば、身は親から生まれるのですから、親から生まれたとたんに、もう自由ではありません。自分で欲するような身体を自分で得たわけではないですから、はじめから宿業因縁なのです。それをヨーロッパの文明は近代的自由という概念を生みだして、あたかも人間が自由になっていけるような錯覚を与えました。

だから、このごろはお葬式の弔辞で、亡くなった方は天国に行ったというように、多くの人が言うのは、これで自由になってよい世界に行ったのだと言いたいわけです。そういうふうに見たいわけです。それに何の矛盾も感じていないのが近代の日本人の常識でしょう。

法蔵菩薩が、本当の人間を生み出すような力をもった場所を開きたい、という願いで国中天と呼びかける。ところが、それを聞いて浄土を獲ようとする、そこに親鸞は深い自力の罪を見た。人間が願いとして思えるのは天国である。その衆生はみんな自由で、美しくて、お互い縛りがなくて、何かフワフワして、とてもよい場所、これに人間は弱いのです。その天国のなかに埋没していくようなかたちで、如来の世界を名号を通じていただこうとする。そういうことが第二十願というものが教えている、人間の脱皮できない深い闇である。

■ 宿業因縁の悩み

曾我量深先生は「私は、知識人は嫌いです」と言っておられました。あんなに難しいことを言う先生の文章を、知識人以外の誰が読むのかと思うのですが、曾我先生が言われる「知識人」とは、自分はさておいて理性で論理を考える人のことです。そういう態度では本当の仏教の真理に触れることはできない。これは非常に厳しい言葉です。結局、宗教問題は評論家が何か対象を論ずるのと違って、自分自身の宿業に自分が傷ついて脱出できない悩みをどうしたらよいかという問題抜きに、出遇うことはできないと思うのです。天国を求めるような心では、本当の仏教の精神に触れることはできません。

つまり、人間はどこかでわかるというかたちで安心し、自分のわかるところで納得するということがあるのですが、宿業因縁の問題はわかりません。なぜ私はこの両親から生まれなければならないのかと言っても、答えはありません。しかし、事実があります。けれども論理的原因があるわけではなく宿業因縁があるので。このことは、仏教がそういう言葉で呼びかけているのだと気づくしかありません。だから「業感縁起^{ごうかんえんぎ}」という言葉があります。業に感ずる。感ずると言っても、単なる感情ではありません。感得すると言いますか、うなずくという言い方をするのですが、その出遇いを抜きに、たすけてくれるという感覚で本願をとらえることを親鸞聖人はご和讃で「疑心の善人」(『真宗聖典』506頁、東本願寺出版部)と言っています。よい世界に行くと信じて念仏を称えるのは、その「信」自身が疑い心なのです。善人というのは、天人と重なるような善人です。宿業を引き受けない心と言ってもよい。外側からものを見ている態度で、自分の実存的な責任を自分で本当に取りうとはしないことです。

宿業に縛られた存在、特に罪について、自分が罪の存在だということを、人は見たくもありません。自分の責任だとも思いたくもありません。結局、自分がこのように生まれて生きているということは、自分の自由に行為をした責任、

ではないのですが、これを生きるべく命が与えられているのだと引き受けるしかない。そういう意味の責任。自分でそれに気づけるかという、気づくことができないので、明々白々に存在を照らし出すものを、如来の智慧と言うわけです。如来の智慧に照らし出された自己、これは嫌とは言えない。つらい因縁であろうと、嫌な因縁であろうと、そういう因縁を引き受けて生きるしかない。これを逃げて救いを求めるのは、その心が善人です。善人は天人であるというのは、そういうことです。自分自身のつらい嫌な面からは逃げて、よいところで生きていけると思いながら、そのために仏の名を称える。仏の場所は自由になれる場所だと思って、そういう世界を要求するその心は、実は深い疑い心なのです。

仏教の信は、自己自身の成り立ちを深く知って信ずることです。この信のところに、いわゆる悪人正機や機の深信などと言われる、宿業因縁の命の自覚があるので。そのことを本当に如来の智慧としてうなずくことができるということは、自分だけがそういう因縁に苦しんでいるのではなく、みんなそうなのだとうなずけることです。如来の智慧から照らされれば、みんな宿業因縁に傷つき、苦しみ、もがいているのだと。こうした眼のうえに本当の平等の世界を開いていこうとするのが、法蔵菩薩のお心であると思うのです。(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、公開(無料)で開催しています。

記

日時：2012年 9月 休 会
10月19日(金)午後6時30分～9時
11月13日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗^{せいしん}聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000
ご希望の方は、下記(京都・東本願寺出版部)まで。
TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211
<http://books.higashihonganji.or.jp/>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」②③

おう そう え こう げん そう
往相の回向と還相の回向

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第53回、54回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第53回では「第二十三願と第二十四願」について、第54回では、「第二十五願と第二十六願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第52回から一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■ 往相の回向・大涅槃を得る

『教行信証』の「行巻」に非常に考え難い一連の言葉があります。「しかれば、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。すなわち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す、普賢の徳に遵うなり。知るべし」（『真宗聖典』192頁、東本願寺出版部。〈以下、『聖典』と略記〉）。そして、曇鸞和讃では「還相の回向とくことは利他教化の果をえしめすなわち諸有に回入して普賢の徳を修するなり」（『聖典』492頁）と。「諸有」というのは迷いの世界、生死の世界です。如来の回向に値遇するということは、往相の回向と還相の回向に値遇する。往相の回向の利益として大涅槃にまで至る。それでおしまいかというと、おしまいではない。大涅槃を得れば普賢の徳を修すると。そのようなことは凡夫にできるはずがないから、死んでから浄土に往ったら還って来られると。以前はそう解釈したわけです。しかし、親鸞聖人は、そのように書いてはいないのです。

われわれが大涅槃を得るということを考えると、われわれは煩惱具足だから大涅槃などとも得られないと思います。しかし親鸞聖人は、曇鸞和讃で「往相の回向とくことは弥陀の方便ときいたり悲願の信行えしむれば生死すなわち涅槃なり」（同上）と、往相回向の利益には大涅槃を得る、と言ってくださっている。ここに、親鸞聖人が語っておられることの、現代人ばかりでない、親鸞聖人の弟子にしてもなかなかわからない問題があったのではないかと思うのです。つまりわれわれは、時間的にも空間的にも、有限のなかに遠近感があったり、過去・現在・未来と時間が過ぎていく感覚があったりして、そのなかでものを考えていきますから、いくら「すなわち」、「即」と言われても、今でない即だから、その次だろうと。わからないところはしょうがないから死んだ後にしておけば、一応、事は済む。しかし、親鸞聖人はそうは言っていない。死んだら、とは「証巻」のどこにも書いていません。

これは私の了解なのですが、本願に帰する、このこと一つを信じようということが起こったときに、正定聚に住する。正定聚に住するということは、往相回向、還相回向の利益のはたらく場所になる。本願力を依り処にして、私どもがこの煩惱の命を喜んで生きる力が与えられ、本願力を証明するような命が与えられてくるといいうことです。ですから「光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず」と。衆禍の波が無くなるのではないけれど、それを転じていく生活が与えられてくる。そうすると、「速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を

証す」という意味をもつのだと思います。

われわれは「浄土」と教えられても、妄念としてどこか違うところにあると思ひ込んでいますから、こちらにいるのだから浄土には往ってはいないと考えるのですが、浄土は、教えの世界、本願が莊嚴している世界ですから、どこかにある世界ではないのです。われわれは煩惱を地として煩惱の生活をしているので、浄土ではないのです。しかし、本願がはたらく世界を感じたら、そこが浄土なのです。そうすると、譬喩で言えば、足は煩惱の大地に立って、信心は浄土の功德を呼吸する。膝から下は泥田の中にあって、首から上は浄土を呼吸する。それが往相回向の信行を獲ることによって成り立つ信心生活なのではないかと思うのです。

■ 還相の回向・普賢菩薩の仕事

そうすると、その時に、時を隔てず、日を隔てず、大涅槃の利益と接し、大涅槃の利益と接するということは、もう、即、大涅槃のなかに還相の回向がはたらいてくる。普賢菩薩の仕事は、衆生を仏道に入らしめる。つまり、凡夫として生きているのだけれども、本願を信じ喜んでということが何かのかたちで影響を及ぼすという生活もありえる。これは自分でやるものではありません。自分で光るのではないのですが、本願があると少し人間が楽になるのかなとか、信心を生きていると自由なのかなとか、何か感じさせるものがあるのです。法蔵願心が人にはたらいて、人を通してまた伝わっていくというようなことを起こしてくる。

本願力をいただいたものは、いただいただけでは済まない。いただくことができたならば、それが縁となって本願力はどのようなものだろうかと語れば、またそれが縁となって知ってくださる方も現れてくるわけです。自分でやるのではないのです。自分はどこまでもいただく立場です。いただくことを証明することはできません。人間が信じてたすかっていると、本願力がはたらくことが証明されますから、それで伝わっていくこともある。親鸞にとっては法然上

人が生きてくださっていた。親鸞が生きていれば、弟子がそれを見て生きていく。親鸞は、それは面々のおんはからいだと言います。私が伝えるわけではない、私の弟子ではないと。一人ひとりが本願を信ずるかどうかなのだと。本願がはたらくのです。

宗教的時間は「信の一念」、「今」です。いつかどうかなるという話を語ったら、これは宗教的時間ではありません。生死無常の時間です。宗教的時間は、千載の一遇、今、ここに出遇うか出遇わないかしきありません。今、涅槃を得なかったなら意味がない。今、信心を獲れば、往相回向の利益として必ず涅槃を与える、その「必ず」に出遇うのは、今なのです。そこに、普賢の徳を修するということが、その「必ず」の内容として、今、与えられる。自分でやるのではない。法蔵願心のはたらきが自分を通してはたらくのです。

体は名号の信心です。体は名号なのですが、名号を信ずる心がなければ、名号ははたらいていませんから、人間にはたらくときには名号の信心としてはたらく。これが、正像末和讃で「南無阿弥陀仏の回向の 恩徳広大不思議にて 往相回向の利益には 還相回向に回入せり」（『聖典』504頁）と言われる内容なのではなからうかと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、下記のとおり公開（無料）で開催しています。

記

日時：2012年12月17日(月)午後6時30分～9時
2013年 1月16日(水)午後6時30分～9時
2月 7日(木)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp/>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」②

言葉が光の意味をもつ

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第55～58回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第55回では「第二十七願から第三十願」について、第56回では「第三十一願と第三十二願」について、第57回では「第三十三願と第三十四願」について、第58回では「第三十四願と第三十五願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第54回から一部を紹介する。

(囑託研究員 越部良一)

■ 迷いを切り開く力をもった言葉

第二十五願は、「国中菩薩」、国の中の菩薩は、「一切の智を演説すること能わずんば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』19頁、東本願寺出版部）と。菩薩道において、菩薩が衆生を救うために仏陀の智慧の内容を説く。仏陀の智慧の内容を言葉にして語りかける。

言葉ということには、自分自身が自分のなかで独り言を言うといえますか、自分自身に自分を確認するような言葉と、それを外に、他の人に表現する言葉があります。言葉というものが、一つの言葉があるのではなくて、いつも自分のなかに自分を確認していくような言葉をもつ。

そもそも、思想家とか、もの書きというのは、ある意味で世間の付き合いに絶望した人なのでしょう。ものを書くということは、一人にならなければ書けません。話をしていたのでは書け

ません。だから付き合いに絶望するとか、あるいは、自分自身に絶望するとか、何かそういうことがものを考えたり書かせたりするのだと思うのです。宗教もそうだと思うのです。宗教を求めるということは、たすからないから求めるのであって、たすかっている人間は求める必要はないわけですから。罪とか苦悩とか、闇とか悪とか、何かそういう普通の世間でいえば否定概念、自分の立つ瀬がないというような苦しみがあって、宗教の言葉が身に浸りてくるわけで、そういうことなしに宗教を求めるということはありません。

だから、煩惱の闇とか、そういう「闇」と言われる人間の暗さに対して、それを開くものは、何か開いた智慧をもった人の言葉なのです。言葉それ自身は別に闇とか光とかというような作用をもっているわけではないのでしょうけれども、ものの考え方を変えるような作用をするわけです。「ああ、そういうふうに考えることができるのだ」と気づかせる。だから言葉は自分の内に自分の考えをもう一度問い直し、自分で正しいと思ったり、自分ではこういうものだと思っていたことが、そうではない、間違っていたのではないかと、そういうふうに自分のなかに問い直しが起こって、閉鎖されていた考えが開かれる。こういうことをもたらすときに、言葉が光の意味をもつわけです。

仏陀は沈黙から語り出した。語った言葉が、また人間を迷わしてもいるわけですが、それを本当に切り開く力をもった言葉、それをこの第二十五願は「一切の智を演説する」というかたちで与えようと言うのでしょうか。

これは逆に言えば、この濁世を生きている人間は、本当の言葉、正しい言葉を出せない。大体、意思が邪欲ですから。まあ、われわれ人間は、人との付き合いのなかで言葉を語ることが多いのですが、自分一人になって本当の言葉を自分に語れるかという、そういうものでもないのです。自分の妄念のなかで自分を痛めつけたり、自分をおとしめたりする言葉を自分にぶつけて苦しんでいるわけです。そういう言葉ですから、他に対したときでもよい言葉になるはずがない。また相手を傷つけたり、侮蔑したり、そういう言葉になってしまう。そういう言葉ではない、本当の智慧と智慧とが伝わっていく言葉を生み出せるような場所、この場所に触れて、互いに生きた言葉が取り交わせるようにしたいというのでしょ。

■ 自分自身に自分で語りかける言葉

日本語表現というのは、言語学では場の表現だと、そういうふうに使われているらしいのです。場を汲んで表現が出てくるのが日本語の独特な性格であると。だからヨーロッパ語などに比べると説明がとても少ない。それは、お互いに場を生きていて、場が語っているものをお互いに汲み取りながら表現が出てくるからです。

ですから、これは悪い例ですが、「おい、お茶」、「めし」、「風呂」、「ねる」とか、それだけで、ああ、疲れているのだとか、そういうことが全部わかる。「おれは腹がへったから、そろそろめしにしてくれ」とか、いちいち言わなくてもよい。極端な場合、そのぐらい場があって言葉が出る。場をもってお互いに生きているという、そういう文化、これが日本文化の大きな力らしいのです。ヨーロッパやアメリカで、こうした場のもっている力を説明しようとする、とても大変らしいのです。とにかくたくさんの言葉を使わないと説明にならない、わかしてもらえない。しかし、現代という時代に、できるだけそれを他の文化圏にも発信するためには、面倒でも、いったんそれを、その論理を言語化しなければならない。言わず語らずでは伝

わらないのです。

確かに何か本当の感動は言葉を越えたものがある。しかし、いったん、それを何とか努力して言葉にしなければならない。言葉にすることが、特に非常に大事な時代になってきているのではないかと思うのです。

私なども、しゃべるのが大体苦手なのです。こうやってしゃべっているから、好きだと思われるかもしれませんが、誤解されるのです。しかし、苦手などと言ってられないので、何とか表現しようとして言葉を探している。結局、言葉というのは、自分自身に自分で語りかける言葉が大事で、それが、また人にも本当に伝わっていく。私は、そういうふう言葉を使いたいと思っているので、自分にわかるように、まず語っているのです。皆さま方にわかってもらえるように、もちろん語らなければ意味がないのですが、第一義的には私自身にわかろうとして語っているのです。

自分のなかに芽生えてきたものを自分のなかに自覚化する言葉にして、それをまた表現していく。そういうことが、このごろ、だんだんと欠けてきている、どうも衰えてきているような気がするのです。一人ひとりが、自分のなかに言葉を確認して、それを表現することができる場を生み出していかなければならないのではないかと、そんなふうに思います。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

日 時：2013年3月7日(木)午後6時30分～9時

4月 休 会

5月8日(木)午後6時30分～9時

場 所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

聴講料：無料（どなたでも聴講できます）

※座席数に限りがあります。(80席)

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp/>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」^{②⑤}

見えざるものののはたらき

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第59回、60回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第59回では「第三十六願と第三十七願」について、第60回では「第三十八願から第四十願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第56回（第三十一願と第三十二願）から一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 方便法身

曇鸞大師が『浄土論註』で阿弥陀仏も阿弥陀仏の国土も「方便法身^{ほうべんほつしん}」であるとおっしゃった。この場合の「方便」は『法華経』のいう嘘も方便という方便ではない。浄土を教えて、「法性法身^{ほつしやう}」という形ないものを、形あるものとして語って気づかせるのだと。「法性法身に由^よって方便法身を生ず。方便法身に由^よって法性法身をいだす」（『真宗聖典』290頁、東本願寺出版部）と。この二種の法身は別ではない。けれども一ではないと。

化身土が方便だという場合は、そこに止まってはならないと。そこからさらに本当の願いの世界に帰ってほしいという意味の方便。この場合の方便は、教学用語では「権仮方便^{こんけ}」といいます。これはまさに『法華経』などのいう方便です。方便法身という方便は、人間がそれを失うと、すべてを失ってしまう。だから、それしかない。それを忘れると帰るべき拠点がなくな

る。「南無阿弥陀仏」が方便法身であるという場合は、これを忘れたら本願の教えを忘れてしまう。そういう意味の方便。象徴であるという方便なのです。形のないものを形にしている。実体的なものがあるわけではない。人間にとって精神生活というのは、何か具体的な形をとったものを通して形なきものを感じていくことが歩みになると思うのです。そういうことが非常に大事なのだと、つくづく思うのです。

例えば、一つ譬喩^{ひゆ}を出させていただくと、諸仏とは何であるかわからない。でも例えば、あなたのおじいさん、何年か前に亡くなっておられるだろうと。この世にはもう影も形もない。色も臭い^{にお}もしない。でも思い起こせば、おじいさんがいたころの姿かたちが現れるだろうと。そう思えば、あなたが今いることもおじいさんのお陰でないかと。そのような話をすれば、ああ、そうだなと何か感ずるわけです。いないものが意味をもって感じられる。おじいさんばかりではない、おばあさんでもよい、亡くなった母親でも、子どもでもどなたでもよいのです。ともかく、そういうないものがはたらくわけです。ないものがはたらくけれども、はじめから何もなければ何もわからない。でも、ある形にすれば、言葉にすれば、ないものが形をもてば、意味をもつわけです。

■ 祖父が怒っているような気がする

これは半分自慢になるのですが、このたび、親鸞仏教センターがお手伝いして、前田専學先生にお願いして、鈴木大拙英訳の『教行信証』

をオックスフォード大学出版局から出版することができました。本当に不思議な因縁で、いろいろな方がバックアップしてくださって出すことができました。

これをどうしても親鸞仏教センターでやらせてほしいと言って、当時の熊谷宗恵事務総長にお願いして、取りかかることができたのは、一つには私の祖父（宮谷法含）が大拙先生に『教行信証』を英訳してほしいという手紙を出したということを知っていたからです。祖父はもう死んでいるけれど、「俺がせっかく頼んでやったのに、大谷派は何しているのだ。初版で出したきり、もう五十年もたって二版も出さん」と、あの辺で怒っているような気がしたのです。祖父は怒りっぽい人で、もう怒るとすごかったです。祖父が怒っているような気がする、ぜひともやらせていただきたいと言ってお願いしたら、とんとん拍子でことが進んで、これは大拙さんも応援してくれたような気がするし、祖父も後ろから押してくれたような気がするのです。気がするの、実体はどこにもないのです。私が勝手に思っている妄念かもしれませんが、こういう仕事を成り立たせてくれたのです。

こういうことは不思議なことで、見えないものがはたらくのです。そういう因縁で頼んできたのかと思われて前田先生も引き受けてくださったのではないかと思います。英訳を頼んだのは私の祖父なのです、再版をどうしてもやりたいのです、どうか引き受けてくださいと、そう私は言いましたから。前田先生は坂東性純先生の同級生ではないですかと。坂東先生が亡くなられた直後だったのです。坂東先生もこの本を出してほしいと願っておられた。坂東先生から頼まれたと思って引き受けてくださいと。そのような厚かましいことを言うことができたのも、ここに祖父がいて、祖父がしゃべっていると思ってお願いをしました。自分ひとりでやったとは、とても思えない。何か見えざるものがバックアップしているように感ずるとできることもあるのです。

■ みんな他力の力

自分の力で浄土を獲得しようとする要求が残っていると、本当の意味で本願他力のはたきがいだけない。利用しようとするだけです。自分がやりたいのだけれど、自分の力が足りないから他に依頼する。この世で通用している他力は、そういう意味です。曇鸞大師が他力という場合は、自分自身を成り立たせるような力を他力という。自分で自分になっているのではない。自分のはたきはいいただいたものだと。

私などは、このごろ、本当にそう思って仕事をさせてもらっているのです。自分でやっているのではない、嫌でもやらされる。もう嫌だと言っておられない。みんな他力の力がやらせてくれている。自分でやろうなどと思ったらくたびれてしまって、とてもやっていられません。しかし、みんなやらせてもらっているのだと思うと、歡んでやれるようになるのです。好きなことならやろう、嫌なことはやりたくないといったら、大概やりたくないのです。我執は煩惱を起こして、好き嫌いばかりを言っているわけです。それが破れると、もったいなくもやらせてもらえるわけです。そういう眼で親鸞聖人のお言葉をいただいていけば、親鸞聖人の教えが少しずつ身に浸みしてくるのではないかと、こう思うのです。（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、公開（無料）で開催しています。

記

日 時：2013年6月5日（水）午後6時30分～9時
7月3日（水）午後6時30分～9時
8月7日（水）午後6時30分～9時

場 所：有楽町・東京国際フォーラム Gブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000
ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。
TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211
<https://books.higashihonganji.jp/>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」②⑥

人生態度の転換

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第61回～63回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第61回では「四十一願と四十二願」について、第62回では「四十三願」について、第63回では「四十四願と四十五願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第60回から一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 生きることの意味転換

第三十八願は、「たとい我、仏を得んに、国の中人天、衣服^{えぶく}を得んと欲^{おも}わば、念に随いてすなわち至らん。仏の所讃^{そさん}の応法^{おうぽう}の妙服^{めうふく}のごとく、自然^{じねん}に身にあらん。もし裁縫^{さいほう}・擣染^{とうせん}・洗濯^{かんたく}することあらば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』22頁、東本願寺出版部。以下、『聖典』と略記）。衣服を欲しいと思えば与えられる。「擣染」は色を染めることで「洗濯」は洗濯です。今は、近代文明のおかげで、縫うのはミシンでやれるし、染色も機械でできます。そして、洗濯機はもう何十年前に日本中にいきわたりましたから、このようなことは楽にできるのですが、昔はこういうことが本当に大変なことだったわけでしょう。衣食住と言いますが、衣食住が思いどおりに与えられるということは、人間が生きるうえでの深い願いなのでしょう。

これは文字どおり、物が与えられるというふうにも読めますが、法蔵菩薩の本願の意味を考え直して見ますと、それは、人間個人の思いを

超えて一切衆生の生きることの一番根に呼びかけている。生きるために悪戦苦闘している人生に、悪戦苦闘しなくてよい条件を与えようという呼びかけなのですが、それは物を与えることが目的ではなくて、願に触れることが本当に生活になるなら、そこで生きるの意味が変わる。仏陀の願いに触れて立ち上がって見ると、生活のために人間の欲で欲しいと思っていた物が与えられるのが救いなのではなくて、願を生きるところに、願を生きるだけのそれ相應の生活物資に恵まれていることが見いだされてくる。そういう意味転換が深い意味では考えられるのではないかと思います。

衣食住といった問題は、もう本当に物が無い時代であれば切実な願いかもしれません。けれども、この切実な願いが満たされたら宗教的に人間存在の意味が満たされるわけではない。人間の欲は満たされるけれど、欲が満たされることが人間の救いではありません。

■ 安田先生の奥さまのお話

私が長い間お世話になった安田理深先生の奥さまが、先生が亡くなられてからつぶやいていたお話なのですが、主人と一緒に、主人が仏法一筋なものだから生活のためにミシンを踏み、着物を縫い、内職で稼いで、そして貯めたお金で生活するのが精一杯だったと。それから毎日毎日が不平不満です。そのせつかく貯めたお金も、奥さまがうっかり日を離そうものなら、先生がさっさと本屋に行って好きな本を買ってきてしまう。そうするとまた怒り心頭でけんかになる。主人からは「お前は鬼だ」と言

われたと。そのくらいとにかく恨み骨髓に生きていたと。その間は、風邪も引きやすい、腰は痛い、もうあっちこっち、とにかく悪いところだらけで、この世が怨みの対象のようにして生きていた。仏法を生きようと思ったけれど、こんなひどい目に遭うのかと。

ところがあるとき、先生のところに学生さん^{じゆんじゆん}が来て、先生が仏法の話^わを諄々としていた。その隣でこっちは洗濯をしている。そのころは洗濯機のない時代ですから、洗濯といえば井戸の水をバケツに汲みかえて運んでします。実際、生活は大変だったと思うのです。ところが、その学生に対して先生が懇々と仏法の話をしている、その姿が実に楽しそうだと。なぜあの人^{ひと}はあのように楽しげなのかと。貧乏生活は一緒に、空腹なのは同じです。しかし、片一方は恨み骨髓、けれど先生は楽しそうに仏法の話をしている。そのときに、これは自分の考え方が間違っているという声がドーンと来たというのです。自分が間違っていたと思ったのだと。それが四十歳のときのことで、それまでは風邪は引くわ、腰は痛い、そんな状況だったのが、生活に意欲が出てきて、それから不思議なことに今まで不足だ不足だと思っていたことが何にも不足でなくなったと。そういうお話をしてくださいました。

こういうことは滅多には起こらないと思うのです。恨み骨髓の人間が一生恨みのままに死んでいくことのほうが多いわけでしょう。でも起こりうるのです。それは人間の欲で思う存分生きていきたいと思っている間はそうはいかない。ところが、いや、このままでよいのだと、そのようにいただけたならば、すーっと楽になったと。これは私に起こったわけではなく、奥さまに起こったのです。でも奥さまは何か特別の三昧に入ったとか、覚りを開いたというのではなくて、本願を聞くということに生活を変えようとして、それまでも念仏の生活は一応しておられたそうですが、お念仏が身についたのだと。そのように言っておられました。

■ 清沢先生の言葉

清沢満之先生は「請ふ勿れ、求むる勿れ、汝何の不足がある」という文章（『臘扇記』）を書いておられます。人間はあれも足りないこれも足りないと思って生きている。でも何も求める必要はないのだと。「若し不足ありと思わば、是れ汝の不信にあらずや」。随分きついことを言われるかと思っていたのですが、人間はどんなよい状況でも欲求不満はあるのでしょうか。子供がいなければ子供が欲しい、いればいたで女の子ばかりだと男の子が欲しい、男の子だけなら女の子が欲しい、両方いればもっと良い子が欲しいと言うわけでしょう。きりがありません。そういう欲求を自分で消そうとしても消すことはできません。しかし、それがひとりでに満足させられる世界があるのだと。これが本当に聞かして仏弟子になったときに遭遇する利益なのです。

「南無阿弥陀仏をとなうれば」と言って、親鸞聖人が「現世利益和讃」（『聖典』487頁）で語られるのは、そういう眼の転換なのであって、欲が満たされる現世利益ではない。人生態度の転換が獲得できるなら、どれだけつらくとも、どれだけ外から見て不幸な状況に見えても、本当に尊い、この人生あったらこそと言えるような人生になってくるのです。こうした意味の転換が、願に触れるということだろうと思うのです。（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、公開（無料）で開催しています。

記

日 時：2013年 9月 休 会
10月1日（火）午後6時30分～9時
11月5日（火）午後6時30分～9時

場 所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000
ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。
TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211
<https://books.higashihonganji.or.jp/>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」②7

宿業因縁を突破する眼

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第64回～65回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第64回では「第四十六願と第四十七願」について、第65回では「第四十七願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第62回から一部を紹介する。

(嘱託研究員 越部良一)

■ 人生のミゼラブル

私は思うのですけれど、宿業因縁というものは、それ自身が消えることはない。ある意味、変えられないわけです。われわれが生きてきた軌跡、生きてきた結果は自分に乗っているのです。雪の上をスキーですべてシュプールがついたごとくに、自分の人生を生きてきた背景が自分に乗っている。それは絶対に逃げられない。でも、この人生でないほうがよかったという怨念と言いますか、ルサンチマン、自分自身に怨みを抱いているという、これは深層意識です。自分が意識しているときに、そう思っていない、起きているときは、私はこれで満足ですなどと偉そうなことを言っても、夢では違う。もっとよい状態に生まれ直したいという夢を見たりしているのです。それは怨念だと。こんな自分でないほうがよかったという、どこかにそういうものを人間は抱えている。そういうことは掘り下げていけば必ずあるわけでしょう。いわゆる幸せ、幸福と言うけれど、幸福とい

う言葉は相対的に良い状況を言うのです。幸せになってほしいということは、なるべく苦悩の少ない、楽な生活をしてほしいというような願いでしょう。でも、それが人間にとって本当に満たされた命かという、これはわからない。問題は、人生、時間が無駄に過ぎてしまうといひますか、本当に尊い時間を、罪から逃げようとして、無駄に過ごしてしまうということにあるのではないかと、私はこのごろ思うのです。空しく過ぎるという問題は、貧乏だとか病気になったとか以上に悲惨なことなのだと。いろいろやったけれど全部無駄だった、生きたことが無駄だったというような人生が一番悲惨なのだと。私どもの人生というのは、何か一生懸命生きているようだけれども、罪を作って、何か闇を深めて、何を生きたのだろうというような面が残ってくる。そうするとそれは悲惨です。皆、どこかで人生のミゼラブルを抱えているわけですから。

生きていて、そのミゼラブルがなくなることが、本当にどうしたら成り立つのか。そういうときに、親鸞聖人は『浄土論』の「^{ふこさじゆうじ}不虛作住持功德、空しく過ぎることはないという功德が浄土の功德だ」と。それは阿弥陀が命を住持して、支えてくださっているのだから、それに触ればもう空しく過ぎない。それを「本願力にあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき 功德の宝海 みちみちて 煩惱の濁水へだてなし」（『真宗聖典』490頁、東本願寺出版部）と、親鸞聖人は和讃される。浄土の功德に死んでから遇うと言っていないのです。本願力に遇えば、もう空しく過ぎないのだということは、それでミゼラブル

が解消するという意味があるわけです。安田理深先生は、本願に遇うことが不虛作住持であるとは、この世に無駄なことは一つもなかったのだという人生になるのだと。こういう言い方をしておられました。われわれは、あれをやらなければよかった、これやらなければよかったと後悔がいっぱいついてくるわけです。それはみんな空しく過ぎたということです。いや、よかったのだとどうして言えるのか。

■ 信仰の勇氣

これは禪だとか浄土教だとかということを問わず、宗教というものは、何か有限な人間の条件が良くなるという話ではなくて、人間の有限の条件は、よくよく見れば行き詰まりをもたざるをえないようなもの、あるいは、空しく過ぎてしまうというような面を逃れることができないものである。悲しいけれども、どうしようもない。にもかかわらず、それが^{ひるがえ}翻るチャンスなのだと。こういうところに、宗教の言葉を聞いて、それをいただく勇氣があると思うのです。

勇氣という言葉は、あまり仏教では言わないのですけれど、ティリッヒというキリスト教の思想家に、「Love, Power, and Justice」という講演があります。そのPowerというのは、Courageだと、勇氣だと言うのです。信仰による勇氣と。清沢満之先生はティリッヒとまったく関係がないのですが、やはり他力の信心というのは、智慧と慈悲をいただくことによって力をいただくのだということを言っておられます。清沢先生も現実にぶつかって、この世をどう生きるか、処世という問題に随分苦しみましたから。自分の力では、左へも右へも、前にも後にも、身動き一つできない。「この私をして虚心平氣にこの世界に生死することを得せしむる能力の根本本体が、即ち私の信ずる如来である」(『我は此の如く如来を信ず』)と。どうやって生きていってよいかわからないときに、無限他力の信念をいただくことにおいて、虚心平氣に生きていくことができると。

■ 平常心これ道

「平常心これ道」という禅の言葉があります。この言葉を鈴木大拙先生は好きで「平常心是道」と掛軸にするように書いておられます。曾我量深先生が、最晩年、お亡くなりになる直前に、現生正定聚という教えは「平常心是道」ということではないかとおっしゃっておられました。平常心というのは、禅では「喫茶喫飯」が仏道であるといって、することなすことすべてが仏道だと。生きていることが仏法なのだと。こういうことを言うわけです。ということは、有限な命のほかに無限があるのではない。有限な命のところに無限大悲をいただくのだと。清沢満之でいえば、他力は「自分の稟受^{りんじゆ}に於てこれを見る」(『臘扇記』)と。稟受とは、「稟」も「受」も受けるということです。自分が受けている、つまり宿業因縁をいただいているところに、無限他力があるのだと。こういううなずきです。

この世で人間が宿業因縁の違いを突破するような眼をもつことは非常に難しい。常にそれに縛られてしまう。でも、南無阿弥陀仏を称えるところに、本願を聞け、無限大悲の声を聞けと。この声を聞くときに、またおまえは闇を歩いているな、と気づかされる。人生の根本的な眼の違いを知らされるわけです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、下記のとおり公開(無料)で開催しています。

記

日 時：2013年12月 3日(火)午後6時30分～9時
2014年 1月16日(木)午後6時30分～9時
2月 6日(木)午後6時30分～9時

場 所：有楽町・東京国際フォーラム Gブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000
ご希望の方は、下記(京都・東本願寺出版部)まで。
TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211
<https://books.higashihonganji.or.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」②⑧

聞法は終わらない

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第66回～68回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、「重誓偈」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、第66回から一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■ 本願のわからなさ

本願については、本願というのがあるのだと何となくわからないと、親鸞聖人の教えにしる浄土の教えにしる、何を言っているのかよくわからない話になるわけです。「本願って何ですか」と質問されると困ってしまう。本願という話をするために私は何年もかかっているわけですから、そう簡単に答えられないのです。質問する側は好奇心か何かで聞くのでしょうか、好奇心で聞かれて答えられるような内容ではないのです。

人間が生きて悩んで苦しんでいる。なぜ苦しんでいるのか、というようなことから始まって、それを解きほぐすにはどういのちを考えたらいいか、どのように自分を考え直したらよいのか、そのような仏教の根本問題と関係しながら、本当にいのちを回復させようという大きな願いがこの仏道のなかで聞き当てられてきて、本願という言葉で伝えられてきた。だから本願というものがどこかにあるのではなくて、人がそれによって歩まされ、それを求めて出遇うことで喜びを感じずるような何か大きなもの、

それを本願という言葉で書きとどめてきたわけです。そのような言葉のなかで、この本願の教えを聞くことによって新しいいのちの意味をいただいた方々が本願に帰する、自分は本願に命を捧げますというかたちで伝えてきたものです。だから辞書に書いてあるような言葉で、「はい、わかりました」というわけにはいかない。本願を説明して、本願とは阿弥陀如来が建てたもの、などと書いたって、何のことかさっぱりわからない。

『無量寿経』という經典も、その本願を衆生に呼びかけるために生み出されてきた經典と言ってもよいわけで、本願が何かわからなかったら、『無量寿経』を読みなさい、と言うしかないわけです。しかし、それを読んでわかるかと言ったら、わからない。経の宗致が本願である、経の体は名号であると。なおさらわからない。名号って何ですか。『無量寿経』の体だと。『無量寿経』というのは名号で、名号を教えるためにいろいろな言葉になっている。その一番大事なところが本願なのだと。本願は名号を教えるための願いが語られている。その本願がわからなければ、名号がわからないわけです。

こういうわけで仏教は難しい。もうちょっと易しく説いてくれと。でも、そう easygoing にすぐわかるようなものは、だいたい偽物です。そう簡単にはわからないのです。命が短いから早く教えてくれと言うのだけれど、まあ、最後はしょうがない、念仏しなさいと。念仏したら仏さまがたすけてくださるから、それを信じなさいと。そういうわけですが、そう簡単に信じられないから、こうやってやっかいなこと

を言うのです。人間はなまじ理性があるものだから、疑う煩惱をもっている。「疑い」とは根本煩惱です。人間は理性をもっているから神さまに似て賢いのだなどと、とんでもない話です。賢いようだけれど煩惱なのです。その疑いの煩惱を晴らすのは容易ではない。疑いといっても、理性ですら見えないような疑い。つまり、いのちを疑っている。本当のいのちとは何かがわからないで生きている。そのことが実は真実の如來の教えに対する疑いになっているわけです。

そういうわけで、本願の言葉は、解説して済むというようなわけではないのです。

■ 入門はある、卒業はない

『無量寿経』の教えも、一切衆生がたずかるために「南無阿弥陀仏」一つでよいと簡んだ。だから単純明快に「南無阿弥陀仏」だけでよいと言うのですけれど、南無阿弥陀仏だけでよいと本当に頷くには、言葉の約束ごと、言葉で語っている内容、そういうことをある程度聞いて、ああ、そういうことだったのだとうなずいていかないと、南無阿弥陀仏がありがたいということにならないわけです。一つでよいのだけれども、その一つが一つとしてわかるためにはたくさんのことが必要になるから、これがまたやっかいなのです。一つでよい、他が要らないというのは、散々聞いた結果そうなるのです。だから、^{はしこ}梯子で屋根に登って、屋根に登るのが目的だったら梯子を外してよいというようなものですが、梯子がなかったら下に降りられない。梯子があっても下に降りないと、次に梯子を登る人に登り方を教えることもできません。

そういうわけで、教えの言葉とは、辛抱強く、そのように尋ねて、そのようにうなずいていった歴史があって、それを聞き当てられるまで聞いていくという仕事が、あとから行くもの仕事になるのです。なかなかこれは容易なことではない。長年聞いたらわかるというものでもない。何かこれは、その人その人の機縁なのです。機縁が熟すれば、言わんとすることの本質をすぐ見抜く方もある。いくら聞いても、やはり疑

いの濃い人は受け入れない。出遇いも機縁です。誰に出遇うか、どういう言葉に出遇うか、それはまったくわからない。だから、どれだけ聞いたからわかるというものでもないのですけれども、納得できるまでは聞かなければならない。それを聞法というのです。

曾我量深先生があるとき、「この仏法は入門はある、しかし卒業はないのだ」とおっしゃった。それはどういうことかと言うと、人間は愚かである、どこまでいっても迷いが深い。そこに苦悩を突き破ったものに触れよという願いがはたらき続けるから、そのはたらきに触れ続けるところに喜びがある。卒業する喜びはなくてもよいのです。聞法は終わらないでよい。ニコニコしながら、「死ぬまで聞法、死ぬまで聞法」と言ってきてくださっている方がありましたけれど、死ぬまで聞法です。そういう覚悟ができればよいわけです。早くに終わらせたいなどと思うから、もうちょっと易しく話してくれと、そういうことを言うわけです。早く終わらなくてもよい。それは一回でも喜びがあればそれでもよいと言えるけれど、苦悩の命に終わりはありませんから、また聞いて、また聞いていく。そういうことが、法蔵菩薩に触れるということなのだろうと思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、公開（無料）で開催しています。

記

日 時：2014年3月 6日(休)午後6時30分～9時
4月 休 会
5月23日(金)午後6時30分～9時

場 所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『^{せいいてん}真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000
ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。
TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211
<https://books.higashihonganji.or.jp>

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」②⑨

精神的な事実

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第69、70回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、「重誓偈」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第67回から一部を紹介する。（囑託研究員 越部良一）

■ 無上道に終わりはない

「重誓偈」に「志求無上道」（『真宗聖典』25頁、東本願寺出版部。以下、『聖典』と略記）、無上道を志求するとあります。仏道は無上道と言います。成仏道とも言われるから、なかなかわかり難いのですけれども、本当は仏道に終わりはないのです。仏さまは一切衆生を救いたいという行に入られてはたらくわけですから、一切衆生が生まれ変わり死に変わりしている間は、終わらない。終わりが無い道というのが、これが人間には耐えきれない。『華嚴経』などの菩薩行でも終わりが無いことを語っているのですけれども、早く終わりが欲しいものだから、読む側が何か適当に終わりを作ってしまうのです。本当は、終わりが無い道に生きて死んでいくのではないかと思うのです。

終わりのない道みたいなものではしょうがないではないかと。いや、終わりが有る道のほうがしょうがないのだと。終わりのない道が見いだされたら、もうそれは尽きることがない。法蔵菩薩の願もそうなのです。われわれの願は大

した願ではない。ちょっとしたことで、すぐなくなってみたり増えてみたりするわけです。でも、本当の願は消えることがない。本当の願に触れたら、その願は終わることがない。そういう願です。法蔵菩薩の願が、自分にとって、ああ、尊いものだといただけたら、その願が自分にとって無上の意味をもってくる。それが歩ませてくる。そういうものが無上道です。

■ この世的にはないもの

そうした終わりのないものを、仏陀は「法身」とおっしゃったわけです。肉身が死んでも法身は死なないと。死なない法身とは何だろうと考えてもわけがわからない。法身という言葉はあるけれど、実体はない。実体ではなくて、触れた人が感ずるものです。でも、それを出して見ると言われても出せない。けれどないのかといったらある。そのあるなしは物質的なあるなしではないわけです。執^{とら}われている精神が解放されるとか、闇に閉ざされていた精神が明るみになるとか、そういう事実が起こってきて、それを起こすはたらきが法身ですから、精神的な事実はあるわけです。

こういうものが言葉になっていますから、仏法はなかなかわからない。結局、私も長い間、仏教の言葉を聞いても聞いても、何を言っているのかさっぱりわからなかったのは、全部、何か形あるもの、物質的なものに換算してわかってしまうものですから、どうしても意味がわからない。出^あ遇^あって見ないとわからないものは、ないのですよ、この世的には。この世的には

ないものだけれど、精神にとってはあるものです。その精神にとってあるものを開いてくるために言葉があるわけです。

本願はどこにあるか、どこにもない。けれども、本願はある。本願がはたらいているということを感じる。感ずる人間には、別にどっちの方角にあるとか、どれだけの大きさだとか、そういう形であるのではない。でも、あると感ずる。「南無阿弥陀仏」を念ずるところに、闇が晴れていくという事実が起こる。「南無阿弥陀仏」と念ずると心が落ち着いてくるとか、執われていたことがほぐれてくるとか、そういう事実が起こるわけです。それは精神的な事実です。精神的な事実というのは大きいのです。心配していた、でも何でもなかった。そうしたら、ほっとするでしょう。別に何もなければ、心配しているということはあったわけです。それで、「ああ、よかった、何でもなかった」と。そのときには、何も変わってなくても、思っている心が変わるわけです。

仏法の言葉は、そういう執われを破って、それに触れることによって人間が解放されるようなあり方と呼びかけるための言葉ですから、こう言うては変かもしれませんけれど、ないものを語っているのだと言ってもよいわけです。ないものを語っているのだから、そのようなものは要らないのだ、そんなものではない。人間にとっては絶対に必要なもの、ものというよりも、必要なのはたらきなのです。

■ 念仏するところに阿弥陀仏はおられる

親鸞聖人は、信心が現生に獲る十種の益のなかに、「心光常護の益」（『聖典』241頁）ということをおっしゃっています。念仏の信心をもつと、心の光、これは阿弥陀如来の心の光、あるいは法蔵菩薩の心の光と言ってもよいのですが、如来の心の光がいつも護ってくださると。それは、自分の闇の心、愚かな心が、「南無阿弥陀仏」を思い起こすと阿弥陀如来の摂取不捨のはたらきが来ていると、こう感ずる。独り不安

になっているけれども、いつも護ってくださるのだよと。

阿弥陀の名で願いを呼びかけて、それは心を開くはたらきをもちますから、闇を明るくする。心の闇は物質的闇ではなくて、自分で勝手に暗くなっているわけですから、暗くなっている心が明るくされる。それが光のはたらきです。別に物質的光ではない。誰であっても、どこであっても、闇をもって苦しんでいる衆生に光を届けたいという願いが阿弥陀の願いですから、まだはたらいていないように見えても、はたきたいという願いからすれば、あらゆる世界に阿弥陀の光は行っているわけです。感じない人間にとってはないわけでしょう。ないけれども、教えに触れて開かれてみれば、本来照らされていたのだと。気づかなかっただけなのだ。

だから、曾我量深先生が、阿弥陀如来はどこにいるのですかという問いに、「南無阿弥陀仏」と念ずる人のところにいますと。お浄土はどこにあるのですか。阿弥陀如来のおられるところにあります。だから念仏するところが浄土なのです。阿弥陀如来のおられるところが浄土なのです。それは果てがない。「重誓偈」の「普く無際^{むがい}の土を照らし」（『聖典』25頁）の「無際の土」というのは、そういう意味です。

（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、公開（無料）で開催しています。

記

日 時：2014年6月18日（水）午後6時30分～9時
7月18日（金）午後6時30分～9時
8月21日（水）午後6時30分～9時

場 所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000
ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。
TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211
<https://books.higashihonganji.or.jp>

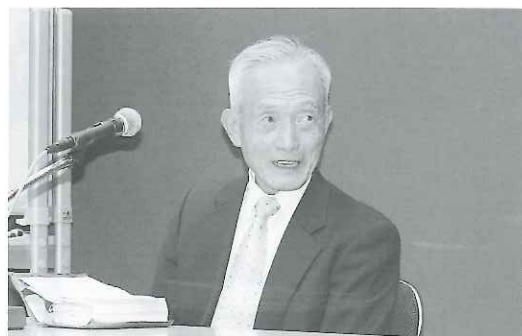
親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③〇

諸仏を供養するという課題

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第71回～75回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第71回では「寂滅」等について、第72回、73回では「少欲知足」等について、第74回では「和顔愛語」等について、第75回では「三解脱門」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第69回から一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 供養一切仏の願い

「重誓偈」のなかに、「供養一切仏」（『真宗聖典』26頁、東本願寺出版部。以下、『聖典』と略称）という言葉があります。この供養一切仏ということは、本願のなかで言うと、第二十三願が「供養諸仏の願」と名づけられています。これは、その前の第二十二願、いわゆる「還相回向の願」を受けています。その第二十二願では、浄土に触れたならばもう一生補処、必ず仏に成るとということが与えられている位である。でも、他の国に行って菩薩行を修する仕事がないというなら、どうぞ出ていってくださいと。その菩薩行の内容が「十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して」（『聖典』19頁）と言われているわけです。

なぜ一切仏を供養するということを法蔵菩薩が大切な願として誓うのだろうか。私は疑問をもったのです。菩薩道にとっては、「開化衆生」と「諸仏供養」はもうセットになっていて、自利利他で言うなら、開化衆生は利他です。それに対して自利の課題が諸仏供養に対応するかたちになっているのです。

そう思っていたときに、ふと思い起こしたのが、天親菩薩の『浄土論』の解義分です。その第五回向門に対応するところになると、「巧方便回向を

成就す」（『聖典』143頁）とあって、巧方便回向成就とはどういうことかということ、「礼拜等の五種の修行をして集むところの一切の功德善根をして、自身の住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かんと欲うがゆえに」（同上）と。自分のための樂しみは求めない、一切衆生の苦悩を抜きたいのだと。これが大乘の願いなのです。さらにその次の段で、「智恵門に依って自樂を求めず、我が心、自身に貪着することを遠離するがゆえに」（同上）。自分の樂しみは求めない、貪着とは愛着、自分に愛着することを離れるのだと言われる。さらに、「一切衆生を憐愍して、心、自身を供養し恭敬する心を遠離せるがゆえに」（同上）と。そのように、衆生を救いたいのだと、自分を供養するのではないのだと、何回も何回もしつこく言うのです。

それで「ああ、そうか」と気づいたのです。「諸仏供養」ということと、この『浄土論』の「自身を供養し恭敬する」とことは、まったくの反対概念として対応しているのだと。諸仏を供養することがなぜ自利なのか。自利ということは、自分が仏に成るということ。その自利のために修行する。そのときに、自分を供養し恭敬するという心が残ったままで修行すると、これだけ修行した、偉いものだと、そういう心が天狗の鼻のように高くなる。そういう修行をしたら無意味なのです。ですから、あらゆる世界に行って、自分に先だって仏に成った存在を供養するという願いが法蔵菩薩の願いなのです。

■ 自身を供養することを求めず

これは痛いところだなと思いました。自身を供養し恭敬する。自分を供養するというのは、つまり、自分のことを自分で「ああ、お前ご苦労さんだったな」と言って、「ご苦労だったから何かうまいものでも食べるか」と、自分にいわばお供えをする。われわれはそういうところがあります。人からほめてもらえばそれでよい面もあるけれど、

誰もほめてくれないと、「これだけやったのに誰もほめてくれないのか、じゃ、しょうがない、独りでご馳走でも食べておくか」と。そういう根性が抜けないのです。自身を供養し恭敬する、それを遠離するのが菩薩なのだと。

このようなことを願っているということは、いかに人間は自我愛が強くて、自己関心が強いのか、それで自分を供養したいのです。そういう心が抜けない。そのことを何とも思っていないけれど、それが人間の心の闇を作っている。人間世界の闇もそうした心が作り出していく。そこに衆生を開化する行と並んで、諸仏供養こそが代表的な菩薩行だと。それを成就させるために、法蔵願心が、わざわざ諸仏供養の願を建てる。こういう意味なのだろうか。

諸仏を供養するということは、いまだ自分は凡夫であって仏に成れない、だから仏を供養することを忘れない。こういう因の位で果の位を仰ぐという課題を背負って歩むのが菩薩の仕事だと。こう考えると「諸仏供養の願」が大事だという意味が少しくなずけるのではないかと思います。その果の位というのは実体的に何かあるというよりも、自分にとって尊い存在、仰ぐべき存在を見失わないことが大事な自利の課題、みずからが仏に成っていく課題であると。

それを忘れるあり方を曇鸞大師は、「^{かみ}上に諸仏の求むべきを見ず、^{しも}下に衆生の度すべきを見ず」（『聖典』286頁）と。これは、菩薩の修行の第七地の段階にくると難関がある。もう自分は覺りを開いたから、これでよいのだとなってしまう。そうなると求むべき仏もない、たすけるべき衆生もないと。これを「七地沈空の難」と言って、空に沈むことだと。こういうことを曇鸞大師が言っているわけです。

ですから、仏道とは終わりが無い。求める心に立って、どこまででも歩ませてもらうのが仏道であって、結果に立ってしまうということをしたら、それで終わり。地獄以下に落ちてしまう。こういう厳しいところがあるわけです。

「自身の住持の樂を求めず」ということは、言うのは簡単だけれど、人間はその魅力には勝てないのです。自分のための楽しい精神空間に触れて、それに埋没してしまう。楽しいことが強ければ強いほど、そのなかに埋没する。むしろ、突き放されて苦悩があれば歩まされるというところに、限りなく諸仏を供養するという課題が引っ張って、歩ませてくれるのだと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

親鸞仏教センターの動き

（2014年5月～10月）一抄出

■ 2014年

- 5/7 第46回『尊号真像銘文』研究会
- 5/9 親鸞聖人ご命日のつどい
- 5/14 第141回清沢満之研究会
- 5/23 第13回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
第71回（通算第122回）連続講座「親鸞思想の
解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 5/28 第163回英訳『教行信証』研究会
- 6/1 中村玲太研究員が発言
- 6/3 第11回親鸞仏教センター研究交流サロン「生
きづらさから考える―『物語』の可能性―」児童文
学者：清水眞砂子氏、川崎医科大学精神科学教室主
任教授：青木省三氏（千代田区・大手町ファースト
スクエアカンファレンス）
- 6/13 親鸞聖人ご命日のつどい
- 6/18 第47回『尊号真像銘文』研究会
第72回（通算第123回）連続講座「親鸞思想の
解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 6/20 第14回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
- 6/21 宗教と社会学会第22回学術大会（天理大学）：
大澤囑託研究員発表「僧侶の女犯・妻帯の規制を背
景とした「親鸞妻帯」の言説―江戸幕府による法制
的施策と妻帯の宗風に関して―」
- 6/22 第3回日・韓・中 国際仏教学術大会（東洋大
学）：中村研究員発表「願意の元照批判に見る日中
浄土教の相違」
- 6/25 第3回センター会議（親鸞仏教センター）
第48回『尊号真像銘文』研究会（終了）
- 6/27 第142回清沢満之研究会
- 6/30 第47回現代と親鸞の研究會「改めて憲法とは
何かを考える」早稲田大学法文学術院教授：水島朝
穂氏（千代田区・国際フォーラム）
- 7/1 第164回英訳『教行信証』研究会
- 7/6 真宗大谷派教学大会（大谷大学）：藤原研究員
発表「『化身土巻』所引『日藏經』への一試論―光味
仙人に注目して―」、名和研究員発表「僧伽の空気―
『清沢先生 信仰坐談』を読み解く―」
- 7/11 親鸞聖人ご命日のつどい
- 7/18 第73回（通算第124回）連続講座「親鸞思想の
解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 7/20 西田哲学会第12回年次大会（西田幾多郎記念
哲学館）：名和研究員発表「西田哲学と親鸞教学―
「逆対応」の可能性」
- 7/25 第15回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
- 7/28 第1回『西方指南抄』研究会
- 7/30 第143回清沢満之研究会
- 8/1 越部良一、法隆誠幸囑託研究員が再任
- 8/4 第16回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
- 8/6 第165回英訳『教行信証』研究会
- 8/8 親鸞聖人ご命日のつどい
- 8/19 第2回『西方指南抄』研究会
- 8/21 第74回（通算第125回）連続講座「親鸞思想の
解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 8/24 西田幾多郎記念哲学館第34回夏季哲学講座
（7面へ続く）

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③①

業因縁の存在の翻り

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第76回～78回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第76回では「法蔵菩薩の修行と成仏」等について、第77回では「阿弥陀の光」等について、78回では「寿命無量」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第75回から一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■不可能を実現する願い

法蔵菩薩の願いは、一切衆生をたすけたいという願いです。これは不可能です。不可能けれども、それが成就しないならば自分は仏に成らないと。これは自分が完成できることを期待している願いではない。にもかかわらず、物語としては十劫の昔にもう阿弥陀仏に成っていると言うのです。それは矛盾しているわけです。しかし、そういう物語なのです。自力の教えと違って、他力の教えは、有限な人間を無限がたすけたいというわけでしょう。有限な人間を無限にしたいと。不可能です。しかし、不可能を不可能ではないのだと。不可能を実現したいという願いが本願であると。

われわれは分別の衆生ですから、考えたり、計算したり、比較したりということで苦しんでいます。そういう存在が、如来を思議することはできません。思議することのできない人間にどうやって如来を教えるか。そのときに、如来の側から衆生になってあげようと。衆生になって衆生のなかで立ち上がるのだと。こういう願が、至心・信樂・欲生の三心だちようざいようこうと。三心共に如来の心である。如来の心は兆載永劫の修行の心である。兆載永劫の修行の心が、愚かな人間のなかに立ち上がるのだと。これを如来回向の信心と言うのだと。こう親鸞聖人はお考えになっていかれたのです。

つまり、有限を無限にするには、無限が有限に

なるほかないのです。有限はどれだけ有限を積み重ねても無限にはならない。しかし、無限は有限を包んでいる。だから無限の側が有限になることはできる。有限になった無限だと。これが「南無阿弥陀仏」なのだと。無限の大悲の願心が名になった。名において有限の衆生に無限を教える。そのためには、信じさえすれば無限の功德、無上功德を与えますと。無上功德はわれわれからはつかまえられない。けれども無限の側から、わざわざわれわれのために身を投げてくださるのだと。このようにいただきなさい、というのが回向のはたらきです。

われわれは本当に信じているのかと問われたら、信じているなどととても言えない。けれども、われわれが信じないならば、如来は成就しないのです。如来は成就しているとおっしゃるのだから、それを信ずるしかないのだと。われわれができるできないではない、初めからわれわれはたすからないのだと。たすからない存在をたすけずんばやまんという願がここに成就しているのだと。「ああ、そうですか」といただくしかない。これが親鸞聖人の言われる回向成就の信心という意味でしょう。

法蔵菩薩の修行が何のためかと言ったら、たすけることのできない愚かな衆生を、どうしてもたすけたいのだと。だから悲願なのだと。「諸仏の護念証誠ねんしやうじやうは 悲願成就のゆえなれば 金剛心をえんひとは 弥陀の大恩報ずべし」（『真宗聖典』486頁、東本願寺出版部）という和讃がありますが、「諸仏」とは、本願によって先に救われた方々のことを、後から行く人間が諸仏と仰ぐわけです。諸仏が護ってください。後から来る凡夫に、どうか凡夫よ、「南無阿弥陀仏」を信じてほしいと呼びかける。この極悪深重の世の中に、極悪深重の衆生に念仏を呼びかける。悲願成就のゆえなのだと。そして護ってください、護念証誠である。だからそれに出遇うということが、金剛の信心を得ることだと。

■業因縁の存在としての自分

われわれの心は、愚かな心だし、弱い心で、本当にしょっちゅうコロコロ変わります。クッキーというお菓子があるでしょう。私はおいしいと思いますが、置いておくとすぐに湿気たり、少しの衝撃で粉々になってしまったりする。譬えて言うなら、われわれの心もクッキーみたいなものです。少し雨模様だと湿気で、天気が良いと元気になる。だからお天気次第です。いくら強そうに見える人でも、人には言わないけれど、心は弱い頼りないものなのではないでしょうか。「俺の心は変わらないぞ」と言える人はいないと思うのです。嘘では言います。「私、一生あなたを愛します」と言って、リングを取り交わして三日後に離婚したり。嘘八百です。けれど、嘘でもよいから信じたいのです。狐と狸の化かし合いと言いますが、凡夫は凡夫で、狐と狸で結構成り立っているわけです。だから、それをだめだとは言えない。そこに真実があるなどと言うから嘘なのです。

人間レベルの誓いなどは、いくらそのとき本当だと思っても、たちまち雲散霧消します。これは人間が悪いからではないのです。人間とはそういうものなのです。人間は状況存在ですから。だから、状況が悪いからそうなったと思うわけです。でも存在自身が、そうなるといふ存在なのです。そういう状況を引いてくる存在なのです。

「引業」という言葉があります。業を引くのです。業とは、自分で思っていないけれども、そうになっていってしまうのです。そして、相手の責任にするのです。自分は悪くない、相手が悪い。しかし、そういう悪い相手と出会う因縁は自分なのです。自分なしに勝手に出会うわけにいかない。だからやはり人間は縁を生きる存在なのです。

仏教の教えは厳しいと思うのです。嫌な教えだと思うのです。凡夫は自分の好きにしたいのです。だけど仏教はそれを許さない。お前は因縁の存在なのだ、業因縁を生きているのだと。それを、「ああ、そうだったな」と、逃げられない因縁をいただいていたからこそ、本願がありがたいのだと。そのように翻ったときに、初めて他力の本願が自分の身に起こってくるのです。翻りなのです。翻るまでは徹底的に、できの悪い存在だと教えてくるのです。それが嫌なのです。けれども、これは真実の教えだと、人間にとってどれだけ嫌でも逃げられない、そうだんだん言い当てられてきて、「ああ、本当にそうでした」となると、南無阿弥陀仏がありがたいのです。

(文責：親鸞仏教センター)

親鸞仏教センターの動き

(2014年11月～2015年1月) 一抄出

■2014年

- 11/6 第147回清沢満之研究会「清沢満之の『宗教』および『宗教哲学』における『哲学』の意味」愛媛大学法文学部准教授：杉本耕一氏（千代田区・フクラシア東京ステーション）
- 11/14 親鸞聖人ご命日のつどい
第5回『西方指南抄』研究会
- 11/17 第168回英訳『教行信証』研究会
第76回（通算第127回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 11/18 第19回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
- 11/25 第148回清沢満之研究会
- 11/28 第10回研究員と読む公開輪読会「救済の欲求―『往生要集』を読む―」担当：藤原智研究員①11/28②12/5③12/12④12/19（文京区・東京大学仏教青年会会館）
- 12/3 第169回英訳『教行信証』研究会
- 12/6 第24回佛教文化学会学術大会（大正大学）：大澤囑託研究員発表「親鸞伝における六角夢告の語り―その表象と変遷―」
- 12/8 平成26年度西山学会（京都・誓願寺）：中村研究員発表「西山浄土教と法華経―西山深草義の伝承を中心として―」
第4回センター会議（親鸞仏教センター）
- 12/9 第149回清沢満之研究会
- 12/12 ご命日のつどい
- 12/15 第6回『西方指南抄』研究会「院政期から鎌倉期にかけての遁世―法然の遁世は他の遁世と異なるのか―」東京大学文学部教授：菱輪顕量氏（千代田区・東京国際フォーラム）
- 12/17 第7回『西方指南抄』研究会
第77回（通算第128回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 12/20 浄土宗西山深草派宗学院研究生研究発表（京都・誓願寺）：中村研究員発表「顕意『浄土疑端』成立の検討」
- 12/22 在京大谷派関係研究者・学生報恩講兼交流会（親鸞仏教センター）
- 12/24 第20回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
- 12/26 親鸞仏教センター報恩講

■2015年

- 1/8 第12回親鸞仏教センター研究交流サロン「〈孤独〉の可能性―カウンセラーの視点から―」明治大学文学部教授、日本トランスパーソナル心理学会会長：諸富祥彦氏（千代田区・フクラシア東京ステーション）
- 1/9 親鸞聖人ご命日のつどい
第10回研究員と読む公開輪読会「他力の救済とは何ぞや―絶対他力の大道―」担当：名和達宣研究員①1/9②1/16③1/23④1/30（文京区・東京大学仏教青年会会館）
- 1/13 第78回（通算第129回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 1/14 第150回清沢満之研究会
- 1/23 第8回『西方指南抄』研究会
- 1/26 第170回英訳『教行信証』研究会
- 1/28 第21回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会

掲載論文

- 12月 「印度學佛教學研究」第63巻第1号
藤原研究員「『教行信証』「化身土巻」所引『大集経』『忍辱品』への一試論：『往生要集』との連関から」
中村研究員「西山義特殊名目「観門」の成立過程の再検討」

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③②

宗教的な光明

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第79回と80回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第79回では「七宝樹」について、第80回では「道場樹」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第77回から一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 本当のいのち

本願の第十二願、第十三願が「光明無量の願」、「寿命無量の願」と言われていますが、無量寿仏と無量光仏とは一体なのです。本当は別の願ではなくて、無量寿仏と無量光仏とは、大きなはたらきの二面を取り出した言葉だと言ってもよいわけです。光となつてはたらき、^{いのち}寿となつてはたらく。

寿となつてはたらくとはどういうことか、難しいことですが、本当のいのちを与えるというような意味で考えたらよいのだと思うのです。普通のわれわれの生命は因縁で生まれ、因縁で滅んでいく、^{しよしよ}因縁所生の命ですが、その因縁所生の命を生きているなかに、命それ自身とは何であるか、何のためにここに今の命が与えられてあるかという問いをもつときに、それはこの世の命の成り立ちを問題にしているのではなくるわけです。この世の普通の問いは、生まれたうえで、どうしたらよいかというものです。どうやって稼ごうとか、今日は何を食べようとか。そういう生まれているうえでのいろいろなことではなくて、生まれるということが一体何なのだと。これは答えがないと言ってもよいわけです。答えがないような問いをもつ。人間の闇、人間の苦悩が、何でこんな自分がここに生きていなければならないのだろうという問いになる。

そういう問いに対して、本当に明るみが与えら

れ、本当に感謝しながら生きていける智慧が与えられる。それをいのちが与えられると表現するならば、無量寿仏の寿は本当のいのちを与えるのだと。本当のいのちと言うと、何か別の命がくるみたいなイメージですが、そういう意味ではない。今生きている命が暗い、闇のような命だとするならば、それが明るくなった。「ああ、明るいな」と喜んで生きていける智慧が与えられたときのいのちです。別の命になるわけではないけれども、新しいいのちが感じられる。このいのちは、いわゆる因縁で生まれ、因縁で滅ぶ命とは違う質のものです。

■ 悪業因縁を選ばず

この世の因縁は、友だちができたり、夫婦になったりいろんな因縁がありますけれど、出会う因縁があつて出会うわけです。ところが阿弥陀如来は因縁を選ばない。どういう苦悩の状況であろうと、どういう悪業因縁に苦しむ場合であっても、それを選ばない。あらゆる衆生を救い遂げたいと。

これはだんだん触れてくるととてもありがたいのですが、初めのうちはどういうわけか因縁が薄く感じるのです。宿業因縁が近いとありがたいということがあつて、例えば、病気をしていたときは薬師如来がありがたいとか、子どもさんを亡くした場合は地藏さんがありがたいとか、何か因縁が近いとありがたいわけです。ところが、阿弥陀如来は何がよいのか、何だかわけがわからない。別に病気に効く薬をくれるわけでもないですし、なぜありがたいのか。どんな苦悩であっても明るくしなければやまないということは、情況的苦悩を除く光ではないのです。ですから、出会う初めは、あまりありがたくないとか、あつてもなくても同じじゃないの、という感じを受けるのです。それがじわっと効いてくる。^{ひよ}譬喩的に言えば、空気のようなありがたさと言うか、空気がないなどということは考えられない。あるからこ

そ生きていられる。そういう気づきが起こつてくると、どれだけ深い闇に苦しもうと、それを思い起こすと阿弥陀の光が射してくる。そういう意味で阿弥陀の光は、無量光、限りがない。限りがあったならば自分は覚りを開かない、つまり仏に成らないと誓っているのですから、限りはないのだと。

「もし三塗・勤苦の処にありてこの光明を見たとてまづれば、みな休息することを得て、また苦悩なけん」（『真宗聖典』30～31頁、東本願寺出版部）。阿弥陀如来の光は、三塗、地獄・餓鬼・畜生のような苦悩の深い場所、悪業因縁でたすからない場所のところにあっても、この光明を見ることができる。そういう場所にあつてこの光明を見れば、みんな心が安まると。

■闇へ闇へ

阿弥陀の光がわれわれの苦悩の闇を本当に明るくするということは、なかなか体験的には、よくわからないのです。曾我量深先生は、われわれにとって闇が晴れるということは、法蔵菩薩と出遇うことだと教えてくださった。つまり、法蔵菩薩は一切衆生を救わずんばやまんと誓って、どのような苦悩の闇をも厭わない。苦悩の衆生となって、どんな苦悩も引き受けて歩もう、そういう願心ですから、自分が感じているつらさとか苦悩はこの願心のむしろエネルギーになるのだと。だから曾我先生は、凡夫は明るみを求めるけれど、法蔵菩薩はむしろ闇へ闇へなのだ。闇こそ我がはたらく場所だと言ってそこへ入ってくださる。そういう場所をわれわれは生きていたったかたじけないではないかと。私個人では嫌でしかたがない。けれども法蔵菩薩がはたらいてくださる場所なのだ。このように意味転換が起こるわけです。法蔵菩薩のお心は私のこの苦悩を晴らさんがためなのだ、法蔵菩薩を身近に感ずると、自分独りで苦悩を背負っていると思って、逃げたい逃げたいと思って逃げられなくて、つらくてたまらなかつた命の見方が変えられるということが起こるのです。そうすると、嫌だなどと思っていたのはもったいない根性だ。こういう命があつてこそ生きている意味があるではないかと、そういう眼の転換をもたらすわけです。それが宗教的な光明、光という意味を持つのです。

われわれは物質的光明を求める。苦悩はなくなって明るくしてほしいと思う。でも、なくなつてほしいと思えば思うほど闇は深い。われわれが光を求めても光などももらえない。けれど、闇を生

きてくださるものがあると教えられると、南無阿弥陀仏と共に明るみがくるのです。

（文責：親鸞仏教センター）

親鸞仏教センターの動き

（2015年2月～2015年4月）一抄出—

■ 2015年

- 2/4 第151回清沢満之研究会
- 2/6 第10回研究員と読む公開輪読会「浄土教に求められた救い—『観無量寿経』を読む—」担当：中村玲太研究員①2/6②2/13③2/20④2/27（文京区・東京大学仏教青年会会館）
- 2/10 第79回（通算第130回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 2/13 ご命日のつどい
- 2/16 第171回英訳『教行信証』研究会
- 2/17 第22回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
- 2/25 第9回『西方指南抄』研究会
- 3/4 第172回英訳『教行信証』研究会
- 3/6 第173回英訳『教行信証』研究会「阿修羅の夢と大行—親鸞と大拙の理解をめぐる—」大谷大学専任講師：マイケル・コンウェイ氏（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3/9 第80回（通算第131回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3/12 第5回センター会議（親鸞仏教センター）
- 3/13 ご命日のつどい
第23回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
- 3/16 第1回清沢満之研究交流会（清沢満之研究の〈可能性〉—没後百周年から見えたもの—）「清沢満之の「復権」の試み」東京医療保健大学非常勤講師：山本伸裕氏、「天皇制国家と「精神主義」—清沢満之を中心に—」本願寺史料研究所研究員：近藤俊太郎氏、「清沢満之の〈発掘〉—『臘扇記』という一断面—」名和達宣研究員、「大谷大学編『清沢満之全集』（岩波書店）編纂の背景と課題」大谷大学短期大学部専任講師：西本祐攝氏、全体討議「異領域からの清沢研究が交わる場所」愛媛大学准教授：杉本耕一氏、田村晃徳囑託研究員〈司会〉（文京区・求道会館）
- 3/30 第10回『西方指南抄』研究会
- 3/31 第152回清沢満之研究会
- 4/1 人事発令（田村晃徳、大谷一郎、大澤絢子が囑託研究員として再任）
- 4/6 第24回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
- 4/7 第49回現代と親鸞の研究会「終末期ケアにおける宗教の役割—死にゆく人はさびしいか—」社会学者：上野千鶴子氏（文京区・東京ガーデンバレス）
- 4/10 ご命日のつどい
- 4/14 第12回「親鸞仏教センターのつどい」記念講演「自己組織する地球の〈いのち〉—人間の死生観を越えて—」NPO法人「場の研究所」所長：清水博氏、「共に大悲の「場」を生きる」親鸞仏教センター所長：本多弘之（千代田区・学士会館）
- 4/22 第153回清沢満之研究会
- 4/27 第11回『西方指南抄』研究会
- 4/28 第174回英訳『教行信証』研究会

掲載論文

- 4月 『場所』第14号（西田哲学研究会）
名和研究員「西田幾多郎と浩浩洞—「宗教論」の成立背景—」

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③③

闇と明るみが一体となる

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第81回と82回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第81回では「自然虚無の身、無極の体」等について、第82回では「涅槃の清浄性」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第78回から一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■私が聞く

回心せずに、つまり心を翻さないままにたすかるわけにいかない。だから善導大師は、「謗法・闡提、回心すればみな往く」（『真宗聖典』277頁、東本願寺出版部）とおっしゃって、どうか心を翻して欲しいと。これが法蔵菩薩の呼びかけなのだと。それに触れるなら五逆・謗法もたすかるのだと。五逆・謗法ということは、あらゆる反逆者、倫理的な反逆をし、教えに反逆して、素直になれない存在です。そういう存在は一番たすかり難いのだけれど、それをもたすけたいのだと。

親鸞聖人という方は、そういう言葉を聞いて、もう自分はすぐたすかる、そういう悪い奴もたすかるのだぞという見方をするのではなくて、そういう呼びかけをしているということは、自分自身がそういう存在だと教えられるのだと。謗法・闡提は外にいるのではない。実は自分なのだと。如来の願いが呼びかける相手は私であります、法蔵菩薩の五劫思惟のご苦勞は私一人のためでありま

すと、このように教えを聞いていったのです。

これはなかなかできないのです。「ああ、よい教えだな。これをあの人にも教えてあげよう」という聞き方をわれわれはしてしまうのです。私が聞くというふうには、なかなか聞けない。われわれはすぐに自分のことではない、人のことになってしまうのです。何のために教えを聞くかという、自分がたすかるのではなくて、人をたすけにいけるような自分になろうとする。それは名聞・勝他と言いまして、人に勝つために自分が智慧を身につけるという発想、これは煩悩ですから、煩悩で聞いたのでは元も子もないのです。でも、そういう聞き方しか人間はできないところがある。凡夫ですから。

そういうことを親鸞聖人は、大変自戒なさったのです。自分のなかに人をたすけようという心が起こらないわけではない。そういう心が起こった場合は、自分は愚かな凡夫なのに有情利益、人をたすけようなどと思うのは思い上がりだと。凡夫だからこそ如来の願いは私に向かって教えてくださるのだと。たすける力をもっているのは、仏陀であり大悲である。自分はたすけていただく。阿弥陀如来の光にみんなたすけていただくのだと。だから自分がそれをいただいているということ。人に伝えることはできるけれど、まず自分がいただかなければと、こういう態度を崩さずに、ずっと読まれた。ずっと聞き続けられた。

■迷いの自覚以外にさとりはない

曾我量深という方がおられたのですが、一般に

「さとり」と言うと、何か修行をしたり、心を操作したりして、特殊な体験をもつ、「ああ、わかった」というような体験をもつことがさとりだと考える。けれども、人間の身として一人の心をよくよく見てみると、そういう体験をもったすかるというよりも、いかに深い迷いと煩惱をもって生きているかということを知られ、迷いを本当に自覚させられるということ以外にさとりはないのだと。何かさとしてパツと明るくなったなどという一時的体験は、またすぐ煩惱で暗くさせられますから、煩惱で暗くさせられる状態である身を深く知らされる以外に、つまり迷いの自覚以外にさとりはないのだと、そのようにおっしゃったのです。

ですから、親鸞聖人にとっては、煩惱具足の凡夫という深い自覚がそのまま、如来の大悲のはたらきを受ける身として、光が当たる場として生きることができるという喜びに変わるわけです。

「機の深信」と言われる、^{こうごう}曠劫以来迷ってきた身でたすかる手だてはないという自覚が、そのまま、光によってたすかる身であるということと表裏一体なわけです。その裏の暗さを忘れて明るみだけになれるという妄念が、自力の菩提心です。凡夫の愚かさの自覚がないと、明るくなれるような気になるわけです。

この親鸞聖人の教えというものは、聞き始めたころは何といやな教えだろうと思ったものです。明るくなればよいではないかと。何でそんな暗いことばかり言うのだらうと。でも、だんだん触れるうちに、なるほど人間の心というものは、何かこうしつこいものだなと。決して本当の明るみになどさせないような意識がうごめいていて、後から後から闇を作っていく。自分で明るくなどできない。如来の大悲をいただいてみたら、闇のままに明るさがいただける。闇と明るみが一体となると言いますか、そういうことが親鸞聖人の喜びなのだとなってきたのです。

(文責：親鸞仏教センター)

親鸞仏教センターの動き

(2015年5月～7月) 一抄一

■ 2015年

- 5/1 第25回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 5/8 親鸞聖人で命日のつどい
第81回(通算第132回)連続講座「親鸞思想の
解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 5/15 第154回清沢満之研究会
- 5/16 第23回日本近代仏教史研究会研究大会(大正大学):大澤研究員発表「近代的「人間親鸞」像と『歎異抄』一六角夢想の表象を中心に」
- 5/19 第50回現代と親鸞の研究会「沖縄を知る、日本を知る」牧師:平良修氏(港区・AP品川)
- 5/22 第175回英訳『教行信証』研究会
- 5/26 第12回『西方指南抄』研究会
- 6/1 第26回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 6/8 第176回英訳『教行信証』研究会
- 6/9 第82回(通算第133回)連続講座「親鸞思想の
解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 6/12 親鸞聖人で命日のつどい
- 6/15 第155回清沢満之研究会
- 6/23 第13回『西方指南抄』研究会
第13回親鸞仏教センター研究交流サロン「カルト問題を再考する—宗教の〈魅力〉と人間の危うさ—」立正大学心理学部教授:西田公昭氏、フォトジャーナリスト:藤田庄市氏(千代田区・東京国際フォーラム)
- 6/29 第27回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 7/2 第177回英訳『教行信証』研究会
- 7/5 真宗大谷派教学大会(大谷大学):藤原研究員発表「戦後の曾我量深の中心課題—底流する第十七願と第二十願—」、名和研究員発表「清沢満之における「忘」の意義—『臘扇忌』を手がかりとして—」、中村研究員発表「「機法一体」説成立の再検討」、大澤研究員発表「康永本「伝絵」の絵相に見る覚如の意図—琳阿本・高田本との比較より—」
- 7/7 第156回清沢満之研究会
第83回(通算第134回)連続講座「親鸞思想の
解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 7/8 第14回『西方指南抄』研究会
- 7/10 親鸞聖人で命日のつどい
- 7/17~31 安居本講(真宗本廟・大谷大学):本多所長「金剛信の獲得」
- 8/1 人事発令:越部良一、法隆誠幸が嘱託研究員として再任

掲載論文

- 6月 『真宗教学研究』第36号
藤原研究員「『化身土巻』所引『日藏経』試論—光味仙人に注目して—」
『西田哲学会年報』第12号
名和研究員「西田哲学と親鸞教学—「逆対応」の可能性」

浄土ではないかと、人間の思いをそこに入れ込むわけです。それは全部方便化土です。方便化土は求めて得られない。本当の真実の世界は光の世界であり、精神が^{ひるがえ}翻された明るみの世界です。本願に触れて無量光の世界に生まれる。生まれるということも、これも実体的に何か違う世界に生まれるというイメージが強いわけですが、死して生まれるという宗教的な命に触れるということは、そうではない。執らわれの世界に死んで、新しい、解放された、宗教的な世界に生まれるのです。

この愚かな身、凡夫の命として、われわれは違う命、違うものに執着しているけれども、本願はこの愚かな衆生を平等に摂め取りたいという願ですから、本願を信ずることにおいて、その願においての平等、「願海平等」（『聖典』242頁）を信ずる。これを「大信海」（『聖典』236頁、356頁）、信心の海をいただくことだと親鸞は言うわけです。本願が無限なる命を呼びかけてきているのだと聞いて、本願を主体にする。つまり信心を主体にするということは、本願を信ずる信がわれわれの主体だと確認できるということです。もしそうになったら、その主体は信心が主体で、信心が浄土に生まれる主体ですから、信心が身体をもつといっても、その形は「虚無の身・無極の体」、無限大の身体、形なき形、そのようにしか言えないのだと思うのです。

そうした形なき世界に、我執のままで、骨がついて、肉がついたままで往けるかといったら往けないから、生まれ直したと、死んでからしか生まれられないと教える。でも、その教えは、文字通り死んでもう一度生まれるということではなくて、何か立場が翻る。つまり、無明の在り方から本願の在り方に立ち直す。「心を弘誓の^{しん}仏^{くぜい}地に^た樹て」（『聖典』400頁）と。弘誓の仏地に立った身体というのは、「虚無の身・無極の体」なのでしょう。真仏土の主体は本願で、阿弥陀は無限大だと言ってもよいし、念ずる人のところにあると言ってもよい。それは形がないのでしょう。

（文責：親鸞仏教センター）

親鸞仏教センターの動き

（2015年8月～10月）一抄出—

■ 2015年

- 8/3 第28回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
第84回（通算第135回）連続講座「親鸞思想の
解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
人事発令：松扉達主事、大谷綾書記補が発令
- 8/10 第1回宗務審議会「親鸞仏教センター施設改修
工事に関する委員会」
- 8/11 第178回英訳『教行信証』研究会
- 8/19 第157回清沢満之研究会
- 8/20 ご命日のつどい
第15回『西方指南抄』研究会
- 9/6 第74回日本宗教学会学術大会（創価大学）
藤原研究員発表「専修念仏批判への応答—親鸞
の『弁証論』引用の一側面—」、名和研究員発表「西
田幾多郎と『教行信証』」
- 9/9 第29回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 9/11 ご命日のつどい
第2回宗務審議会「親鸞仏教センター施設改修
工事に関する委員会」
- 9/17 第158回清沢満之研究会
- 9/19 日本印度学仏教会（高野山大学）
藤原研究員発表「親鸞の末法観と『弁証論』」、
中村研究員発表「憬興『観経疏』復元の試みとその
思想的意義について」
- 9/25 第179回英訳『教行信証』研究会
- 9/28 第16回『西方指南抄』研究会
- 10/2 日本倫理学会 第66回大会 ワークショップ
「日本近代における「宗教哲学」の源流と形成」
名和研究員発表「「悲」の宗教哲学—清沢満之
と西田幾多郎—」
- 10/7 第3回宗務審議会「親鸞仏教センター施設改修
工事に関する委員会」
- 10/9 ご命日のつどい
第85回（通算第136回）連続講座「親鸞思想の
解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 10/19 第180回英訳『教行信証』研究会
- 10/23 第158回清沢満之研究会
- 10/26 第30回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 10/27 第17回『西方指南抄』研究会
- 10/30 第159回清沢満之研究会「清沢満之における儒
家的言語の意義について」大阪大学名誉教授：子安
宣邦氏（千代田区・AP東京八重洲通り）

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③⑤

苦悩の場所で光に遇う

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第86回と87回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、この両回で第十七願成就文について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第84回から一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■ 本当に自分が出遇^あってたすかるかどうか 勝負

出遇った仏教が本当に自分を解放するかどうかということ、自分の全力をかけて、自分の言わば命をかけて求めて、『無量寿経』こそが本当の仏教、真実教であると親鸞は信じた。あっちにも真実がある、こっちにも真実がある、比較してどちらかと、そのようなことではないのです。自分にとってはこれしかない。愚かな自分にとってはこの教えであれば自分を解放してくれる。そのようなことに出遇ったから、それまで学んできた比叡山の学びを捨てた。親鸞が尋ねて、これが真理だと言ってくださったその真理は、われわれのような愚か者にとって、今でも当てはまる。それ以後の人間が、とてもそこまでは掘り下げられないほど人間の闇を深く掘り下げてくださった。その真理性というのは、その親鸞の言おうとしたことを尋ねることで、われわれのような愚か者が「ああ、そうか、こういうふうに考えればたすかるのだ」という意味の真理性です。

つまり、本当に自分が出遇ってたすかるかどうか

かが勝負なのです。精神的な闇が開かれる真理性。これは客観的な真理性ではないのです。精神の明るみを求める心は、客観的な真理ではたすからないのです。いくら科学が客観的な真理を分析して、科学的に真理だと言っても、そのようなもので人間の心の闇は晴れないのです。心の闇を晴らすということは、人間がどういう存在であるか、自分は本当にどういう存在であるかが照らし出されて、「ああ、そのとおりでありました」と。何も無理することもないし、頑張ることもない。この通りの人間でありますと開かれることによってたすかるわけです。科学的に分析して、細胞が何億ありますか、なかの遺伝子がどうなっていますとか、そのようなことをいくら聞いても何もたすかりません。そのようなことは、どうでもよい。今、自分の心が暗いのをどうしてくれるのだと。そのような問題は科学的真理と違うわけです。そこが一番の問題です。

■ 苦悩の場所を生きていく

われわれはどこまでも暗い、どこまでも闇である。闇があっても、闇に苦しまないで、闇を引き受けて歩んでくださる法蔵菩薩が存在するということが、本願のはたらきとしてわれわれに聞こえてくると、阿弥陀の光が差してくる。ですから親鸞のような、自覚的に自分が罪業深重であることに苦しまれた方にとっては、この法蔵願心があるがたい。そして、阿弥陀の光が「南無阿弥陀仏」の名となって呼びかけてくださることが、自分のような愚か者にとっては本当に唯一の救いである

と。ですから法然上人が行くところなら自分は一緒にいきますと。もし、地獄に行くなら地獄に行ってもよいですと。地獄にも阿弥陀の光は来るのだと。そこまで信頼するわけです。自分は楽なところに行きたいのではない。苦悩の場所であろうと何であろうと、光に遇える、そういう場所を生きていくのだと。これが、親鸞の決断です。

これが、われわれにとっては大変勇気を与えられるのです。どうしても宗教というのは、苦しいから楽なところ、つらいから楽しいところ、暗いから明るいところに行ける。このようにイメージして、よいところに行けると考えてしまう。闇の人間に明るみが来ると教えるのですけれど、その明るみは本当は、闇が明るくなるというよりも、闇に苦しんでいた心が明るくなる。闇が単なる闇でなくなって、闇を生きていることが自分の人生の意味になる。そういうことにおいて闇は単なる闇でない明るみの場所になるわけです。このような道が仏教の自覚だと思うのです。

これはなかなかわからないことです。どうしても相対的に、暗いところから明るいところへ行けるのだと考えてしまう。それで教えを聞いたり、一生懸命求めたりするけれど、いつまでたっても闇が晴れない。それで、聞き方が悪いとか、努力がたりないとか、挙げ句の果てに教えが悪いなどと言って、たすからない。結局、それは、間違っている意識が転換され^あひるがえされるということが、なかなか自分のこととして受け入れられないのです。受け入れられないから、生きているうちはだめだ、死んでからだということを平気で言い出す学者がいるわけです。われわれの眼を翻しさえすればよい。どうやったら翻るのですか。自分では翻せない。人間の努力ではできません。本願が与えたいと言っているのです。その本願を「南無阿弥陀仏」を通して信じますという、その信じた心には、もう大涅槃はきています。ただこのこと一つを信じなさいと。そのような教え方が『無量寿経』なのです。（文責：親鸞仏教センター）

親鸞仏教センターの動き

（2015年11月～2016年1月）一抄出—

■ 2015年

11/7 国際仏教学大学院大学 平成27年度第2回公開研究会（国際仏教学大学院大学）：藤原研究員発表「日本古写経『弁正論』と親鸞『教行信証』」

11/9 第181回英訳『教行信証』研究会
第86回（通算第137回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

11/13 ご命日のつどい

11/16 第31回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会

11/17 第18回『西方指南抄』研究会

11/30 第159回清沢満之研究会

12/4 第11回研究員と読む公開輪読会「わが心深き底あり—西田幾多郎と浄土真宗—」担当：名和研究員
①12/4②12/11③12/18④12/25（文京区・東京大学仏教青年会館）

12/9 第32回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
第87回（通算第138回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

12/11 ご命日のつどい

平成27年度西山学会（禅林寺 永観堂会館）：
中村研究員発表「「機法一体」説成立の再検討—證空における「往生正覚俱時」説を中心として—」

12/14 第19回『西方指南抄』研究会「天台本覚思想と親鸞」法華仏教研究会主宰：花野充道氏（千代田区・フクラシア東京ステーション）

12/15 第182回英訳『教行信証』研究会

12/16 第160回清沢満之研究会

12/18 西山深草派宗学院研究発表会（浄土宗西山深草派総本山誓願寺）：中村研究員発表「證空における「光台見仏」論の成立」

12/21 第20回『西方指南抄』研究会

12/22 親鸞仏教センター報恩講

■ 2016年

1/8 ご命日のつどい

第11回研究員と読む公開輪読会「すでにして悲願います—『教行信証』「化身土巻」を読む—」担当：藤原研究員①1/8②1/15③1/22④1/29（文京区・東京大学仏教青年会館）

1/13 第33回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
第14回親鸞仏教センター研究交流サロン「「対話とは何か—哲学から現代社会への問いかけ」慶應義塾大学文学部教授、哲学者：納富信留氏、埼玉大学名誉教授、経済学者：暉峻淑子氏（千代田区・東京国際フォーラム）

1/14 第88回（通算第139回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

1/25 第21回『西方指南抄』研究会

1/27 第183回英訳『教行信証』研究会

1/29 第161回清沢満之研究会

掲載論文

1月 『中外日報』2016年1月6日付

名和研究員「西田幾多郎と『教行信証』—「聖典」各所に書き込み確認」

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③⑥

名が行となるということ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第88回から第90回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第88回では第十七願成就文について、第89回と第90回では第十八願成就文について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第86回から一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■本願が行となる

「諸仏称名の願」と呼ばれる第十七願に「十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟^{ししや}して、我が名を称せずんば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』18頁、東本願寺出版、以下『聖典』）とあって、名を通して願いを与えたい、十方衆生を平等に救いたいという願いをもった名なのだと。こういう意味で、諸仏に名を咨嗟^ほして、讃めてほしいと。諸仏が讃めてくれなければ自分は覺^{さと}りを開かないと。この願が成就して、「十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德の不可思議なることを讃歎^{さんだん}したまう」（『聖典』44頁）と、こういう言葉になってきています。

親鸞にとっての真実行とは、諸仏が称名している、諸仏が讃めているということが行であるのです。行は念仏の行、「南無阿弥陀仏」が行であるわけですが、「南無阿弥陀仏」が行であるとは、十方恒沙の諸仏如来が讃めているというはたらきなのだと。名号の意味は、「諸仏称名の願」が行じてい

る。名が行となっている。その場合の行は、本願が行となっている。これはわかりがたいですね。

親鸞にとっての名は単なる名でなくて、選択本願が名をもって衆生に呼びかけようとしている、その名前自身が本願のはたらきなのだと。普通、名前は名詞、固有名詞であって、固有名詞は行ではないです。人間にとっての行とは、人間が努力して何かをする、人間が一つの行為をする、そういうことが行と言われる。ところが、諸仏如来が讃めていることが行だとは、名前が称えられるということは、十七願がそこに起こっているということだと。現実には、誰かが名を信じて発音するのもかも知れないけれども、そのことは、法蔵菩薩の本願が、阿弥陀の願いに賛同して讃めるということが、ここに起こっているという事実なのだと。一つの名前があるということが、十方恒沙の諸仏如来が讃めるという事実の現れなのだと。

これは「諸仏称名の願」ですから、凡夫称名ではないのです。だれが称えようと、どこで称えようと、阿弥陀の名が称えられるということは、諸仏称名の願がそこに成就してきているという意味をもつということです。

■讃める人のところに阿弥陀が現れる

諸仏称名の「諸仏」とは何だろうということはよくわからないのですが、仏法を求め、仏法に出遇い、仏法を語り伝えた方々の歴史が現代にまできている。そうした、自分が仏法を信じていける縁を残していつてくださる方々は、私どもにとってはみな諸仏であると私は思うのです。阿弥陀

陀如来自身が諸仏によって讃められたいと。諸仏によって讃められてこそ阿弥陀が阿弥陀に成る。阿弥陀を讃めるところに諸仏のはたらきが起るわけです。仏法が起るわけです。十方恒沙の諸仏如来がみな讃めているということを手がかりにして親鸞聖人は『教行信証』の「行巻」をお作りになるわけですが、そこで經典の言葉を置いた後、龍樹から始まって、歴史上、念仏を讃めてきた文章をずっと並べられるのです。これはつまり諸仏如来の伝承です。

凡夫ですから、自分が諸仏だというふうには言えない。自分が諸仏だとは言えないけれども、仰ぐ側は念仏を伝えてくださる方を諸仏だと仰ぐことはできるわけです。信ずる人は凡夫なのだけでも、凡夫が信じてそのことを伝えてくると、それを聞いた人に念仏が伝われば、聞いた人間にとっては、伝えてくださっている方々は仏の仕事をしてくださっている、諸仏如来だというように仰ぐことはできる。信じたことを、このように信じたと伝えてくださって、それがまた人に伝わるという力をもったときには、伝えられた側は、伝えてくださった言葉や、そうした人たちを諸仏と仰ぐわけです。これが仏法の歴史、諸仏の歴史なのです。これは実体的に考えるのではないのです。象徴的に考える。そうすると、この十七願の意味が少しくわかってくるのではないかと思うのです。

そして、「南無阿弥陀仏」と称える人々のはたらきが阿弥陀を生み出すわけです。阿弥陀がどこにいるかといったら、讃める人のところに阿弥陀が現れるわけです。讃めるところに阿弥陀が成就するわけです。不思議な話ですね。人間が念じないのにどこかに阿弥陀がいるという話ではないのです。阿弥陀は衆生を救いたいという願ですから、私のための本願でありました、「南無阿弥陀仏」と言うところに、阿弥陀が現れるわけです。これが第十七願成就ということではないかと思えます。

(文責：親鸞仏教センター)

親鸞仏教センターの動き

(2016年2月～4月) 一抄出—

■ 2016年

- 2/3 第51回現代と親鸞の研究会「イスラームとその世界—私たちが知っておくべきこと」同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授：内藤正典氏（中央区・AP 東京八重洲通り）
- 2/4 第34回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
- 2/5 第11回研究員と読む公開輪読会「大悲の驚歎—善導『観経疏』を読む—」担当：中村研究員①2/5②2/12③2/19④2/26（文京区・東京大学仏教青年会会館）
- 2/12 ご命日のつどい
- 2/15 第89回（通算第140回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 2/16 第22回『西方指南抄』研究会
- 2/17 第184回英訳『教行信証』研究会
- 2/19 第162回清沢満之研究会
- 3/4 第23回『西方指南抄』研究会
- 3/7 『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会「対偽対仮」という営み—「顕浄土方便化身土文類」の課題—大谷大学文学部教授：加来雄之（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3/10 第35回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会第90回（通算第141回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3/11 ご命日のつどい
- 3/17 第2回清沢満之研究交流会（清沢満之から問われるもの—異領域間の「対話」は可能か？）「方法としての〈清沢満之〉の可能性—「悪」と近代への問い」明星学園教諭：早稲田大学現代政治経済研究所：繁田真爾氏、「清沢再誕—その歴史的意味」真宗大谷派教学研究所研究員：名畑直日兄、「今村仁司の清沢満之論と「宗教哲学」の課題」愛媛大学准教授：杉本耕一、大阪教育大学教授：岩田文昭〈コメンテーター〉、親鸞仏教センター研究員：名和達宣〈司会〉（文京区・求道会館）
- 3/22 第7回センター会議（京都）
- 3/29 第163回清沢満之研究会
- 3/30 第185回英訳『教行信証』研究会
- 4/6 第24回『西方指南抄』研究会
- 4/8 ご命日のつどい
親鸞仏教センター新施設竣工式
- 4/15 第164回清沢満之研究会
- 4/18 第13回「親鸞仏教センターのつどい」記念講演「称名念仏と浄土—現代の思想的課題からの照射—」東京大学大学院人文社会系研究科教授：下田正弘、「深層意識の自覚化」親鸞仏教センター所長：本多弘之（千代田区・学士会館）
- 4/19 第186回英訳『教行信証』研究会
- 4/27 親鸞仏教センター移転開所式

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③7

欲生心は如来の回向心

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第91回と第92回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、十八願成就文について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第90回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部良一）

■大悲心は深層意識にはたらいている

第十八願成就文の「願生彼国 即得往生」（『真宗聖典』44頁、東本願寺出版、以下『聖典』）、願生すれば即ち往生を得るということは、欲生心^{よくしょう}が成就することだと親鸞聖人はおっしゃる。「欲生」というのは如来が衆生にわが国に生まれんとおもえと、勅命、命令してくださっているのだと。その呼びかけの場所、実は本願である。本願の場所に来たと。願生せよというのは、その願いに触れればたすかるのだ。だから曾我量深先生は、「信に死し願に生きよ」とおっしゃった。願生というのは願に生きることだと。

『教行信証』では「欲生はすなわちこれ回向心なり。これすなわち大悲心なるがゆえに、疑蓋^{ぎがいまい}雑^じわることなし」（『聖典』233頁）と。生まれんとおもえという勅命は、如来が大悲の心をもって衆生に^{めぐ}回らし向けようとする心なのだ。その勅命は、如来自身が衆生に全部投げかけてくれる、如来の回向であると。

このことが私は、読んでも読んでも、どのような意味かわかりませんでした。けれども、結局わ

かるという理性の対象にはならないのです。われわれの煩惱の心では見えない。衆生の苦悩の闇をみそなわして大悲がはたらく場所は、私たちの存在の根の部分であって、上のほうで浮ついて生きている心の部分からは絶対に見えない。そういうところにはたつき続けている。このごろ、私はこれを「深層意識」という言葉で言ってみてはどうかと思っています。深層意識に大悲心がはたらいている。これは、われわれからは見えない。見えないけれども、私たちに何か勅命としてきていますから、それが何か突き動かして、教えを聞かせたり、本を読ませたり、仏法は何を言おうとしているかと気にかかってくる。そのようなものは、自分で気にかかるというより如来の勅命が動かしてくる。

欲生心、「わが国に生まれんとおもえ」という呼びかけは、如来の回向心なのだ。如来が私どもに恵んでくださっているお心なのだ。これは十方衆生に呼びかけている。十方衆生は、それに気がつかないで動いているけれども、本当は根にはたらいている。だから、教えを聞いてだんだんわかってくる。自分が生きていたのではない、如来のはたらきを聞くと、そのために私は生かされているのだと、眼が変わってくる。そう変わるのとは自分で変わったのではない。如来の大悲の回向心がはたらいているのだと。そのように親鸞聖人は表現されるわけです。

■宗教的な転換を「往生」と言う

欲生心が成就するというから、終わりかと思いたいのですけど、本願に終わりはないのです。

兆載永劫の修行に終わりは無い。法蔵菩薩は歩み続ける。法蔵菩薩が歩み続けるということは、欲生心が歩み続けるということです。これは、寝ても覚めても私たちがどこかで支え、励まし、聞かしていきようなはたらきが如来の欲生心であるという教えです。ですから、欲生心が成就するということは正定聚しやうじやうじゆの機となることだと親鸞聖人はおっしゃる。われわれは、凡夫でありながら、間違いなく仏に成る位をいただけるのだと。単に凡夫として悲しい人生を生きているのではない。必ず成仏する、あるいは大涅槃ねはんを得る、そういう形で仏教が教えたような、苦悩の命を、苦悩を超えて生きるような智慧、生死即涅槃というような眼を開く智慧が、信心の智慧としてこの人生においてわれわれに与えられるのだということなのです。

これは、聞いても聞いてもよくわからない所があるのですが、本願に触れるということは、信心をいただくことにおいて生活が変わるということなのです。生活が変わるといっても、やっていることが変わるわけではない。ただ、やっていることを感じている主体が、自分が生きている意味が変わる。そうすると、辛いつらなと思って嫌々生きている命ありがたい。このような形でいただいて生きていけるこの一瞬一瞬ありがたいというように仰げるようになる。闇だなど感じていた人生が明るみを感じながら生きられるようになる。そうすると人生が変わるわけです。そのようなものが宗教的な転換です。それを往生と言う。

現在の相対的状況のなかに新しい眼をもつということは、なかなかわからない。現在進行形に光に触れつつ生きていけることは、なかなかわからないし、上手く表現できない。それを親鸞聖人は、どれだけ愚かな身であろうとも、どのような境遇であろうとも、光に遇って生きていくことにおいてその意味が転換されるという宗教的生の喜びを、何とか苦勞して明らかにしてくださったのだと思うのです。私としては、そのような宗教的な生命に触れることが、この人生においてあるのだと申し上げたいと思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

親鸞仏教センターの動き

(2016年5月～7月) 一抄出—

■ 2016年

- 5/9 第91回(通算第142回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 5/13 ご命日のつどい
- 5/16 乗満寺公開講座(乗満寺):大澤研究員発表「『親鸞』とは誰か—掴めないその実像—」
- 5/19 第52回現代と親鸞の研究会「尊厳と思いやりが交響する財政一次の世代がその次の世代とつながるために—」慶應義塾大学経済学部教授:井手英策氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 5/22 第13回「仏教と近代」研究会(佛教大学):大澤研究員発表「親鸞像の形成過程—「伝絵」から親鸞へ—」
- 6/4 第24回日本近代仏教史研究会(立正大学):名和研究員発表「清沢満之における「自力/他力」再考—「修養」という語に着目して—」長谷川研究員発表「清沢満之の前期思想について」
- 6/9 第92回(通算第143回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 6/10 ご命日のつどい
- 6/12 「宗教」と「社会」学会 第24回学術大会(上越教育大学):大澤研究員発表「親鸞小説のなかの親鸞像」
- 6/13 第53回現代と親鸞の研究会「宗教性を哲学者はどう考えるか」哲学者、早稲田大学人間科学部教授:森岡正博氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 6/20 乗満寺公開講座(乗満寺):大澤研究員発表「『親鸞伝絵』に描かれた親鸞像—宗祖としての親鸞聖人—」
- 6/24 第15回親鸞仏教センター研究交流サロン「現代と古典—「役立つ」学びとは?—」筑波大学非常勤講師:川井博義氏、高校生からの哲学雑誌『哲楽』編集人:田中さをり氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 7/3 第23回真宗大谷派教学大会(大谷大学):中村研究員発表「『法然聖人御説法事』から見る「宗」と「血脈次第」の問題」、青柳研究員発表「善導の『大経』観」
- 7/9 東洋大学井上円了研究センター2016年度第2回研究会(東洋大学):長谷川研究員発表「19世紀の宗教思潮からみる井上円了—ヴィクトリア時代の英国と明治日本—」
- 7/22 第93回(通算第144回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- ※6月から新たに「『教行信証』と善導」研究会を青柳研究員が、清沢満之研究会を長谷川研究員が主催し開催。その他、英訳『教行信証』研究会、『西方指南抄』研究会を毎月1回開催。

掲載論文等

- 5月 『近代仏教』第23号
名和研究員「清沢満之研究の道程—没後百周年という交差点—」
- 6月 『真宗教学研究』第37号
本多所長「欲生心成就の信」(講演録)
名和研究員「清沢満之における「忘」の意義—『臘扇記』を手がかりとして—」
中村研究員「機法—体」説成立の再検討—證空における「往生正覚俱時」説を中心として—」
- 7月 長谷川研究員『リクール読本』(共著)

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③⑧

信心の能動性

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第93回と94回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、この両回では「三輩段」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第91回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部良一）

■「能信」

金子大榮先生が大変丁寧に教えてくださっているのですが、親鸞という人は全部受動型だと。教・行・信・証、すべて如来の回向であり、救済もいただき、全部いただくのだと。これはある意味でよくわかるのですが、何か納得できないところがある。つまり、能動性が出てこない。曾我量深先生は、すごく積極的なのですが、それがどこから出てくるかといったら「能信」だと。

行に対する真実信心というあり方を、曾我先生は「所行・能信」という関係だとおっしゃった。

行は「所行」の法だと強くおっしゃる。「能行」というと凡夫が行ずることになって、自力になりますから、曾我先生は「能行」とおっしゃらない。能は行につかずに信につく、「能信」だとおっしゃる。如来の大悲回向に行ぜられているから「所行」ですが、それを信ずる責任は衆生にあるのだと。衆生が信じなければ、行は衆生にはたらない。

欲生心成就の文の始まりは「至心回向」で、これは如来の回向だと。何を回向するかといったら、大行を回向する。大行の回向をいただいたと

ころから欲生心が始まるから、欲生心は衆生のなかに、願いが立ちあがってくるのだと。ここで曾我先生の語り方は、あたかも凡夫が欲を起こすように語るのです。つまり「能」の形で語る。衆生に能動性が出てくるのだと。これがいくら読んでいてもわからなかったのです。なぜ回向であったものが、われわれの能動性になってしまうのか。

■深層意識のレベル

曾我先生の本は読むとさっぱりわからない。わからないけれども、もう一度読んでやろうと、何かすごい活気を与えられるわけです。理性的自己でわかるわけではない。しかし、何かつき動かされるものがある。曾我先生自身も、それを感じながら講演されるものだから、講演しているうちにだんだん興奮してきて、手が上がってきて、声が甲高くなって、それを聞いているほうも興奮してきて、という講演が何回かありました。そのような会座に出遇うと嬉しくなってしまうのです。何か本願が本当にはたらいてきて、受けとめられた人にはたらき出して動かす。その動かすレベルは、現代の精神分析学的な心理学的言語で言えば、深層意識にはたらく。

欲生心成就は、どこで成就するかといったら、理性レベルではないのです。聖典にこう書いてありますとか、インドでこう言っていますとか、そういう言葉を集めてきて、はいわかります、というレベルを作り上げるのは学問の世界で、そのようなことを木っ端微塵に吹き飛ばしてしまうほど深いレベルの体験を起こしてくるのが本願力のはたらきでしょう。

それと正反対に、現代は合理主義、経済合理性と、全部、知的レベルで計算する。宗教レベルが見えない。そのようなものはないものだと思っている。ないものを信じているのは迷信だと思っている。迷信しかわからないのが現代生活なのですね。

■受動全部をもって能動に転ずる

われわれの発想、つまり一重的自己からすると、不純粹の間は純粹になれない。凡夫であったら金剛になれない。この世を生きているのであるから浄土を生きるわけではない。そのように矛盾するものを分けるわけです。しかし、矛盾するものが出会う場所が与えられるのだと。能動と受動が矛盾していると思って、受動である限り能動になれない、それでは元気が出ない。曾我先生はどうして能動になれるのだろう。長い間、そのようなわからなさがあったのですけれど、宗教的^{えしん}回心が起こるレベルは深層レベルなのだと。如来のはたらきだけれど、それが起こっている事実^{じじつ}に気づくのは、それが表層レベルにまで、つまり地中のマグマが下で動いているだけでなく上まで吹き出てくる、これが能動性になる。はたらきは受動性で受けとめるけれど、出てきたときには能動性になる。こうして、回向の信心なのだけれども、信心に「能信」、「能」ということが出てくる。これが言えるのは、欲生心なのだと。欲生心が回向心だと親鸞聖人が押さえる意味を、曾我先生は、受動全部をもって能動に転ずるのだと、このようにおっしゃるのです。

曾我先生は、ほとんど叫んでおられるのです。でも、わからない。こちらの耳に聞こえてこない。このようなまどろっこしい経験が長い間あり、もう、曾我先生が亡くなられて45年くらいになるのですが、あの叫びが耳の底にまだとどまっているのです。あの元気がどこから出てきたのだろう。本願からきているのだと、不思議な因縁で、やっと少しわかったというか、^{うなず}頷かされてくるようになりました。

親鸞仏教センターの動き

(2016年8月～10月) 一抄出—

■ 2016年

- 8/1 人事発令(飯島孝良嘱託研究員、佐々木啓書記補が発令。越部良一、法隆誠幸が嘱託研究員として再任)
- 8/4 第3回『教行信証』と善導 研究会
- 8/7 「宗教・イメージ・想像力」研究会第2回シンポジウム(日本女子大学): 飯島研究員発表「メディアとしての一休「像」とその禅文化史的意義」
- 8/8 第28回『西方指南抄』研究会
- 8/9 第190回英訳『教行信証』研究会
- 8/12 ご命日のつどい
- 8/20 東アジア人文フォーラム(北京大学): 中村研究員発表「浄土と心の問題」
- 8/25 第94回(通算第145回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 8/29 第169回清沢満之研究会
- 9/2 第191回英訳『教行信証』研究会
- 9/4 日本印度学仏教学会第67回学術大会(東京大学): 中村研究員発表「證空における「化前序」説成立とその展開」
- 9/9 ご命日のつどい
- 9/11 日本宗教学会第75回学術大会(早稲田大学) パネル「明治期における宗教体験の語りとその伝播」: 長谷川研究員パネル発表「宗教的「実験」の系譜—原坦山の心性実験録—」
- 9/13 第29回『西方指南抄』研究会
- 9/14 第170回清沢満之研究会
- 9/15 第4回『教行信証』と善導 研究会
- 9/17 国際井上円了学会第5回学術大会(東洋大学): 長谷川研究員発表「井上円了の「仏教改良」について」
- 10/4 第192回英訳『教行信証』研究会
第95回(通算第146回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 10/11 第30回『西方指南抄』研究会
- 10/14 ご命日のつどい
- 10/17 第5回『教行信証』と善導 研究会
- 10/24 第171回清沢満之研究会
- 10/31 平成28年度西山深草派宗学院研究科生発表会(西山深草派総本山誓願寺): 中村研究員発表「諸行本願義における「雑行専修」をめぐる問題—西山義の批判を中心として—」

掲載論文

- 10月 『深草教学』第27号
中村研究員「顕意『浄土疑端』成立過程の検討」

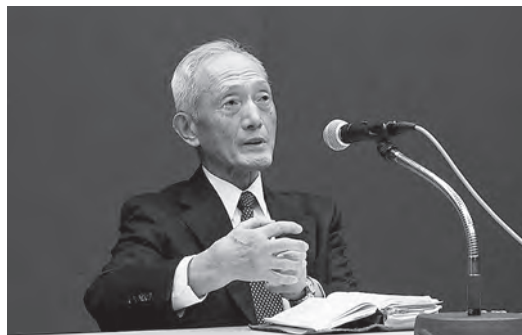
親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③9

諸仏の称歎の意味について

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第95回から97回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、95回と96回では「諸仏如来」について、97回では「東方偈」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、95回と96回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部良一）

■ 諸仏の特殊性を超えていく

「無量寿仏の威神極まりなし。十方世界の無量無辺不可思議の諸仏如来、彼を称歎せざることなし」（『真宗聖典』46頁、東本願寺出版、以下『聖典』）とされています。先立って仏法の道に触れ、道を求め、道を明らかにした方々、その人たちの言葉が諸仏の言葉になるわけです。そのような諸仏に対して、無量寿仏、阿弥陀仏という名前が出てくる。これは光が無限でありたい、寿が無限でありたいという、そういう限定されることのない世界を開こうという願いが名前として付いた仏陀です。なぜ、そういう名前が出てきて、そして諸仏に称歎されるのか。

それは、もともと個人であった方が仏陀に成った場合には、覚りを開いて囚われから解放されたといっても、ある意味で特殊性がある。それぞれの仏陀のもつ特殊な力とか特殊な意味があり、例えば薬師如来という名前は、衆生の苦悩のなかでも特に病気を治したいという願いが仏陀の名前に

なっています。また、歴史上の人物が、教えを主体化して、自分自身を発見し苦悩を乗り越えた場合に仏陀という意味をもつならば、それは諸仏の一人になって、そして、この道がこのようにして明るみをもつことができますよと語っていくことができます。けれど、どうしても個人性は克服できないのです。

これは譬えで、私の師匠であった安田理深という方は、たくさん弟子ができたのですが、やはりそれはある意味で一部なのです。「安田さんの言うことはさっぱりわからん。難しすぎる」と寄りつかない人が圧倒的に多かった。そういう人にとってはうるさいだけで、彼の考えは駄目だと。だから、教えを聞くについても因縁なのです。偉い学者さんが、曾我量深の言うことはさっぱりわからんと、金子大榮の言うことなら許すと、そのようなことはあるのです。

そのような意味で言えば、諸仏には諸仏各々が得意とする出遇い方があるし、諸仏が一人おられればそこには必ず縁を結ぶ衆生がいるのですが、そうした縁はどれだけ頑張ってもそんなに多くはならないのです。ところが、阿弥陀仏の場合は、親鸞の和讃に「弥陀初会の聖衆は算数のおよぶことぞなき」（『聖典』480頁）とあるように、「さあこれから説法するぞ」というときには、もう数えることができない人々が縁になっているのだと。

■人に依らず、真理それ自身に依る

安田先生は、人に依りかかってはならない、法に依れと。法、ダルマ、真理そのものに依れと、そのような大乘仏教の教えの大事なところを繰り返しおっしゃってくださっていました。人は有限である。人は凡夫である。人が触れた真理、その真理それ自身に依るのだと。

私がこの仏法の教えを学びはじめた昭和30年代のころには、まだ清沢先生の門下の方々が何人か生きておられた。それが、昭和46年に曾我先生が亡くなる。それから5年後には金子先生が亡くなる。安田先生が信頼していた信国^{のぶくにあつし}淳という方も亡くなるということが続いていったときに、私は、これはどうなるのだろうという不安感、何だか寂しいという感じがしたものですから、安田先生にお目にかかったときに、「仏法を生きてくださった方々がどんどん亡くなってしまって、寂しいですね」と申し上げたら、「馬鹿もん」と怒られました。「お前は何を求めているのだ」と。まったく頼りない教えの聞き方だ、と言うわけです。

もちろん、人が法に触れて法を生きてくださり法を証明するわけですが、後から行くものは、その人を自分の依り処にしていまいがちなのです。それを、「善知識だのみ」と批判されるのです。人を自分の依り処にしてしまう。そうすると、その人が亡くなればもうお手上げです。そうではなくて、その人が生きている真理を求めるべきである。法を所有している人はいないのだと。

釈尊でも法を所有したわけではない。自分が見いだした法を、こういう法によって自分は闇を乗り越えられた、この法を信じてほしいということで、教えに説かれた。そういう意味で法を教えるべく、道理を教えるべく説かれた経典が『無量寿経』です。ですから、その『無量寿経』では諸仏が阿弥陀を称歎する、ほめるという形で願いが説かれていると思うのです。

親鸞仏教センターの動き

(2016年11月～2017年1月) 一抄一

■ 2016年

- 11/2 第193回英訳『教行信証』研究会
- 11/8 第96回(通算第147回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 11/11 ご命日のつどい
第54回現代と親鸞の研究会「〈生まれる〉ことをめぐる倫理学のために―〈誰〉かであることとその〈起源〉」明治学院大学社会学部教授:加藤秀一氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 11/14 第6回「『教行信証』と善導」研究会
- 11/21 第31回『西方指南抄』研究会
- 11/25 第12回 研究員と読む公開輪読会「*Living Discourse on Buddhism*―井上円了の『仏教活論』と仏教近代化の諸問題」担当:長谷川研究員① 11/25② 12/2③ 12/9④ 12/16(文京区・親鸞仏教センター)
- 11/28 第170回清沢満之研究会
- 11/29 第194回 英訳『教行信証』研究会「Suzuki Daisetsu's Presentation of Buddhism to the West」マールブルク大学名誉教授:マイケル・バイ氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 12/5 第97回(通算第148回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 12/8 平成28年度西山学会研究発表大会(京都西山短期大学):中村研究員発表「『法然聖人御説法事』から見る「宗」と「血脈相承」の問題―『選択集』との異同に着目して―」
- 12/9 ご命日のつどい
- 12/12 「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト「解釈の転換―私感:『教行信証』の近代」教学研究
所長:安富信哉氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 12/14 第7回「『教行信証』と善導」研究会
- 12/20 第195回英訳『教行信証』研究会
- 12/21 第32回『西方指南抄』研究会
- 12/27 第171回清沢満之研究会
- 12/28 親鸞仏教センター報恩講

■ 2017年

- 1/6 第12回研究員と読む公開輪読会「唯信の生活―『唯信鈔文意』を読む―」担当:青柳研究員① 1/6② 1/13③ 1/20④ 1/27(文京区・親鸞仏教センター)
- 1/11 第196回英訳『教行信証』研究会
第98回(通算第149回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 1/13 ご命日のつどい
- 1/18 第8回「『教行信証』と善導」研究会
- 1/25 第33回『西方指南抄』研究会
第16回研究交流サロンの「宗教と国家」中央大学
総合政策学部教授:保坂俊司氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 1/31 第172回清沢満之研究会

掲載論文

- 12月 『印度學佛教學研究』第65巻第1号
中村研究員「證空における「化前序」説成立とその展開」

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④0

願生という深い祈り

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第98回から100回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、98回と99回では「東方偈」について、100回では「第二十二願成就文」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、98回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部良一）

■『無量寿経』は願生の教え

「東方偈」のなかで「その仏の本願力、名を聞きて往生せんと欲^{ねが}えば、みなことごとくかの国に到^{いた}りて、自ずから不退転^{おの}に致^{いた}る」（『真宗聖典』49頁、東本願寺出版、以下『聖典』）と。仏の本願力によって名を聞くということが起こるなら、その聞名^{もんみょう}のなかに、欲生^{よくしやう}、彼の国に生まれたいという願いが成就して、自ずから不退転に致ると。不退転、退転しないということは、仏の願心にしたがって、仏の道を求め、その道をもう外れない。だから、衆生は光のなかにあることをもう忘れない。このようなことが持続すると。

この偈文の前半の二句、「其仏本願力 聞名欲往生」が『教行信証』『信巻』の「信の一念」のところに引用されています（『聖典』239頁）。この一念を、親鸞聖人は「正信偈」で「よく一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり」（『聖典』204頁）と言われていて、煩惱を断たずして涅槃を得るという大乘仏教の課題が、凡夫の努力を待たずして、本願成就の救いとして一念

の事実のところに成り立つのだと。つまり、衆生は煩惱具足の凡夫であるにもかかわらず、如来の呼びかけが衆生の本質には響いていて、それに気づくことは、真実信心というものが、如来の素質が、衆生にあると気づくことなのだ。

仏教は、人間の苦悩の本質は何であるかを仏が見そなわして、そこから解放しようとする。あらゆる衆生が自我の執^{とら}われをもち、自己関心から出られない。そのような自己関心を取り巻いて、苦悩の条件がいくらでも起ってくるのですから、それに対応し、そこから出ようとして人間は悪戦苦闘している。そこに、如来は苦悩の本質を見届けて、そこから本当に解放される場所を与えようと、こういう呼びかけが、欲生心という言葉になっているわけです。

ですから、『無量寿経』の教えは、衆生の側からすれば本当に解放される場所がほしいという願生の教えです。如来のほうからすれば、そのための方法は我が名である。名を念ぜよと。名のところに願が衆生に届く。名を通してわれわれの闇が破られ、そして、われわれにとって大事な、解放される場所が与えられるのだと。

■願生は如来の回向

本願成就の文にある「至心回向」というのは、本願が成就することを語っている言葉で、如来の願いが成就することを語っているのだから、如来の回向が凡夫の上に成り立ったことを表すのだと、親鸞はいただかれた。その至心回向を受けて「願生彼国 即得往生」（『聖典』44頁）と書いて

ある。願生してもまだ往生できないというのでなくて、至心回向を^{くぐ}潜り、願生すれば即ち往生すると。それは、「名を聞きて往生せんと欲えば、みなことごとくかの国に到りて」という言葉と重なっているわけです。

願生という衆生の深い祈りは、如来の欲生心の成就として、如来の回向に^{ちくう}値遇するという形でいただけるのだと。これが親鸞聖人が明らかにした凡夫の救いです。凡夫は凡夫のままで、名号のいわれに出遇うなら、その名号の意味に出遇うところに本願と値遇する。それは如来の大悲回向と値遇することだと。値遇することができるなら、濁世の限界と無限なる大悲の世界との接点にわれわれは立つ。こういうことが成り立つのが信の一念なのだ。

■願生は前の命が終わること

だから、信の一念を明らかにするために、『愚^ぐ禿^{とく}鈔^{しょう}』で親鸞聖人は、善導大師の言葉、「前^み念^{よう}命^{じゆう}終^{しゆう}後^ご念^{ねん}即^{じく}生^{しやう}」を引いてくるわけです（『聖典』430頁）。前の命に死ねばすぐ次の命、浄土の命が始まるのだと。つまり、「願生彼国」は「前念命終」、前の命が終わるということだと。それは信の一念である。そして、「即得往生」は「後念即生」である。そのように、本願成就文と善導大師の言葉とを結びつけて、本願と値遇することがもたらす衆生の救いを親鸞聖人は表されるわけです。

凡夫の生活がどれだけ苦悩の命であろうと、有限の命であろうと、大悲のなかにある生活をいただいている。本願の救いのなかにある、大悲はすでに包んでいると信ずる。それは不退転である。不退転は^{しやうじやうじゆう}正定聚でもある。必ず仏に成る位をいただいて生きる。これは菩薩であるわけです。本願成就のところ、聞名のところに本願を聞き当てることができ、そこに、たすからない衆生がずっと歩み続けて行くことができる道が開かれるということです。

親鸞仏教センターの動き

(2017年2月～4月) 一抄出—

■2017年

- 2/3 第12回研究員と読む公開輪読会「〈行〉とは何か—『西方指南抄』を読む」担当：中村研究員①2/3②2/10③2/17④2/24（文京区・親鸞仏教センター）
- 2/6 第99回（通算第150回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 2/10 ご命日のつどい
- 2/21 第9回「『教行信証』と善導」研究会
- 2/22 第173回清沢満之研究会
- 2/24 第197回英訳『教行信証』研究会
- 2/27 第34回『西方指南抄』研究会
- 3/6 第100回（通算第151回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3/8 第198回英訳『教行信証』研究会
- 3/10 ご命日のつどい
- 3/13 第3回清沢満之研究交流会（清沢満之と西洋哲学）〈研究発表〉「清沢哲学研究の課題と展望」親鸞仏教センター研究員：長谷川琢哉、「日本における西洋哲学の初期受容」大谷大学教授：村山保史氏、「近代仏教のなかの清沢満之と哲学」龍谷大学アジア仏教文化研究センター博士研究員：碧海寿広氏、〈コメンテーター〉関西大学教授：井上克人氏、〈司会〉真宗大谷派教学研究所研究員：名和達宣（文京区・求道会館）
- 3/25 宗教哲学会第9回学術大会（京都大学）：長谷川研究員発表「清沢満之における信仰の獲得—「中期」の宗教哲学的諸論考を手がかりとして」
- 3/27 第10回「『教行信証』と善導」研究会
- 3/29 第35回『西方指南抄』研究会
- 3/30 第174回清沢満之研究会
- 3/31 第55回現代と親鸞の研究会「ドストエフスキ、イエス像探求の足跡—ユダの人間論とキリスト論」ドストエフスキ研究者、河合塾英語科専任講師、河合文化教育研究所研究員：芦川進一氏（文京区・親鸞仏教センター）
- 4/10 第3回「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト全体会
- 4/14 ご命日のつどい
- 4/17 第11回「『教行信証』と善導」研究会（善導『観経疏』について）大正大学非常勤講師、浄土宗総合研究所研究員：柴田泰山氏（文京区・親鸞仏教センター）
- 4/18 第36回『西方指南抄』研究会
- 4/19 第175回清沢満之研究会
- 4/24 第12回「『教行信証』と善導」研究会
- 4/25 第14回「親鸞仏教センターのつどい」〈記念講演〉「憲法の「古稀」について考える」早稲田大学法学学術院教授：水島朝穂氏、「本願の国土」親鸞仏教センター所長：本多弘之（千代田区・学生会館）
- 4/28 第199回英訳『教行信証』研究会

掲載論文

- 3月 『井上円了センター年報』vol. 25
長谷川研究員「ヴィクトリア時代英国における不可知論と井上円了」
『親鸞教学』第107号
青柳研究員「必可超証大涅槃—正定聚之機の具体相—」

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④1

むなしくすぐるひとぞなき

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第101回と102回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、101回では「第二十二願成就文」について、102回では「浄土の菩薩」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々と間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第100回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

■人間が成就するとは大涅槃に^あ遇うこと

天親菩薩の『浄土論』では、浄土の功德が二十九の形で語られています。そのなかで仏の功德が八つ言われている、その八番目にあるのが、本願力を語る「不^ふ虚^こ作^さ住^{じゅう}持^じ功^く徳^{とく}」です。これを親鸞聖人は『教行信証』の「行巻」で、本願とは何であるかをあらためて問い直すところに引かれています（『真宗聖典』198頁、東本願寺出版、以下『聖典』）。不^ふ虚^こ作^さ住^{じゅう}持^じというの、つまり、空^{むな}しく過ぎる者はない、と言うのですが、私の師匠であった安田理深先生は、人間の悲劇と言って、貧乏とか、病気とか、そういうものが辛いという以上に辛いものがある。それは、この人生を生きて無駄だったということだと。これほど辛いことはない。このようにおっしゃっていました。いろいろな功成り名遂げてという話がありますが、名利がたとえ満たされても、何か満たされない形で人生が終わることは起こりうるわけです。曇鸞大師は、そういうことを譬^ひ喩^ゆとして解釈のなかに出しておられます。金銀財宝をたくさん貯めたところに、大飢饉^{ききん}がくると、食糧はたちまち底をつ

いてしまう。お金を抱えて餓死したと。

金銀財宝といったものを当てにしてわれわれは生きていることが多いわけですが、当てにならないと。本当に空しく過ぎないとは、どういうものに出遇えばよいのか。こういう課題が、浄土に出遇うということなのだと。浄土に出遇うということは、空しく過ぎる者がいないということ。如来の本願が大涅槃から立ち上がってわれわれに呼びかける。その涅槃に遇うはたらきが、無限にはたらきうる力になる。それを親鸞聖人は、「本願力にあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき 功德の宝海^{ほうかい}みちみちて 煩惱^{ぼんごう}の濁水^{じやくすい}へだてなし」（『聖典』490頁）とおっしゃる。煩惱がどれだけ濁っていようと、本願に遇うことによっていただける利益は、空しく過ぎないということなのだと。大涅槃に触れることは、ある意味で絶対満足なのです。人間が成就するということは大涅槃に遇うということです。

しかし、本願との出遇いをここまで吟味することは容易なことではない。本願に遇うということは、本願を対象的に見るのではないのです。本願というものを考えるのでもない。本願を感じて、本願のなかに生きる、本願を自分自身の依り処にする。そういうことが成り立つと、もう空しく過ぎることはない。そういう呼びかけが親鸞聖人から出されている。

■阿弥陀如来の仕事に参画する

不^ふ虚^こ作^さ住^{じゅう}持^じ功德は浄土の功德です。浄土の功德なのだけでも、浄土に行ってから味わう功德ではなくて、浄土の功德が向こうからくるわけです。

本願力回向として、凡夫の世界を包むべく、向こうからはたらいてくる。本願力回向としてはたらいてくる。こういうものに出会う。

本願と本願成就とは、本願が因であって本願成就が果としてくるというのではなくて、願と願成就が常に「南無阿弥陀仏」という一点でわれわれに呼びかけてくる。これが「大行」と言われるのは、人間が行ずるのではなくて本願が行ずるからです。本願が行ずる形が「南無阿弥陀仏」である。その「南無阿弥陀仏」は願海をわれわれに開いてくる。その「南無阿弥陀仏」を信ずる。そういう「南無阿弥陀仏」であると信ずる。願海に触れるということは、「大信海」、信心が海になる。その信心において、本願と本願力の成就とがわれわれに呼びかけ、われわれを励まし、凡夫である私を仏道を成就せしめる存在に転じてくださるわけです。

でも、自分が仏に成るわけではない。われわれはどこまでも愚かな凡夫である。「悲しきかな、愚劣鸚鵡」（『聖典』251頁）とおっしゃるのは、そのことである。凡夫であるままに本願力をいただくのだと。「煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌」（『聖典』280頁）が大涅槃の功德をいただくことができる。それが本願を信ずること。凡夫だからだめだというのでもないし、凡夫を止めて仏に成るのでもない。凡夫であるままに仏道を成じていこう。こういうことが成り立つのが本願力である。本願力が私どもを呼び、私どもを励まし、私どもを歩ませてくださる。こういうことが本願の教えと出会うことだと思うのです。

それは、決して個人関心でできるという話ではない。「南無阿弥陀仏」の回向の仕事として、そういう課題を私たちは感じながら生きていける。「難思議往生を遂げんと欲う」（『聖典』356頁）と親鸞聖人もおっしゃるように、意欲としてわれわれは阿弥陀如来のお仕事に参画できる。阿弥陀如来のお仕事は十方衆生にかかっている。私どもはそれを信ずることで、「よくぞ信じてくれた」、こう言って励ましてくださる仏陀の願いが聞こえてくるのです。

親鸞仏教センターの動き

（2017年5月～2017年7月）一抄出—

■2017年

- 5/1 第37回『西方指南抄』研究会「菩薩の倫理とその根拠」東京大学・国際日本文化研究センター名誉教授：末木文美士氏（文京区・親鸞仏教センター）
- 5/8 第200回英訳『教行信証』研究会
- 5/9 第101回（通算第152回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 5/11 第17回研究交流サロン「近代日本のナショナリズムを考える——「明治の青年」を事例にして」筑波大学人文社会系教授：中野目徹氏、愛媛大学法文学部講師：中川未来氏（文京区・親鸞仏教センター）
- 5/12 ご命日のつどい
- 5/15 第13回『教行信証』と善導』研究会
- 5/29 第38回『西方指南抄』研究会
- 5/30 第176回清沢満之研究会
- 6/2 第24回日本近代仏教史研究会研究大会（東北大学）：長谷川研究員発表「『大乘仏教』をめぐる言説形成——井上円了を中心にして——」
- 6/5 第1回「三宝としてのサンガ論」研究会
第102回（通算第153回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 6/6 第56回現代と親鸞の研究会「よく生きるということ」哲学者：岸見一郎氏（文京区・親鸞仏教センター）
- 6/9 ご命日のつどい
- 6/13 親鸞仏教センター臘扇忌・鸞音忌法要
- 6/14 第201回英訳『教行信証』研究会
- 6/20 第177回清沢満之研究会「リフォームとしての清沢満之——『教団』の世紀と精神主義——」天理大学人間学部教授：岡田正彦氏（文京区・親鸞仏教センター）
- 6/26 第14回『教行信証』と善導』研究会
- 7/1 第18回国際真宗学会学術大会（武蔵野大学）：青柳研究員発表「『自信教人信』について」
- 7/3 第202回英訳『教行信証』研究会
第103回（通算第154回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 7/18 第15回『教行信証』と善導』研究会
- 7/19 公益財団法人日独文化研究所学術交流シンポジウム パネルディスカッション「文化と文明」：長谷川研究員発表「明治期における仏教形而上学の形成」
- 7/21 ご命日のつどい
- 7/24 第2回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 7/26 第178回清沢満之研究会

掲載論文

- 5月 『近代仏教』第24号
長谷川研究員「〈書評〉三浦節夫『井上円了——日本近代の先駆者の生涯と思想』」

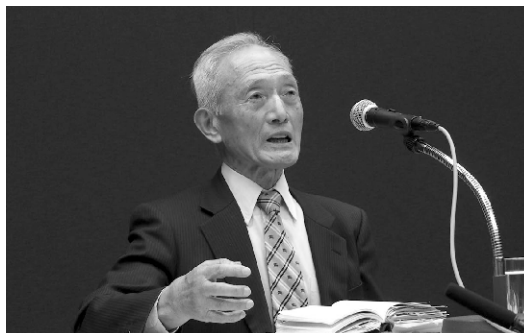
親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④

本願の大きな世界

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第103回～105回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、103回では「菩薩」、「自在」等について、104回では「大慈悲」、「五眼」について、105回では「空にして所有なし」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第102回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

■あらゆる世界に行く

「かの国の菩薩は、仏の威神^{いじん う}を承けて、一食^{いちじき}の頃^{あいだ}に十方無量の世界に往詣^{おうぎ}して、諸仏世尊^{くきょう}を恭敬^{くきやう}し供養^{くやう}せん」（『真宗聖典』52頁、東本願寺出版）。浄土の菩薩は阿弥陀の力を受けることによって、「一食の頃」に、つまり一回食事をする間に、あらゆる世界に行くことができると。このようなことは、有限な身ではできないわけです。

宮沢賢治の詩（「雨ニモマケズ」）で、“東・西・南・北に行って、病気の人があったら看病したい、疲れた人があったら手助けしたい、死にそうな人があったら怖がらなくていいと言いたい”と、そのように言うでしょう。あれは菩薩の願心と言っても良いと思うのです。けれども、身は一つしかない。そうするとあっちもやりたい、こっちもやりたい、全部やりたいといっても現実にはできない。身が分裂するしかない。でも、願いはある。これは菩薩の願心、大悲心と言うしかない。だから、浄土の教えでは法蔵菩薩の願心でわれわれに

呼びかけてくる。では、われわれにできるかといったら、できないわけです。そういうところに悲しさがあるわけです。悲しい、でも世界が開ける。大きな慈悲が呼びかけている世界があるのだと。壁のない仏の大きな世界がある。

「かの国の菩薩は、仏の威神^{いじん}を承けて」、つまり本願力をいただいて、本願力に託すことにおいて、あらゆる世界にはたらくことができると。これを親鸞聖人は「還相回向^{げんそう}」というかたちで教えてくださっているのだと思うのです。われわれが個人でできるはずがない。でも、本願力のはたらきのなかに凡夫が生かされることにおいて、本願力を観じ、本願力を語っていくことはできる。でも、自分が本願力を行ずるなどということはできない。だから、菩薩ですら仏の威神力を受けてできると、こういうことが言われてくるわけです。

■本当に満ち足りたもの

そして、そこに「心の所念^{しん しやう}に随^{したが}いて」「無数無量の供養^{むしゆ むりやう}の具^ぐ、自然^{じねん}に化生^{けしやう}して念に应じてすなわち至らん」（同上）と。華^{はな}やら、香りやら、音楽やら、仏に捧げるような供養の品々が自然に化生する。「化生」というのは、本願力のはたらきにおいてひとりで生まれてくることです。

先ほどの例で言うなら、東・西・南・北に違った苦悩の人たちがいる。どっちにも行きたいと言うけれど行けない。そのような状況を生きている命に対して、どうすれば良いのか。どうしようもないのです。大きな慈悲がみんなそれぞれに満ち足りた世界を与えているのだから、お前はまず、

お前自身に本当に満ち足りたものを見つけよと。だから、一食の頃に十方無量の世界に行けるといふのは、そういう満ち足りたものを本当に見いだしたならば、全部が満ち足りている世界に気づく。気づいたことにおいて、全部が満ち足りていると、こういうことが見えてくる。

でも、現実にはどこも満ち足りていないではないかと。現実には生老病死ですから、生まれてくる時も大変だし、生きていることも大変だし、さらに亡くなっていく人をたすけるとなれば、それも大変だし、有限な力ではもうどうにもならない。できるところでやるしかない。できるところでやって空しく過ぎるを感じたらどうするのだと、そういう問題です。それに対して大悲の本願は、あなたが要求しているものは既に満ち足りているよと。

■「汝、何の不足がある」

それで、清沢満之があのようなすごい文章を書いたことが感動を与えるのです。あれは、如来の心を自分に呼びかけている語り方だと思うのです。それは「請う勿れ、求むる勿れ、汝、何の不足かある。若し不足ありと思わば、是れ汝の不信にあらずや」（『臘扇記』）と書いておられる文章です。求めたり、どうかくださいと言ったり、そのように求めて如来からくるものではないのだと。お前に何の不足があるのか。このように確認しておられる。何かズキンとくるわけです。何でもズキンとくるのかとずっと思っていたのですけれど、こんなことを言われても無理だ、やっぱり不平不満しかないとわれわれは思いながらも、「汝、何の不足かある」というその迫力にすごいと思うのです。あれは結局、本願がわれわれに呼びかけている呼びかけ方だと思うのです。

それがここでは、菩薩の仕事として、あらゆる諸仏の世界に行って、諸仏を供養して、もうあつという間に全部できますよと。このように本願の大きな世界とわれわれ凡夫の小さな世界とは、別々なようだけれども、実は、個としてそれぞれ

あること全部を包んで無限であると同時に、一人ひとりに無限が来ている、そういう関係にあると表わしているのだと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

親鸞仏教センターの動き

（2017年8月～2017年10月）一抄出—

■2017年

8/1 人事発令（越部良一、法隆誠幸、飯島孝良が嘱託研究員として再任）

8/4 ご命日のつどい

8/8 第104回（通算第155回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

8/10 第203回英訳『教行信証』研究会

8/21 第16回「『教行信証』と善導」研究会

8/22 第3回「三宝としてのサンガ論」研究会

8/28 第179回清沢満之研究会

9/6 第4回「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト全体会

9/8 ご命日のつどい

第57回現代と親鸞の研究会「遠藤周作と井上洋治の思索—現代日本人に南無の心に生きる喜びと平安を届けるために—」ノートルダム清心女子大学副学長・キリスト教文化研究所教授：山根道公氏（文京区・親鸞仏教センター）

9/13 第204回英訳『教行信証』研究会

9/15 第180回清沢満之研究会

9/17 第24回真宗大谷派教学大会（しんらん交流館）：青柳研究員発表「伝承と己証—『教行信証』の構造に関する研究史と曾我量深の思索—」、中村嘱託研究員発表「證空の見仏／往生論」

9/19 第4回「三宝としてのサンガ論」研究会

9/29 第17回「『教行信証』と善導」研究会

10/3 第105回（通算第156回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

10/13 ご命日のつどい

10/17 第5回「三宝としてのサンガ論」研究会

10/24 第18回「『教行信証』と善導」研究会

10/27 第205回英訳『教行信証』研究会

10/30 第181回清沢満之研究会

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④3

大悲を行じて生きる

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第106回と第107回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、106回では「智慧、大海のごとし」等について、107回では「方便の力」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第104回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

■浄土は大慈悲から生ずる

天親菩薩の『浄土論』の中に浄土の性^{しょう}功德^{ごんとく}というものがあって、「正道大慈悲 出世善根生^{ぜんこんしょう}」（『真宗聖典』135頁、東本願寺出版、以下『聖典』）と。つまり、浄土の性は^{しょう}大慈悲^{だいひじ}であって、浄土は^{ぜん}大慈悲^{だいひじ}によって生み出されているのだと。その言葉を曇鸞大師が注釈して、大悲^{だいひ}ということ、小悲^{しょうひ}や中悲^{ちゅうひ}ではないのだと言っています。大悲は、如来の慈悲であって、これは無条件の慈悲です。衆生の分限で起こす慈悲は条件付きの慈悲です。ですから、本願の大悲は徹底的にそうした凡夫の有限性を批判して、大悲の場所を開こうと、呼びかけてくる。これはなかなか凡夫にとっては信じがたいし、受け入れがたい。

親鸞聖人は、「一如宝海よりかたちをあらわして」（『聖典』543頁）と言っておられますが、この大悲が起こるのは、如が動くという発想なのです。真如平等や、法性平等などと言うのですけれど、法の本来性、存在の本来の在り方は、平等であると。しかし、現実には我々はあらゆるものが違う。自我があって、他とはどうしても一緒にな

れない、そのような問題を抱えて生きている。それに対して如来は、本当は平等であり、大悲が呼びかけている世界に触れなければならないのだと言うのです。そうでなければたすからないのだと、こう呼びかけてくださる。宗教的要求というのは、こうした大悲が呼びかける世界が欲しいということです。

■大悲を行ずるとは大悲を信ずること

大慈悲ということは、如来が大慈悲であって、凡夫から大慈悲を起こすことはできないのです。凡夫は有限の限定された身を生きているのですから、これがそのまま無限には絶対にならない。それで、大慈悲が課題になっていても、我々は自力で大慈悲に立てるわけではない。でも、無限からは、有限を外して無限があるのではない。有限はすべて無限の中にある。だから「大悲を行ずる」（『聖典』247頁）ということが『教行信証』の「信巻」にあるのですけれど、大悲を行ずるということは、凡夫が行ずるわけではない。大悲が凡夫を通して大悲を行じようとする。

それは、本願が行として「南無阿弥陀仏」を行ずる。つまり、「南無阿弥陀仏」を行ずる主体は本願なのです。凡夫が行ずると考えると、これは小さな行になって大行ではなくなる。我々が行ずるとすると、念仏では物足りないとか、念仏なんかたいしたことないとか、そのような発想になって、それで難行苦行してあたかも自分が無限にまで行けると発想するけれども、有限でしかない人間が無限には行けないのです。そのような問題を突き詰めて、大悲を行ずるということは、大悲が

行じてくる。大悲の本願が呼びかけてくださる行を、我々はいただいて生きる。そのように発想して、現生の利益として「常行大悲の益」(『聖典』241頁)、常に大悲を行ずる利益ということを親鸞聖人はおっしゃるのです。

それは、大慈悲を信ずるということです。信ずるということが、自分に大悲が行じてくるということです。そして、自分がその大悲を行じて生きるということがあると、それが大悲に触れたいと思う人々に^{おの}自ずから伝わっていくのです。

■願海平等なるがゆえに発心等し

有限な凡夫が意志をもって大悲を伝えとか、そのようなことはできないわけです。できないものをできるように思うのは間違いなのです。凡夫であるという身において大悲をいただく。大悲の中にあると信ずる。そうすると、そのことが有限に苦しんでいる人々に、「ああ、大悲が自分のうえにはたらいてくださっているのだ」という考え方を学ぼうとする動きが起こるわけです。起こってくることに於いて大悲が行ずる。このように言うことができるのだと思うのです。

つまり、大悲というものがあって、という発想ではないのです。大悲は、はたらきとなって我々にくるわけです。大悲がどこかにあるのではない。我々のこの存在構造の中に、有限であることを包んで大悲がある。大悲はそうにして、あたかも場所、浄土の場所のごとくにして我々にはたらいてくる。こういうことが、衆生において大慈悲心を得るという意味になるのだと思うのです。

我々自身の心の本質が大慈悲心になるわけではない。我々はどうしても有限性をもっている。小さな心しかない。分別する心、計算する心、汚い心しかないわけです。だけど、実はそこにはたらしかけている大きな心がある。如来の本願が立ち上がって我々を救わずにおかんと呼びかけてくださる。それを親鸞聖人は「願海平等なるがゆえに発心等し」(『聖典』242頁)とおっしゃるわけです。

(文責：親鸞仏教センター)

親鸞仏教センターの動き

(2017年11月～2018年1月) 一抄出

■2017年

- 11/7 第106回(通算第157回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 11/7 第206回英訳『教行信証』研究会
- 11/10 ご命日のつどい
- 11/14 第6回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 11/20 第19回「『教行信証』と善導」研究会
- 11/28 第182回清沢満之研究会
- 11/30 第13回研究員と読む公開講座「親鸞の浄土観—『教行信証』の仏身仏土の巻を読む—」担当：青柳研究員①11/30 ②12/7 ③12/14 ④12/21
- 12/2 第16回東アジア仏教研究会(駒澤大学大学会館)：戸次研究員がコメンテーターとして出講
- 12/4 第207回英訳『教行信証』研究会
- 12/4 第107回(通算第158回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 12/8 ご命日のつどい
- 12/8 近現代『教行信証』研究検証プロジェクト「『教行信証』研究をめぐる諸課題」大谷大学教授：三木彰円氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 12/8 平成29年度西山学会研究発表大会(誓願寺)：中村囑託研究員発表「證空の末法思想—『自筆鈔』／『他筆鈔』の相違に着目して」
- 12/13 第58回現代と親鸞の研究会「心の哲学と幸福論」慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科委員長、同研究科教授：前野隆司氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 12/18 第20回「『教行信証』と善導」研究会
- 12/19 第7回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 12/22 親鸞仏教センター報恩講
- 12/25 第183回清沢満之研究会

■2018年

- 1/9 第208回英訳『教行信証』研究会
- 1/9 第108回(通算第159回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 1/11 第13回研究員と読む公開講座「清沢満之と浄土をめぐる問い」担当：長谷川研究員①1/11 ②1/18 ③1/25 ④2/1
- 1/12 ご命日のつどい
- 1/24 第21回「『教行信証』と善導」研究会
- 1/26 第8回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 1/30 第184回清沢満之研究会

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④

智慧、大海のごとし

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第108回から110回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、108回では「正念・正観」等について、109回では「空・無相・無願三昧」等について、110回では「道の自然」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第106回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

覚さとるといことは迷いの事実を知ること

「智慧、大海だいかいのごとし」（『真宗聖典』55頁、東本願寺出版、以下『聖典』）とありますが、親鸞聖人は、この智慧という言葉、仏の名号が智慧という意味をもつという使い方もされますけれども、「信心の智慧」（『聖典』503頁）という言い方もなさるのです。我々に起こる信心が智慧という意味をもつ。いずれにしても、仏教の智慧というのは、この世の智慧とは質が違う。この世の智慧は、処世の智慧とか人生の智慧とかいう言い方もありますが、この世を渡っていく方法論に関わる智慧なのでしょう。しかし、仏教の智慧はそうではなく、この世の迷いひるがひを翻すようなはたらきをもった智慧です。だから、英語で言うとknowledgeのごとき智慧ではなくて、wisdomという言葉、「叡知えいち」というように翻訳されますが、そういう言葉が仏教の智慧に当るのでしょう。

仏教の智慧は「菩提ぼだい」とも言われる。覚りです。菩提とは目覚めですから、迷っている命から目覚めるといことは、迷いに気づくということです。

迷いに気づいて、迷っている事実をしっかりと見ることが成り立つのが、仏教の智慧である。迷っている事実を知ることと菩提とは別であるという考え方もあるのですが、曾我量深先生は、迷いの事実を知ることが覚るということなのだ。覚るということは、迷いの事実を知ること以外にないのだと。このようにおっしゃいました。

しかし、迷いの事実を本当に知ることは、凡夫にはできないのです。迷いの事実、と言葉では言うけれど、他人のことなら気がつくけれど、自分が迷っているとは思わないのです。だから凡夫は気がつかない。そこに仏陀の側から教えがきて、教えを通して、どこまでも我々は迷い続ける人間であると知らされていくことが、菩提を味わう道になるのです。

何かそういう話をすると、仏教はつまりプロセス、過程でしかないのか、究極がないのかと、そのように返されてしまうことがあるのですが、これがやっかいです。迷っているのだから、覚りが開ければ、もうそれで終わりだろうと、そのように単純に我々は考えたい。けれども、そのように考えて覚りを求めて、何か体験で一瞬でも覚りのようなことを感じ取って、それで死んでしまうなら別だけれど、それでもまだ生きている場合はどうなのだと。覚りのままに生きていく、何かそういうものがありそうだという思いは、苦しんでいる側からするとないわけではないのですが、これが覚りだというように気がついた人の自覚内容は、「ずっと迷っているのだな」と気がつくということなのでしょう。だから、無理をしたりしなくなるのでしょう。

■迷いの自覚とは気づかされて歩んでいくこと

もう一回やり直すということを繰り返さざるをえないのは、迷っている証拠なのです。そこが難しいところで、「悟後の修行」という言葉が禅のほうにあるのです。悟ったから終わりということはないと。悟ったところにまだ修行がある。修行ということは、生きている事実には、乗り越えなければならぬ課題が常に与えられてくるということです。

ですから、迷いの自覚ということは、単なる過程ではなくて、気がつかされて歩んでいくということです。だから不思議です。「菩提」は「道」とも翻訳する。道というのは、言うならば過程です。それが同時に覚りという意味をもつ。だから、覚って終わりというのではなくて、覚りから始まる。他力の信心の場合も、信心から始まる。信心で終わるのではない。そういうことが、曾我先生が言われた「仏教には入門はあるけれど、卒業はないのだ」ということだと思ふのです。卒業はないというのは、どういうことだと。迷っている側からすると意味がわかりませんが、信心に触れてみると、本願力のはたらきをいただくことと、我々が煩惱の生活をしていくこととは、矛盾しながら重なっている。歩んでいくというと、過程みたいですけど、念々に出遇いつつ生きていくということなのです。出遇った、それでお終いではない。出遇ったところから出発して、出遇いつつ生きていく。そういうあり方を、智慧という言葉で教えてくださるのだらうと思ふのです。信心の智慧という言葉で。

それは、「智慧、大海のごとし」。つまり、如来の智慧が開く世界は大海のごとくである。如来の智慧、これは我々が尋ねようとしても、我々の分限からは尋ねることができないほど大きな智慧であると。大悲が智慧という意味をもつ。つまり、光は智慧の相だと言われている、阿弥陀の光は尽十方無碍光、あらゆる世界を無碍に照らすのだと。「廣大無辺際」とも言われますけれど、そういう世界を如来の智慧はもっていると言うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

親鸞仏教センターの動き

(2018年2月～2018年4月) 一抄出

■2018年

- 2/8 第13回研究員と読む公開講座「永遠のいのちから広がる浄土—『法華経』を読む—」担当：戸次研究員
①2/8 ②2/15 ③2/22 ④3/1
- 2/9 ご命日のつどい
- 2/9 第109回(通算第160回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 2/20 第209回英訳『教行信証』研究会
- 2/21 第9回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 2/26 第185回清沢満之研究会
- 2/27 第22回「『教行信証』と善導」研究会「『愚禿鈔』における『観経疏』三心釈の推究」大谷大学講師：藤元雅文氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 3/9 ご命日のつどい
- 3/9 第110回(通算第161回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 3/12 第210回英訳『教行信証』研究会
- 3/13 第186回清沢満之研究会
- 3/15 第10回「三宝としてのサンガ論」研究会「仏教サンガとはなにか」花園大学文学部教授：佐々木閑氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 3/26 第23回「『教行信証』と善導」研究会
- 3/27 第4回清沢満之研究交流会(精神主義とその時代)〈研究発表〉「哲学者・清沢満之と『精神主義』という経験——近年の研究動向をふまえて」真宗大谷派教学研究所研究員：名和達宣氏、「高山樗牛・姉崎正治の〈憧憬〉と宗教意識——清沢満之『精神主義』との比較を通じて」国立国会図書館司書：長尾宗典氏、「明治宗教哲学における「立脚地」探求の諸相——清沢満之、綱島梁川、西田幾多郎」日独文化研究所事務局長：水野友晴氏、〈コメンテーター〉大谷大学文学部教授：福島栄寿氏、〈司会〉親鸞仏教センター研究員：長谷川琢哉(文京区・求道会館)
- 4/3 第1回(通算49回)『尊号真像銘文』研究会
- 4/4 第6回「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト全体会
- 4/13 ご命日のつどい
- 4/16 第11回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 4/20 第211回英訳『教行信証』研究会
- 4/23 第187回清沢満之研究会
- 4/24 第24回「『教行信証』と善導」研究会
- 4/25 第15回親鸞仏教センターのつどい〈記念講演〉「イスラームは、なぜ誤解されるのか？」同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授：内藤正典氏、「他宗教との対話の方向性」親鸞仏教センター所長：本多弘之(千代田区・学士会館)

掲載論文

- 3月 『井上円了センター年報』vol.26
長谷川研究員「井上円了における『仏教』・『宗教』・『道徳』・『哲学』—明治中期の道徳教育をめぐる論争を背景として—」
『宗教哲学研究』第35号
長谷川研究員「〈書評〉高田信良『宗教としての仏教』」

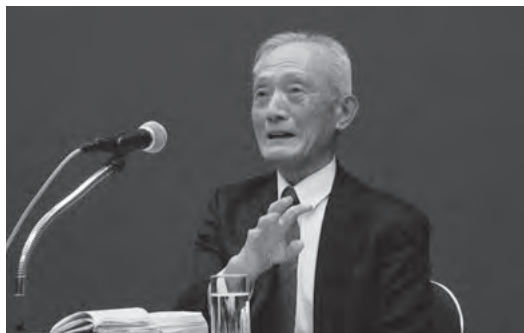
親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④5

人間に死ぬということ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第111回と112回がビジョンセンター東京（八重洲南口）で行われ、111回では「横に五悪趣を截り」等について、112回では「銭財を憂う」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第109回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

■人間に死んで本願力に甦る

私は本当にびっくりする言葉に出遇ったのですが、それは安田理深先生が亡くなる前に、福井のほうで、門徒で熱心な農家の家とかで講義をしておられたのですが、その時に語っておられる言葉の中に、浄土の功德に遇うということは、それは死んでから遇うのではないのだと。凡夫であるところに、浄土の功德に遇えるのだと。だから、親鸞聖人は、『入出二門偈』で、「凡愚遇うて空しく過ぐる者なし」（『真宗聖典』461頁、東本願寺出版）と、凡愚が不慮作住持功德に遇うのだと書いておられる。本願力に遇うことができるということが、人間の最後なのだ。そういう意味を与えられるのだと。浄土に生まれるということは、人間が死ぬことである。浄土に生まれることによって新しい命が与えられる。それはどこで起こるかということ、「信の一念」である。信の一念において、人間に死ぬ。そして阿弥陀の力に甦るのだと。こういうことを安田先生はおっしゃっているのです。それが『無量寿経』が語ろうとする往生なのだ。

往生するということは死ぬことだと、一旦はそう言いながら、死ぬことというのは人間に死ぬことだと。そして本願力に甦る。本願力に遇うということは、人間の終わりなのだ。これが本当にいただけるということが、信心を得ることなのだ。

なるほどなあと。人間に死ぬことなのだ。人間に諦めがつかないで我々はうろうろしている。諦めがつかないものだから本願力に帰することができない。人間の努力で何とかできるのではないかと、いつまでも思い続ける。そうすると、死んでからでしか往けないということになるわけです。死んでからでしか往けないと考えてしまうのは、本願力を信じてない証拠なのだ。自力で往生できることもある。でも自力で往生できるのは、方便化身土である。自力が残っているのは死んだことにならない。だから、身が死んだ時に、初めて方便化身土に往ける。

そういう往生が本願の目的ではない。本願が目的とするのは、凡夫である。凡夫に浄土の功德を与えたい。そういうことが『無量寿経』が語ろうとする「南無阿弥陀仏」なのだ。それに出遇ったのが親鸞聖人である。こういうふうに語ってくださっているのです。すごい講義だと思います。なかなかそこまで読み込むことは容易なことではない。

■南無阿弥陀仏で人間の終わりに出遇う

あたかも金銀財宝があるが如き場所が浄土ですよ。浄土を莊嚴するというのは、そういう形で、この世に似せて語るわけです。しかし、この世の

ようにあるわけではない。でも、その限界を凡夫はよくわからない。この世のようにあるのだと思って欲望につかれて往けるかと思う。金銀財宝が山のようにありますよと。ああ、そうか、そういう場所かと、単純にそう思って浄土に往きたいと思っても、浄土に往きたい心が欲ですから、単なる欲では往けないと言われてしまうわけです。本当の純粋な清浄な意欲に触れて初めて往くことができる。凡夫のままでは浄土には触れられない。だから安田先生が言うように、人間の最後だと。人間の最後に触れて、人間に死んで、初めて生まれることができるのが浄土だと。でも、人間に死ぬということは、凡夫に死ぬということなのだ。凡夫の終わりが信の一念だと。だから本願力に触れた途端に人間の意味が変えられる。そういうことに出遇うのが「南無阿弥陀仏」なのだ。南無阿弥陀仏で人間の終わりに出遇う。こういうふうにいただくわけです。だからどれだけ煩惱があろうと、その煩惱をさまたげとしない。その煩惱に死ぬのだと。そういうことが起こるのが南無阿弥陀仏なのだ。

他方仏土の菩薩、他方国土の衆生であっても、我が光があたったならば、どのような衆生であろうとも我が力を与えようと。こういう誓いが四十八願の中に繰り返して出てくるわけです。そういう形で、浄土に生まれたらいただける功德と置いていたら、何のことはない。穢土に居ても浄土の功德が来る。浄土の功德に触れる、阿弥陀の大悲の光に触れるのだと。我々がどれだけ暗い心でいようと、心が晴れるのだと。自分は力足らない、体力も足らない、だからだめだというふうを考えて落ち込んでいる人間に、「そうではないのだよ」と。どれだけお前に力が足りなくてもわしが助けてやるのだと。こういう大悲が来る。「南無阿弥陀仏」といただくところに、大きなはたらきを感じられて、このままで人生を尽くしていけるのだと、無駄なものはないのだと、そういう眼が開けるのだと言うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

親鸞仏教センターの動き

(2018年5月～2018年7月) 一抄出

■2018年

- 5/7 第2回(通算50回)『尊号真像銘文』研究会
- 5/8 第212回英訳『教行信証』研究会
- 5/11 ご命日のつどい
- 5/13 第10回東アジア文化交渉学会(香港城市大学):長谷川研究員発表「井上円了における〈西洋〉および〈東洋〉哲学の受容とその展開」
- 5/14 第111回(通算第162回)連続講座「親鸞思想の解明」(中央区・ビジョンセンター東京)
- 5/15 第18回研究交流サロン「『オリエンタリズム』再考」日仏東洋学会代表幹事:彌永信美氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 5/21 第25回「『教行信証』と善導」研究会
- 5/22 第12回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 5/28 第188回清沢満之研究会
- 6/1 第19回研究交流サロン「『宗教』概念を考える—近代日本における『宗教』としての仏教の生成—」東北大学大学院国際文化研究科准教授:オリオン・クラウハウ氏、立命館大学非常勤講師:大平浩史氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 6/4 第3回(通算51回)『尊号真像銘文』研究会
- 6/8 ご命日のつどい
- 6/12 第14回新潟親鸞学会(新潟市・長徳寺):長谷川研究員発表「井上円了の『仏教』概念の構築—19世紀の思想的状況を背景として—」
- 6/13 親鸞仏教センター臘扇忌・鸞音忌法要
- 6/14 第7回「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト全体会議
- 6/15 第189回清沢満之研究会「『他力門哲学骸骨試稿』に学ぶ—研究の方向性—」大谷大学短期大学部専任講師:西本祐攝氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 6/18 第112回(通算第163回)連続講座「親鸞思想の解明」(中央区・ビジョンセンター東京)
- 6/20 第59回現代と親鸞の研究会「親鸞思想に立脚した憲法的刑法学を求めて—本願法学への歩みと現在—」名古屋大学名誉教授・中京大学名誉教授:平川宗信氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 6/25 第13回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 6/26 第213回英訳『教行信証』研究会
- 6/29 第26回「『教行信証』と善導」研究会
- 7/1 第25回真宗大谷派教学大会(大谷大学):青柳研究員発表「親鸞と他者—『諸仏』を鍵語として—」、戸次研究員発表「仏道における『事』の探究—中国における戒律受容の一側面—」、中村研究員発表「『一向他力』の主張とその波紋—證空・良遍とその系譜に着目して—」
- 7/17 第214回英訳『教行信証』研究会
- 7/20 ご命日のつどい
- 第14回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 7/23 第113回(通算第164回)連続講座「親鸞思想の解明」(中央区・ビジョンセンター東京)
- 7/24 第4回(通算52回)『尊号真像銘文』研究会
- 7/27 第190回清沢満之研究会
- 7/30 第27回「『教行信証』と善導」研究会

掲載論文

- 5月 『近代仏教』第25号
長谷川研究員「真理と機—仏教因果説論争から見る清沢満之の思想と信仰—」
- 6月 『佛教史學研究』第60巻 第1号
長谷川研究員「『書評』山本伸裕・碧海寿広編『清沢満之と近代日本』」

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④6

一念の事実

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第113回と114回がビジョンセンター東京（八重洲南口）で、115回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第111回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

徹底して真実信心に立つ

『無量寿経』に「必ず超絶して去ること得て、安養国に往生せよ。横に五悪趣を截りて、悪趣自然に閉じん」（『真宗聖典』57頁、東本願寺出版、以下『聖典』）とあります。親鸞はこれを正信偈で「獲信見敬大慶喜 即横超截五悪趣」（『聖典』205頁）とおっしゃるのです。獲得信心が成り立つなら大慶喜が与えられる。大慶喜が与えられるということは、実は、横さまに五悪趣を截るのだと。

「大慶喜」と親鸞聖人がおっしゃっていることは、死ななければ慶喜できないという話ではないはずです。「化身土巻」で、念仏しているのだけれど自力だという問題を親鸞聖人は第二十願で読み込まれるわけですが、その雑心なる自力の念仏には大慶喜がないと押さえるのです。本願を信じたとするけれど、何かもやもやして一向にたすかっていない。死んでからたすかるという話をしているから、生きている間はもやもやしていいのだと逃げているわけです。それを親鸞聖人は徹底して真実信心に立つとおっしゃるわけです。

安養国に往生して横さまに五悪趣を截ることが成り立つのは、信心という事実において成り立つのだと。真実信心に立つということは容易なことではない。しかし、親鸞聖人は真実信心に立って、そして本願念仏を仏教の極意だとおっしゃって生き抜かれたわけです。だから親鸞聖人の教えに触れようとするなら、やはりそういう親鸞聖人が為した大切な課題にどこかで我々自身も触れていきたいということがないといけないと思うのです。

前念命終後念即生

我々は相変わらずの凡夫です。にもかかわらず流転輪廻の命を截るのだと。本願力が截るので自分で截るのではない。我々は、自分で超えたり、自分で截ったりしなければいけないと思っている。それを親鸞聖人は豎形の発想だと言うわけです。自力の発想だと。本願他力を信ずるということは、横に截られることをいただくのだと。横に截られるということは、凡夫であることを止める必要はない。凡夫の生活のままに大悲の本願の光の中にあることを信ずる。矛盾しないわけですよ、凡夫の命と。

凡夫の命でありながら、五悪趣を截るとはどういうことだろうと考えたらさっぱりわからない。そういう構造をどういうふうに表現したらよいかというときに、大変難しい問題が絡む。「前念命終 後念即生」という善導大師の言葉を、「本願を信受するは、前念命終なり。即得往生は、後念即生なり」（『聖典』430頁）と親鸞は言っているのです。それを曾我量深先生は、前念と後念というけれども、前念から後念へという念自身は一念

なのだと。二念ではない、一念の前後だと。それは、凡夫であることと光に^あ遇って五悪趣を横さまに載っていただくこととがどういう関係か言おうとすると、前念に死んで後念に生きる、妄念の自己に死んで本願の主体に生きるということは一念なのだと。前念命終後念即生が一念の事実の内容だと。「南無阿弥陀仏」の中に凡夫がそのまま往生するという事実を与えていただけるのだと。

■念々に妄念に死んで新しい命に甦る

凡夫の自我を依り処とする発想から、本願力を依り処とする、転換する。転換したら終わりではなくて、転換するという一念は常に一念なのです。往生という事実は、本願力によって成り立つ生の転換を、新しい生に生まれると表現したわけです。だから、それは念々に生まれているわけです。念々に生命が生きているが如くに、念々に妄念に死んで新しい命に^{よみがえ}甦るという事実がずっと続くわけです。そういうことが、親鸞聖人がいただいた、信の一念の内容としての「願生彼国、即得往生、住不退転」(『聖典』44頁)という本願成就文のいただき方ではないかと思うのです。

そこには自分というものはないわけです。自分があってやっているわけではない。生命体の血液のはたらき一つをとっても自我がやっているわけではない。生命が生きているということは、もうどんどんとにかく栄養を取り込みながら新しい自己になりつつ生きているわけでしょう。一時として止まらない。生命というものは、変わりつつ変わらない。どうしてそうなっているかと言ってみても、そういうものなのですから。こんな不思議なことは生命でしか成り立たない。それを譬喩^{ひゆ}に使えば、この自我の命に死んで本願力の命に甦ることが念々に起こることは何の矛盾もないわけです。新しい自己になりつつ生きていくわけです。なりつつと言うと、だんだんにというふうに、過程的プロセスではないかと考えてしまうけれど、そうではない。一念の事実の中に宗教的な事実をいただいて生きていくということなのです。

(文責：親鸞仏教センター)

親鸞仏教センターの動き

(2018年8月～2018年10月) 一抄出

■2018年

- 8/7 第5回(通算53回)『尊号真像銘文』研究会
- 8/10 ご命日のつどい
- 8/11 東アジア人文フォーラム(北京大学):長谷川研究員発表「井上円了における進化論哲学の受容」
- 8/20 第215回英訳『教行信証』研究会
第114回(通算第165回)連続講座「親鸞思想の解明」(中央区・ビジョンセンター東京)
- 8/21 第15回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 8/27 第191回清沢満之研究会
- 8/30 第28回「『教行信証』と善導」研究会
- 9/1、2 第69回日本印度学仏教学会(東洋大学):
青柳研究員発表「智昇と三階教」、中村研究員発表「證空の末法思想—『自筆鈔』／『他筆鈔』の相違に着目して」、長谷川研究員パネル発表「『大乘仏教』という言説形成—井上円了と19世紀のグローバルな宗教思潮」
- 9/8、9 第77回日本宗教学会(大谷大学):長谷川研究員パネル発表「井上円了における「哲学」概念の再考—「哲学宗」を中心にして—」、飯島研究員パネル発表「禅・華嚴と日本主義—市川白弦と紀平正美の比較分析を通して—」
- 9/13 第29回「『教行信証』と善導」研究会
- 9/14 ご命日のつどい
第16回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 9/19 第6回(通算54回)『尊号真像銘文』研究会
- 9/25 第216回英訳『教行信証』研究会
- 9/26 第192回清沢満之研究会
- 10/1 第115回(通算第166回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 10/12 ご命日のつどい
第8回「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト全体会
- 10/15 第30回「『教行信証』と善導」研究会
- 10/16 第60回現代と親鸞の研究会「21世紀の贈与論」立教大学客員教授:平川克美氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 10/17 第17回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 10/23 第193回清沢満之研究会
- 10/29 第217回英訳『教行信証』研究会
- 10/30 第7回(通算55回)『尊号真像銘文』研究会

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④7

別離久しく長し

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第116回から118回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第114回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

■「会い見ること期なし」

「ようようみょうみょう窃窃冥冥として別離久しく長し」（『真宗聖典』60頁、東本願寺出版）。「窃」というのは、かすかである。「冥」は暗いという意味です。光が入らないような状態で、ほとんど眼のはたらきが役に立たないような在り方。こういう字を重ねて、我々が過去のこと、未来のことを見通そうとするときに、ほとんどわからないのだと。そういう在り方の中で、「別離久しく長し」。人と人との間柄は、ちょっと現在だけ親しくしていたり、あるいは過去からずっと一緒に生きてきたというような感覚がある。そういう中で亡くなっていった場合、どこへ行っただかわからない。「道路同じからずしてあ会い見ること期なし」（同上）。一緒に生きているように見えるけれども、ちがう道を歩いている。だから、いつになったら会えるのか。「かた甚だ難し、あ甚だ難し。また相値うことを得んや」（同上）。たとえ会ったとしても、もう一度会うことはほとんどできないと。

■本当に生きた人に遇いたい

私もはこうして生きているけれど、生きてい

ることの意味、生きることの本当の喜びを求める。本当に自分で自分に納得できるようなものに出遇うとはどういうことなのかと。こういうときに、やはり我々が求めるのは、本当に生きた人がいたら、その人に遇いたいと。人間は、本当に生きることを教えてくれる生きざまをする人を求めているのだと思うのです。

そうした不思議な思いを私も青年期にもって、本当にそういう人がいるのだろうかと求めてみたけれども、それが見えない。本当に生きるということを生きている人が見えない。そういう思いがあって、結局、仏陀というような理想像がもしあって、それを本当に求めて生きている人がいるならという思いで京都へ行ったのです。今ごろになって、ああ、そういう要求があって行ったのかと思うのですけれども。

そうして出遇うことができた。出遇うことができたその人は、実は、本当に仏道を求めて生きた人を求めた人であった。その人がまた先に求めた人をモデルとして生きようとして、それがまた次々に人を呼び寄せて、人を生み出してくる。

それは結局、人を求めるように見えるけれど、人ではなくて、人を生かしている真理性、「ダルマ」と言われる法があって、その法を求めて、法を生きようとする。つまり、本当の命を与えてくれるものを求める。そういうことが人間として生きるということには常に与えられているのかなと思うのです。人間を超えたものがあって、それを信ずる。

けれども、実際は、例えばキリスト教であれば、イエスという人が現れて、教学ができるけれども、

そのイエス像を求める。そういうことが生きたキリスト教を常に新しく新しく生かしている。仏教であれば、お釈迦さまが苦悩して求めた、その姿を求める。お釈迦さま自身が人に依るな、法を生きよと、こう遺言したと言われている。しかし法、ダルマを求めると言うけれど、ダルマそのものは、そのダルマと称される真理性を信じてそれを生きた人を通してはたらく。本当にこの窈窈冥冥として何も見えない命を生きているにもかかわらず、そういう命を共に生きている中に、真理を求めて歩んだ人が灯火のように現れる。あとから行く者は、そういう者との出遇いを深く求めて歩んで行く。こういうことが説得力をもって教えとなり経典ともなり、そして新しく人を生みだしてくるのではないかと思うのです。

■「何ぞ衆事を棄てざらん」

ですから、「何ぞ衆事を棄てざらん」(同上)と。人間がこの世を生きているときには、何を生きているかわからないけれど、とにかくその場で興味を引かれるものに夢中になってしまう。そういうことが「衆事」という言葉で言われてくるのでしょう。命が生きているということは、状況と共に生きていますから、その状況に埋没して状況によって動かされて生きてしまう。そういう在り方が「窈窈冥冥」という在り方になっているわけです。結局、何を生きてきたのかわからない。これから先もどうなっていくのかわからない。そういう在り方に対して、なぜそういう在り方を脱出しようと思わないのかと、こういう呼びかけです。

『無量寿経』のこのいわゆる「三毒段」に入ってから文章は、この世の在り方、人間が迷い苦しみ、そして苦悩の命を増幅していくことを描いているけれども、その中に何か求めざるを得ないのだということを教えようとしている。こういうことがうかがわれます。

(文責：親鸞仏教センター)

親鸞仏教センターの動き

(2018年11月～2019年1月) 一抄出

■2018年

- 11/2 龍谷大学アジア仏教文化研究センター2018年度国際ワークショップ「日本仏教と西洋/世界の19世紀」(京都市・龍谷大学):長谷川研究員発表「受容と抵抗—井上円了と欧米の東洋学・仏教学—」
- 11/6 第116回(通算第167回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 11/9 ご命日のつどい
- 11/12 第194回清沢満之研究会
- 11/16 第8回(通算56回)『尊号真像銘文』研究会
- 11/19 第18回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 11/20 第218回英訳『教行信証』研究会「『教行信証』「証巻」における法身の「意志」問題——鈴木大拙の解釈を中心に——」早稲田大学大学院非常勤講師・大正大学非常勤講師:ステファン P. グレイス氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 11/27 御正忌報恩講讃仰講演会(しんらん交流館)講師:本多所長
- 11/30 第31回「『教行信証』と善導」研究会・第9回(通算57回)『尊号真像銘文』研究会(合同開催)「鎌倉仏家の注釈活動—親鸞遺文を通して—」東京女子大学名誉教授:金子彰氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 12/3 第219回英訳『教行信証』研究会
- 12/4 第19回「三宝としてのサンガ論」研究会
第117回(通算第168回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 12/6 第14回研究員と学ぶ公開講座「仏法が伝承される歴史空間—第一結集と『大智度論』—」担当:戸次研究員①12/6②12/13③12/20④12/27
- 12/8 井上円了研究センター第1回合宿研究会(熱海市・東洋大学熱海研究センター):長谷川研究員発表「井上円了と清沢満之における欧米の仏教学・東洋学の受容」
- 12/14 ご命日のつどい・親鸞仏教センター報恩講
- 12/16 吉田久一基金研究プロジェクト「仏教思想を中心とした日本近代思想史の再考」第7回研究会(京都市・日独文化研究所):長谷川研究員発表「『大乗』仏教の哲学的再構築—近代仏教における井上円了の位置づけ—」
- 12/17 第32回「『教行信証』と善導」研究会
- 12/18 第195回清沢満之研究会
- 12/25 第10回『尊号真像銘文』研究会
- 12/26 山陽教区聖教学習会(姫路船場別院)講師:戸次研究員

■2019年

- 1/9 第118回(通算第169回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 1/10 第14回研究員と学ぶ公開講座「教育者としての井上円了・清沢満之」担当:長谷川研究員①1/10②1/17③1/24④1/31
- 1/11 ご命日のつどい
近現代『教行信証』研究検証プロジェクト「真宗学の〈解釈と方法〉をめぐる課題」龍谷大学教授:杉岡孝紀氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 1/21 第33回「『教行信証』と善導」研究会
- 1/22 第20回「三宝としてのサンガ論」研究会「ジャイナ教の信仰と生活」東京大学大学院助教:河崎豊氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 1/23 第220回英訳『教行信証』研究会
- 1/28 第11回『尊号真像銘文』研究会
- 1/29 第196回清沢満之研究会

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④⑧

願生、即ち得生

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第119回と120回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第117回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

■一念に「断」が成り立つ

「それ心を至して安楽国に生まれんと願ずることある者は智慧明達し功德殊勝なることを得べし」（『真宗聖典』63頁、東本願寺出版、以下『聖典』）。この『無量寿経』の言葉を親鸞聖人は『教行信証』の「信巻」に引用しておられます。それは『聖典』では245頁の「真仏弟子」のご自釈の後です。これはどういう文脈かと言いますと、239頁を見ていただきますと、後ろから5行目、「諸有衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心回向したまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得、不退転に住せん」。これは本願成就の文です。ここに信の一念ということが出てくるわけですが、このすぐ前のご自釈で、「一念」は、これ信楽開發の時剋の極促を顕し、廣大難思の慶心を彰すなり」と。信楽が開發されるときの時剋、これは極促だと。つまり念々の今だと。今が今に連続するような今、これは次の時を待たない。過去と未来を包んだ今。この今、我々が出遇っているこの今の会座なり、この今の時に利益を得る。「廣大難思の慶心」、出遇った無上功德の喜びを、今、味わう。こういうことが押さえられています。

その一念の内容が展開されてきて、「横超断四

流」と言われてくる。我々の流転の命、過去が現在に來たり、現在が未來に行くというふうに感じられる現在は、流転の現在。それを断つと。自分で断つのではない、横ざまに断たれる。本願力によって断たれると。『聖典』の243頁のご自釈ですが、「一念須臾の頃に速やかに疾く無上正真道を超証す、かるがゆえに「横超」と曰うなり」と。「一念須臾」、今です。横ざまに來たるものに出遇う。光に遇うということを経験する人は強く一念というところに押さえようとなさる。そこに、横超、超証と、超えると繰り返されるわけです。我々が自分で自分を越えた世界、有限の世界から無限の世界へ超越するのでない。横超の本願力である。その横超のはたらきを信ずるなら、そこに願成就の一念が成り立つ。そのことが五惡趣を截る、六道流転を超える。

我々はいつまでも流転の中にいるのではないか、だから生きているうちは駄目だ、死んでからしか行けないのではないか、などと考える浄土教もあるわけです。そういう浄土教は親鸞の浄土教ではない。それが、244頁の2行目のご自釈、「断」と言うのは、往相の一心を發起するがゆえに、生として当に受くべき生なし。趣としてまた到るべき趣なし。すでに六趣・四生、因亡じ果滅す。かるがゆえにすなわち頃に三有の生死を断絶す。「断」と言えるのは、それまでの苦悩の人生、流転の人生、闇の人生が完全に断たれるという事件が起こる、本願力との出遇いなのだ。それが往相の一心である。一心に一念、本当の今が与えられることがあるなら、そこに断が成り立つのだと。本願力のはたらきを信ずることにおいて完全に生死が超えられる。こういうすごいことをおっしゃるわけです。

■生死と涅槃との分水嶺に立つ

行にたまわった信心は無上功德だと。無上功德の内実とは、今、迷いの人生がここで超えられるのだと。名号に遇って闇が破られて願が満たされる、こう信ずる。そういうことにおいて成り立つものが真仏弟子である。そのご自釈で、「この信・行に由^よって、必ず大涅槃を超証すべきがゆえに、「真仏弟子」と曰う」（『聖典』245頁）と。大涅槃を超証する。この超証は横超です。横超の超越をいただくことが真仏弟子なのだと。

そのことにおいて、「それ至心ありて安樂国に生まれんと願ずれば、智慧明らかに達し、功德殊勝を得べし」（同上）と、先ほどの『無量寿経』の言葉を引用される。願生すればそういう功德が起こるのだと。この願生は、先ほどの本願成就文の「願生彼国 即得往生 住不退転」の願生です。願生は即ち得生、「願生彼国 即得往生」という事実に出遇う。出遇わしめる原理が至心回向です。至心回向を受けるなら、「願生得生 住不退転」。住不退転という利益が願生者に与えられる。この至心回向は如来のお心だと。如来の至心が「南無阿弥陀仏」として呼びかけてくださっているのだと。「我が名を称えよ、我が名を念ぜよ」と。そういうふうにして我々を包んで止まない大悲の願心に触れるという事実、それが信の一念に立つ^{くわい}ということだと。願生すれば得生する。願生の位と得生の位は時が別ではありませんから、それが一念の内容です。それは「前念命終^{みょうじゅう} 後念即生^{そくしょう}」、前の念に死んで後の念に生まれかわる。常に今、念々に南無阿弥陀仏と共に流転の命が本願の命によみがえる。そういう事実を我々は生きていく。信の一念に過去と未来を包む。そういうように本願と値遇^{ちぐう}する。

信の一念をいただくということは、本願力に出遇うことにおいて横超断四流、つまり迷いの命が断たれるような、生死と涅槃^{ふんすいれい}との分水嶺に立つことができるのだと。自分で立つわけではない。横超の本願力によって分水嶺に立つことが成り立つと言うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

親鸞仏教センターの動き

（2019年2月～2019年4月）一抄一

■2019年

- 2 / 1 第119回（通算第170回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 2 / 7 第14回研究員と学ぶ公開講座「親鸞が語る曇鸞—『高僧和讃』を中心に—」担当：青柳研究員 ①2 / 7 ②2 / 14 ③2 / 21 ④2 / 28
- 2 / 8 ご命日のつどい
第21回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 2 / 14 第197回清沢満之研究会
- 2 / 15 第34回「『教行信証』と善導」研究会
- 2 / 16 日仏東洋学会シンポジウム（日仏会館）：〈司会〉飯島研究員
- 2 / 21 第12回『尊号真像銘文』研究会
山陽教区聖教学習会（姫路船場別院）：〈講師〉戸次研究員
- 2 / 22 第221回英訳『教行信証』研究会
- 2 / 25 第9回近現代『教行信証』研究検証プロジェクト全体会
- 3 / 1 第120回（通算第171回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3 / 4 第5回清沢満之研究交流会 共通テーマ「井上円了と清沢満之」〈副題〉「仏教の近代化と「哲学」」親鸞仏教センター研究員：長谷川琢哉、「宗教と信の問題を焦点として」國學院大学研究開発推進機構准教授：星野靖二氏、「絶対・相対の関係と『大乘起信論』」専修大学ネットワーク情報学部特任教授：佐藤厚氏、〈コメンテーター〉天理大学人間学部教授：岡田正彦氏、〈司会〉真宗大谷派教学研究員：名和達宣氏（文京区・求道会館）
- 3 / 7 第222回英訳『教行信証』研究会
- 3 / 8 ご命日のつどい
第22回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 3 / 13 第13回『尊号真像銘文』研究会
- 3 / 14 第198回清沢満之研究会
- 3 / 15 第61回現代と親鸞の研究会「トマス・アクィナスにおける信仰と哲学—善・愛・恩寵を視点として—」東京大学大学院総合文化研究科准教授：山本芳久氏（文京区・親鸞仏教センター）
- 3 / 25 第35回「『教行信証』と善導」研究会
- 4 / 9 第223回英訳『教行信証』研究会
- 4 / 12 ご命日のつどい
- 4 / 16 第16回親鸞仏教センターのつどい〈記念講演〉「往生のその先について」東洋大学学長：竹村牧男氏、「願生心と菩薩道」親鸞仏教センター所長：本多弘之（千代田区・学士会館）
- 4 / 22 第14回『尊号真像銘文』研究会
- 4 / 23 第23回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 4 / 26 第10回近現代『教行信証』研究検証プロジェクト全体会

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの

—『大無量寿経』を読む— ④9

今、仏に値う

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第121回と122回は東京国際フォーラム（有楽町）、123回はビジョンセンター東京八重洲南口で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第118回から一部を紹介する。

（囑託研究員 越部良一）

■無量寿仏の声を聞く

「今仏に値うことを得て、また無量寿仏の声を聞きて歓喜せざるものなし」（『真宗聖典』〔東本願寺出版、以下『聖典』〕64頁）。「今」、今と、このあたりでは繰り返されますね。今、仏に値う。仏に値遇する。見仏とも言うのですけれど、ここでは「値仏」と。仏にまみえる。弥勒菩薩が今ここで対告衆を代表して仏に教えを聞いているわけですが、仏に値うというのは釈迦如来の教えに値うということ。その釈迦如来の教えは無量寿仏の声を聞かせるための教えである。無量寿仏の声を「みな」とルビを振っています。無量寿仏の御名を聞く。聞くというのは、これは第十八願成就の文の「聞其名号」（『聖典』44頁）の「聞」を示しているわけです。「無量寿仏」というのは、「南無阿弥陀仏」で、「南無阿弥陀仏」という御名には、声がある。声なき声が御名である。

親鸞聖人は、この『大無量寿経』は真実教だと押さえられて、真実教の体は名号だと。そして名号は本願を説き、法蔵菩薩の本願を開いてゆくという形で、名号がどういう意味をもって衆生に願をかけているのかが教えられてくる。そういうことが、この經典のもっている大事な二本柱、宗体と言うのですけれど、宗と体です。体は名号である、宗は本願を説くことだと。こういうふうに見えるわけですが、ここでは、仏に値うことは仏の教えに値うわけですが、仏の教えに値うということは無量寿仏の声を聞くのだと。

そして、「歓喜せざるものなし」。十八願成就文の「信心歓喜」（『聖典』44頁）です。もし、聞くことができるなら、「聞其名号」が成り立つならば、



信心歓喜であると。本願成就の文では、本願はどこに成就するかと言ったら、「其有衆生」、「それ衆生ありて」（同上）と。この衆生は凡夫です。その凡夫が名号を聞くことができるならば、信心歓喜する。こう本願成就の文が語っている。

■本願成就とは「聞其名号」、信心成就

本願が成就したとは何のことだろうと、なかなか意味が分からないのです。それはやはり『無量寿経』の教えを聞いてきた、聞き当ててきた歴史があって、その歴史に出遇ったのが親鸞という人です。親鸞聖人は「聞其名号」ということ、ここに本願成就の意味があると。それは信心が成就するということだと。「本願信心の願成就」（『聖典』228頁）と、こういうふうにおっしゃる。願が成就したということは、我々に信心が与えられたということだと。我々に信心が起こるのは本願が成就したのだ、如来の大悲の本願が成就してくださったのだと。こういう意味をもって我々に本願を信ずるという体験が起こる。自分で信ずるわけではない。自分に信ぜずにおられないという心が立ち上がって来るのは、如来の本願が成就するのだと。こういうのが、親鸞聖人の了解の仕方です。

「無量寿仏の声を聞きて歓喜せざるものなし。心開明することを得つ」（『聖典』64頁）。今ここでは弥勒菩薩が、衆生を代表して、我が心が開かれて明るくなることができたのだと言っているわけです。この人生は暗い業の歴史、悪業の歴史の因縁で苦悩の人生しかない、そういう絶望状況のように見える中に明るみが見えたということが教えられてくる。

松原祐善という大谷大学の学長もなさった方が、この「今得値仏 復聞無量寿仏声」、この言葉を揮毫しておられたことがありました。松原先生はなぜ『無量寿経』のこの言葉を書かれるのかなと、その文字を読んだとき、私は何かちょっと不思議な思いがしました。実は、ここで今、申しましたように、この「今得値仏」の仏は教主世尊で、そして「また無量寿仏の声を聞きて」、これは本願成就を表している。そう気づいて見ますと、松原先生の書かれた文字の意味が、「ああ、そうだったのか」といただける、松原先生と改めて出遇ったような、大変嬉しい思いがしたことです。

（文責：親鸞仏教センター）

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの

—『大無量寿経』を読む— ⑤⑩

冥衆—見えざる存在の支え

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第124回がビジョンセンター東京八重洲南口で、第125回と第126回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第122回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

親鸞聖人は、真実信心には「冥衆護持の益」があるとおっしゃる。冥衆、それは見えない存在。我々は感覚器官で感じとれる内容を存在だと。特に現代はそういうふうになっておりますけれど、感じたり見えたりしない存在も存在としてあるのだと。言葉としては例えば神、神と言っても、いわゆるヨーロッパの神ではなくて、日本にあるような神々です。そういうものはこちらからは見えないけれども、向こうからは見ている存在として何か感じられる。亡くなっていった身近な人たちも又そうした存在です。その亡くなっていった見えざる存在がどこかで感じられる。そういう見えざる存在を冥衆という言葉で言おうとするわけです。

現代ではもう生きている時だけが勝負だという感覚で、冥衆はあまり力をもたなくなっているかもしれませんが、そういう冥衆を感じずということも、命の本質にはあるように思うのです。ある意味でそれは怖いのです。そういうものが何か祟るのではないかと、罰を下してくるのではないかと、日本人の宗教観というのは、そういう冥衆の祟りを畏れて祀ってみたい、そういうことがあったわけです。

そういうものにおびえているのではなくて、むしろ冥衆に護ってもらって、こちらを見ている存



在に、どうぞ許して欲しいと言える存在として我々が立ち直ることが、親鸞が教えようとした冥衆護持の利益なのです。だから否定してしまうのではなくて、あってもそれが自分にとっては護ってくれる存在として感じられるのだというように転じてゆくことが大事な智慧なのではないかと思うのです。そういう冥衆を否定したら、多分、人間の生きる在り方が薄っぺらになってしまうと思うのです。

ある先生が言っておられたのですが、その先生は古い村に住んでおられて、村の会議に出てみたら、その会議に出ている長老方は古くからそこに居るから、家の前の道はじいさんが作った道であつたり、裏山に生えている杉の木は曾じいさんが植えた杉であつたりというようなことで、自分が居るだけではなくて、先祖伝来、護られて生きている、そういう感覚が非常に強い。そうすると会議をするときに、単に個人で今自分はこう考えるというのではなくて、「やあ、そういうことはやっぱりじいさんが許さないぞ」と、そのようにものが発想されてくる。それが未来、次の世代に対しても今何をやっておくべきかという配慮にもなると。こういうことを言っておられて、面白いなと思ったことがあるのです。

現代の都市文明はそういう命の歴史の感覚がまったく抜けてしまって、そういうものをむしろ排除する面が強い社会になっていますけれども、現在だけが勝負なのではない。見えざる存在が現在を支えている。過去もあり、未来もあるという中に今があるのだから、我々も見えざる存在になった時に未来の人々に何が残せるかというような発想をすべきではないか。こういうことが人生を大事にさせるのではないかと思うのです。

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの

—『大無量寿経』を読む— ⑤

本当の依り処

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第126回から128回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々と間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第124回からその一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

「愛宝貪重^{とんじゆう}にして、心勞し身苦しくす。かくのごとくして竟^{おわ}りに至りて恃怙^{じこ}するところなし」（『真宗聖典』69頁、東本願寺出版）。「恃怙」というのは、「恃」も「怙」もたのむという字です。時間的にずっとたのむようなことではないものを、一応、依り処^{よりどころ}にする、たのみとする。その場合、本当にたのむということになってない。

依り処^{よりどころ}という、曇鸞大師が解釈の中で出しているのですけれども、いろんな罪を犯したりしているのを、我々の価値観ではたった一度の念仏ぐらいで消せるはずがないと。罪の深さが感じられれば感じられるほど、念仏を一回称えたら消えるなどとそのようなはずがないと思ってしまう。人間の妄念の中で、犯す罪の重さと念仏の重さとを比べて、称える念仏の重さではとても犯罪の重さにはかなわないと。こういう人間の考え方は、仏陀の覚りの智慧からすれば妄念でしかないような知恵を根拠に生きてしまっているから起きてくる。独善的に自分が正しいと思って生きてしまっている。そういう秤^{はかり}で計っているのが我々人間の人生の目盛りであると。

如来の大悲が本当に苦悩の衆生を救い取らんがために案じ出した、それが名号という方法である。この名号の方法を受け止めてそれを行ずるという場合には、依り処が変わるのだと。妄念の立場を



転じて、如来の大悲の智慧の立場を依り処にすることによって、重みがまったく変わる。こういう譬喩で曇鸞大師は教えておられます。

つまり依り処が変わるということが、価値の転換という意味をもたらすことになるのです。我々は妄念で愛着の心で、重いか軽いか、正しいとか間違っているとかと判断し続けてきているけれど、その延長上で念仏を考えるのは間違いなのだ。念仏の立場は如来大悲の立場だと。これを本当に受け止めるか受け止めないか、依り処に取るか取らないかという問題は、今度は人間の「信」の問題、信ずるという問題なのです。それなしに行じたのでは妄念でしかない。そういう意味で、本当の依り処という問題を人間はどこかでしっかりと考えなければならない。

蓮如上人のお書きになった御文^{おふみ}に「白骨の御文」と言われるものがありますが、人間の人生ははかない、百年ともたないのだと言われた後で、亡くなってしまうえば白骨になるのだぞと。だから後生^{ごしょう}の一大事をたのめと、こう言うのです。論理転換が激しいので、我々が拝読していても、どうしてそうなるのかがよく分からない説得の仕方なのですけれども、情念としてははかないのだぞと教えておいて、だから依り処をしっかりと立てなさいと言っているのです。それを「後生^{ごしょう}の一大事」と言うから、何か後生というのがあるのかなとか、現代の生活からすると何のためにそういうことを教えるのかがよく分からない。でも、あれは本当の依り処をしっかりと、はっきりとさせなさいということを言っているのです。そういうことを思うのです。

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの

—『大無量寿経』を読む— ⑤2

空しく過ぎるひとなし

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第129回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、当センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第126回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

「身独り空しく立ちてまた依るところなし」（『真宗聖典』72頁、東本願寺出版、以下『聖典』）。「空しく立ちて」というのは、周りに頼るべきものがないということ。天親菩薩の『浄土論』では「空過」、空しく過ぎるという言葉があります。この人生はどうやって見ても空しく過ぎるという面をもつ。だから空しく立つというのは、「ああ、この人生は一体なんだったのだろう」と、時には思われる。これが人生だったのだと領けるようなものが感じられない。

ところが、阿弥陀如来の大悲に^あ遇うということの意味を、親鸞聖人は空しく過ぐる者はないと言われる。つまり出遇ったことがもう十分意味を与えてくださっている。それは天親が不^ふ虚^こ作^{さく}住^{じゅう}持^じ功^{こう}徳^{とく}と名づけている浄土の功德です。我々は「空しく過ぎていくな」と自分の人生を感じたときに、「南無阿弥陀仏」というひと言で、「ああ、空しくなかった」と思えるか。そう教えが聞いているかというと、人前ではこのような偉そうなことを言っているけれど、自分自身は「ああ、空しく過ぎたな」と感じてしまう面もあるのです。しかし、「本願力にあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき」（『聖典』490頁）と和讃で親鸞聖人は語っているわけだから、「ああ、そうか、やはりそういう出遇いをしなければいけないのだな」と。



そういう出遇いをするということは、「現生に十種の^{やく}益」（『聖典』240頁）、利益^{りやく}を感じずることでもあり、「願生彼国、即得往生」（『聖典』44頁）、願生すれば即往生すると言える人生なのだ、そういう頂き方をするということなのです。必ず往生するぞと信ずるのではなくて、『無量寿経』で語っている往生するということは、浄土に生まれたら正定聚だと語っているわけですから、正定聚を現生で得るということ、浄土に生まれた功德を得るということです。そういう出遇いをしなければ、親鸞聖人が言うお言葉にふさわしいとは言えないわけです。それはなかなか大変なことなのです。それでも親鸞聖人は、やはり煩惱の身、無^む慚^{ざん}無^む愧^きの身であると、そう言うのです。それと何ら矛盾しないはずなのです。そのくらい阿弥陀の光が明るいことを実感しておられるわけです。

これが若い頃はほとんどわからなかったですね。この歳になってわかるかというと、相変わらず何だかちょっとわからないのですけれども、それでも親鸞聖人がおっしゃる本当の信念の内実というものに近づいてみたいという思いがあるものだから、この人生で満足成就したと言える、そういう思いが本当に与えられるのならば出遇ってみたいと思うのです。金子大榮先生はそれを言っておられました。自分の人生は完全燃焼の人生でしたと。あそこまではなかなか言えませんが、少なくとも親鸞聖人は、心は愚かである、そして光は十分に与えられてある、自分の煩惱からは見えないけれど、向こうは見てくださっていると信ずるのだと。願力に遇いぬれば空しく過ぐる者はないと頂かれたということは、こういうことなのです。不思議な言い方だと思うのです。

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの

—『大無量寿経』を読む— ⑤3

「無慚無愧」ということ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

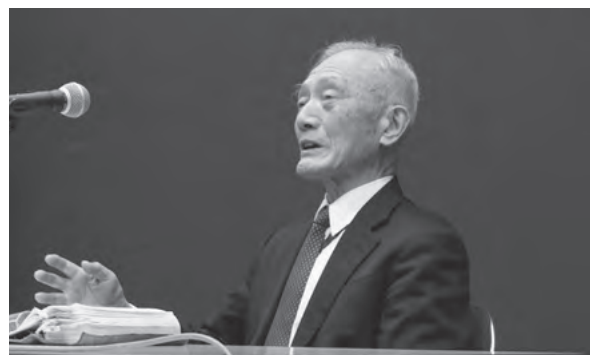
連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」のテーマのもと、東京国際フォーラム（有楽町）において、当センター所長・本多弘之が問題提起をし、参加者の方々と質疑応答が行われている。この3月～8月は、新型コロナウイルス感染症の拡大にともない、休講とさせていただいた。ここでは、先に行われた第128回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

『無量寿経』に「無義無礼」（『真宗聖典』73頁、東本願寺出版、以下『聖典』）という言葉があります。義なく礼なしと。親鸞の言葉で言えば、これは「無慚無愧」という言葉になるのではないかと思います。慚愧の心がない。

慚愧というのは、慚も愧も恥じるという心理を言い表す言葉なのですが、現代日本語で言う恥のように、人に見られて恥ずかしいというだけのことは違います。真実に照らして恥ずかしいという言葉が慚愧です。我々は人が見ていないからいいだろうということで、心が動いてしまう。しかし、存在の本当の在り方を求めていこうとする方向性をもった場合には、その存在の本当の在り方に対して自分が起こす心とか行為が恥ずかしいと感じられる。だから『教行信証』『信巻』の『涅槃経』からの引用では、「慚愧」について、「慚は人に羞ず、「愧」は天に羞ず。これを「慚愧」と名づく」（『聖典』257頁）と言われるのです。慚というのは人に羞じるわけだから、倫理にもとることが恥ずかしいと。愧の方は、やはり恥なのだけれども、道理に羞じる、あるいは教えに羞じる。同じ恥という心理だけれど、恥の質に二種類あるというのが、慚と愧という言葉に分かれてくるものなのです。

それを親鸞聖人は、「無慚無愧」とおっしゃる



わけです。慚愧がないということは、ですから単に倫理的な話ではなくて、存在の道理の方に向かって恥じるということが、本当にはないのではないか、というのが親鸞聖人のお言葉の本意だろうと思うのです。親鸞の言葉というものは、真理の方に向かって生きようという意欲があることがまず第一にあるわけです。親鸞自身はそれを自力の心ではない、自力の菩提心ではないと。どこかで真理の側から見られていて、真理の側から呼びかけられていて、真理が催してくるような心なのです。だからそれは如来回向の信心と言われるわけです。それはこの五濁悪世を生きている煩惱具足の凡夫の心の中に立ち上がっていく。

親鸞は和讃で、「無慚無愧のこの身にて まことのこころはなけれども 弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちたまう」（『聖典』509頁）と。つまり、如来の名号というものが大悲の表現として与えられていることを信ずる。念仏を真実の依りどころとして、大悲の本願を信じていくことが成り立つところに、どれだけ人間が凡夫であろうと、愚かであろうと、罪惡深重であろうと、それと矛盾せずに大悲を信ずることが成り立つ。大悲なのですから、どのような衆生であろうと必ず救い遂げるのだと。

無慚無愧ということは、それでいいのだというわけではない。無慚無愧という事実でしかないのです。これは他人ごとではない。けれども大悲をいただいていく。この五悪段を通して、これでもかというくらいに様々な悪の在り方の教えがあっても、何か人間は自己肯定をしたいし、自己弁護をしたいわけです。けれど、そうではないような公明正大な如来の御心の前に、お前の心は本当にそうなのかという確かめが与えられてくるのです。

涅槃、本当に生きることが できる場所に立つ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」を再開した（新型コロナウイルス感染症の流行により2020年3月～22年1月まで休講）。本講座は引き続き、「浄土を求めさせたもの一『大無量寿経』を読む」のテーマのもと、当センター所長・本多弘之が問題提起を行っていく。ここでは、この2月に再開された第130回（オンライン開催）から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

久しぶりにこうしてお話をさせていただく機会が与えられました。前回から随分と時間がたっておりますから、いままでにどういう話の展開があったのかを少し確認したいと思います。

『大無量寿経』のいわゆる三毒段に入る前に、「必ず超絶して去ることを得て、安養国に往生せよ。横に五悪趣を截りて、悪趣自然に閉じん」（東本願寺出版『真宗聖典』57頁〔以下、『聖典』〕）とあります。そのように言われているのにもかかわらず、その続きには、「然るに世人、薄俗にして共に不急の事を諍う」（『聖典』58頁）という形で三毒段に入っていくわけです。それは、この世の事はどれだけ人間が努力しようとも悪業が尽きない、そういう我々の限界性が三毒段、五悪段という形で徹底的に教えられているのです。そして、「窃窃冥冥として別離久しく長し。道路同じからずして会い見ること期なし」（『聖典』60頁）。人生を終えていく時には、一切と別れていってしまうのだと。そういう人生の在り方に対して、「修善を勤めて精進して度世を願え」（同上）と。「度世」というのは、この世を超える。この世に埋没する形で、「不急の事」、やらないでもいい事に一生懸命になってしまう。自分の与えられた人生、与えられている本当の意味もよくわからなくなってしまう。そういう事態にはたと気づいて、「不

急の事」を本当に超えていく方向を願えと。

そこから、「それ心を至して安楽国に生まれんと願ふことある者は智慧明達し功德殊勝なることを得べし」（『聖典』63頁）と。安楽国の問題がここでもう一度確認される。つまり、三毒・五悪段が説き出される前に願生の教えが言われ、そしてその真ん中にも願生の教えが言われる。本当に法蔵菩薩がご苦労くださって作り上げた安楽国というものは、実は、仏陀が求めて明らかにしようとする本来の静けさの世界である。これをニルヴァーナ、涅槃と言う。涅槃とは、一切衆生が平等に、本当にその静けさに生きることができるような、そういう在り方を言うのだと。親鸞聖人は、涅槃や一如などという本来の静けさの世界から願心が立ち上がったのだと、法蔵菩薩は一如宝海から立ち上がったのであると言われていています。そして、我々は浄土に生まれたいと願えという教えを受け止める時に、涅槃に帰れという願心を聞くのだと。涅槃に帰れということは、静けさに帰るといようなことでしかないのだけれど、それは本当に生きることができる場所に立つということなのだ親鸞聖人は明らかにしてくださっています。

その先に進むと、「今仏に値うことを得て、また無量寿仏の声を聞きて歡喜せざるものなし」（『聖典』64頁）とある。この教えは「今」という問題をもっているわけです。この世の苦悩に虐げられているだけではなくて、この世の苦悩の在り方を横さまに截る願力に随って、本当にこの世の命を生き直す。単にこの世の命に生きるのではなくて、この世の命を超えるようなはたらきに触れるのだと。そのことが見えないと、私たちは、この世の事にかかずらって命が尽きてしまう。そうした、まさに三毒五悪段をそのまま生きているような人間でしかないという問題があるわけです。

「胎生」という問題

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの一『大無量寿経』を読む」の第131回から133回が、親鸞仏教センターに於て、対面講義、及びオンライン配信のハイブリット形式で行われ、当センター所長・本多弘之が問題提起をし、質疑応答がなされた。ここでは、その第133回から一部を紹介する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一)

『真宗聖典』（東本願寺出版、以下『聖典』）の81頁に、「かの国の人民、胎生の者あり。汝また見るや、いなや」とあります。「かの国」、阿弥陀の浄土、その中に「胎生の者」がいます。直前には、弥勒段と呼ばれるところを結んで、阿難を呼び出して語り掛けるときに、宗教体験の光の世界というものをまず語っています。その世界にこちらから見えるものをいちいち確認した上で、その世界の中に救われたが如くにしてある存在のもっている問題が教えられる。すべてが平等で、すべてが光の世界の如くに見える中に胎生の者がいるということを指摘するわけです。「その胎生の者の処するところの宮殿、あるいは百由旬、あるいは五百由旬なり」（『聖典』81頁）。この箇所からしばらく、親鸞聖人は『教行信証』化身土の巻に引文されております。化身土の在り方として胎生ということが押さえられる。「おのおのその中にしてもろもろの快樂を受くこと、忉利天上のごとし」（同上）。その胎生の者がいる場所は、百由旬や五百由旬、そういう比較的大きな世界なのですけれども、その中である意味で喜びの中に浸り込んでいるような在り方です。

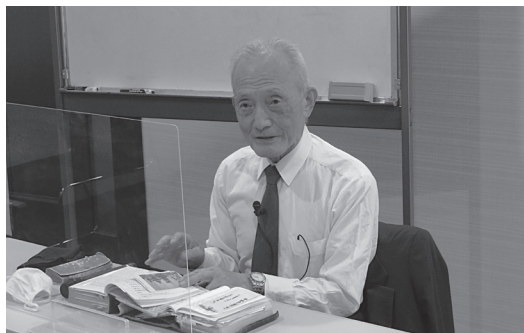
次に、「もし衆生ありて、疑惑の心をもってもろもろの功德を修して、かの国に生ぜんと願ぜん」（同上）。「疑惑の心」、如来の願力を本当に信ずるというよりも、それをどこかで疑惑している。そ

れは、「仏智・不思議智・不可称智・大乘広智・無等無倫最上勝智を了らずして、この諸智において疑惑して信ぜず。しかるに猶し罪福を信じ善本を修習してその国に生ぜんと願ぜん」（同上）。罪を恐れる心、あるいは幸福を求める心を、「罪福」を信じるのだと言われる。この世での善悪に関わる心で、善本を修習して、そして阿弥陀の国に生まれようとする。「このもろもろの衆生、かの宮殿に生まれて寿五百歳、常に仏を見たとまつらず。経法を聞かず。菩薩・声聞・聖衆を見ず。このゆえにかの国土においてこれを胎生と謂う」（同上）。本願成就の仏土の中に、光の世界ばかりがあるが如くに見えるけれど、その中に胎生という在り方があって、親鸞聖人はそれを方便化身土だと。浄土と言うけれど、浄土に真実報土と方便化身土という名前の違う浄土がある。本当に真実の報土に生まれることができるということは、仏力に対する、仏智に対する信心というものが衆生に与えられてこそである。衆生において本願力を信ずるということがあって、真実の報土が信心に報いる世界として与えられる。けれども、どこかにちょっとでも疑問、疑惑が残っている場合には胎生なのだよと。それは仏を本当に見ることにはならない。こういう厳しい指摘が出されてくるわけです。

その本質は、やはり本願力に対する疑いがある、自分に対する、自力に対する執着が抜けない。そういう自分が残っている限り、我々は凡夫ですから、凡夫として自分が残るのですけど、凡夫である限りにおいて、真実に本願力に依ることが、つまり信の一念に立つということができない。何かどこかで本願を利用して自分が助かるのだと思っている場合の助かり方というのが、方便化身土として教えられてくる。こういうことだと思います。

究極的関心

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第134回から137回が、親鸞仏教センターに於て、対面講義、及びオンライン配信のハイブリット形式で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、質疑応答がなされた。ここでは、その第135回から一部を紹介する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一)

『大無量寿経』に、『真宗聖典』（東本願寺出版）で言いますと83頁に、「仏智を疑惑するをもってのゆえに、かの宮殿^{くでん}に生まれて」、そしてその少しあとに「もしこの衆生、その本の罪^{もと}を識^しりて深く自ら悔責^{けしやく}してかの処^{ところ}を離れんと求めば」とあります。親鸞聖人が『教行信証』の化身土の巻で引かれているところです。

光の世界の中に、快楽に埋没するというような在り方をしてしまった場合には、五百年という年月を、仏法を聞くという生活からすると無駄に過ごしてしまうと言われる。楽しみを、快楽を人生の目的とするならば、五百年も楽しい世界にいられるということは価値があるとも言えるわけですが、それは結局、有限の世界に囚われて、有限の楽しみに埋没する。究極的目的がわからない。

ティリッヒ（Paul Tillich 1886-1965）という方が、アルティメット・コンサーン（ultimate concern）ということを使うのですが、究極的関心のことです。「究極的」ということは、人間が感じたり、考えたり、求めたりする、相対的意味や価値、楽しみとかではない。究極的なものに気づく、目覚めるということですが、なかなか目覚める因縁に恵まれるのは難しい。けれども聞法関心に出会うということは、結局、この究極的関心に触れるということなのです。相対的価値に満

足するというのは、この世の意味、人間として有限の命の意味を有限に意味づける。人と比較したり、自分の意味というものをこの世の有限の形の中に意味づけたりしようとする。そういう営みなのですけれど、それは結局、自我、自分ということに囚われて、自分の相対的な意味づけに走ってしまう。そういうことは人間にとってある意味で虚しい。相対的に何かこの世で自分にはこういう体験があったとか、こういう価値を生み出したのだとかということで、自分を意味づけようとすることの虚しさ、そういう思いが湧いてくる。

だから、そういう思いを越えて、本当に満足できるものは何だと、こう問い直したときに、「本の罪を識りて深く自ら悔責して」ということがある。我々は如来の智慧を疑惑している。大悲の智慧は、有限の知恵に対して、何か頼りないと言いますか、我々からするとよくわからない。この自分に執着する、自分の有限なる因縁に執着する。しかしそういう形だけでは存在の真の意味、究極的な意味は満たされない。なかなか難しい問題ですけれども、そうした意味に目覚めるのが、本願の教えだと。本願の教えに出会うということは、無限なる大悲に出会うということ。有限なる因縁をお願いするのではない。不可称不可説不可思議と、こう言われているように、我々からはまったく説くこともできない、考えることもできないような大きなはたらきを信ずる。無限なる大悲というものを頼まずにおれなという心が起こってくるということは、そこに無限の意味、つまりこの世を超えた意味がある。本当にこの世の有限性を超えたようなものを願わずにおれない。そういうものが要求されるということなのだと思います。

「難中の難」ということ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」が昨年の12月、第137回をもって読了した。2023年1月からは親鸞『一念多念文意』の連続講座を開始している。ここでは、「浄土を求めさせたもの」の最終回（第137回）から、その一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

「もしこの経を聞きて信樂受持すること、難きが中に難し、これに過ぎて難きことなし」（東本願寺出版『真宗聖典』〔以下『聖典』〕、87頁）。有限の身を生きているということを取り巻いてくる因縁が、いろいろ変わってくる。無限に変わりゆく状況に、我々も無限に変わりゆく命を生きている。心も変わりゆく。無限にあり得る因縁が、有限の形を取って我々には与えられる。我々はそれをなかなか受け止められずに、苦しみ抜いてしまう。そういう苦しみが起こるわけですが、そこで本願念仏の催しというものに触れずしては、有限がまた迷わされてしまう。

念仏に触れたということは、ある意味で、光明摂取の利益に遇ったということです。阿弥陀の心の光が常に護っている。常に光が護っているということを、我々はいただいているのだと言いながら、我々はそれを忘れてしまう。「煩惱眼を障えて見たてまつるにあたわずといえども、大悲倦きことなくして常に我が身を照らしたまう」（『聖典』、222～223頁）という源信僧都の教えの言葉を、親鸞聖人は『教行信証』の信巻で引文されています。信心を得ていても、我々は忘れる。忘れて生きてしまっている。これが現実の有限性を生きている凡夫の実相です。

我々からすると自力の思いがまた復活してし

まって、自力で切り抜けていこうとするものだから、その自力の思いには大悲の光は見えない。けれども横からはたらく、こう言わざるを得ないような大悲のはたらき方がある。見えない形でもはたらいているということに気づかされる。これに気づく縁が南無阿弥陀仏で、大悲が有限になってはたらいている。名号のはたらきは、無限がはたらくという意味をもっているから、無限が有限を転じて、無限の心に直していく。けれどもまた我々は大悲を忘れて有限の心を生きてしまう。だから名号を一回称えたらそれで済んだとは言えない問題が常に起こっている。

だから、念仏を信ずるといっても、一回称えたらいいとか、多く称えなければならないとかいうのではなくて、念々に煩惱とともに生きているというところに、念々に称名がはたらいてくる。そういう形で「難中の難」という問題もある。難があるけれども自分は乗り越えた、簡単にそうはなれない。「難きが中に難し、これに過ぎて難きことなし」。どこまでも凡夫であるという困難性。如来の大悲からすれば、困難でも何でもないけれども、我々凡夫では凡夫性を抜けることはできない。だから念々にこの本願他力の催しに触れて目覚めていく。そういうことが教えられているのだと思うのです。

これまで『無量寿経』を私のつたない了解で拝読させていただきました。親鸞聖人の教えを明らかにするべく、本願の文をできるだけ丁寧に読みほどこしてみようかと思って始めたことでありました。長い時間がかかりましたけれど、いったんここで『無量寿経』の文章の理解という形では終わらせていただきたいと思います。